

糸ヲ拔去シ爾後毎日外聽道ヨリ綿紗ヲ交換スルモノニシテ若シ創腔内ニ不良ノ肉芽ヲ發生スルトキハ腐蝕或ハ電氣燒灼ヲ行フ

中耳化膿ノ
頭蓋腔内併
發症

第七章 中耳化膿ノ頭蓋腔内併發症

Die intracranialen Komplikationen der Mittelohreiterung.

頭蓋内併發症ハ屢々發來スルモノニシテ急性化膿ニ於ケルヨリモ却テ慢性症ニ多シトス而シテ其發生機轉ハ骨質ノ崩壞ヲ來シ直チニ頭蓋腔内ニ傳播スルモノ最モ多ク又時トシテハ膿ノ神經、血管、迷路窓、導水管或ハ骨ノ先天罅隙等ヨリ侵入スルコトアリ

誘因ハ外傷、頭部ノ振盪、打撃、衝突、膿溜等ナリ或ハ又此ノ如キ機會ニ乗ジテ久シク隱匿セル既存疾病ノ勢ヲ逞フスルコトアリ

硬腦膜炎

硬腦膜炎 Pachymeningitis.

併發病中比較的多キ疾患ニシテ頭蓋骨ノ内板侵蝕セラレテ病毒ハ硬腦膜ニ達シ硬腦膜モ亦共ニ發炎シ肉芽發生、帶綠灰白色ノ膿汁分泌ヲ來ス、

硬腦膜外膿瘍

膿ハ硬腦膜外ニ溜溜シテ膿瘍ヲ形成ス之ヲ硬腦膜外膿瘍 Extraduralabscessト云ヒ尙ホ進ンデ硬腦膜内ニ膿瘍ヲ形成スルトキハ硬腦膜内膿瘍或ハ硬腦膜下膿瘍ト云フ其部位ハ通常鼓室天蓋ニ多シ又橫竇壁ト頭蓋骨ノ間ニ發スルコトアリ之ヲ竇周圍膿瘍 Perisinöser A.ト稱ス

症候

症狀極メテ輕微ニシテ診定スルニ至ラズ乳嘴突起鑿開術ニヨリ或ハ屍體剖檢ノ際ニ發見スルモノアリ、時トシテハ頭痛、嘔氣、不快ノ顔貌、嗜眠、脈搏遲徐、乳頭靜血視神經炎、稀レニハ運動不全麻痺ヲ來ス而シテ中頭蓋窩ヲ犯サレタルトキハ交叉性知覺障害ヲ起シ小腦窩ニ於ケルトキハ項部強直ヲ起ス

豫後

外方ニ破開シ或ハ手術ニヨリテ治癒スルモノアリ或ハ内部ニ向ツテ破潰シ化膿性腦膜炎、腦膿瘍等ヲ起スコトアリ

療法

先ヅ根治手術ヲ行ヒ次デ瘻孔アルカ若クハ變色セル頭蓋骨ヲ廣ク鑿去シ膿瘍ニ達シタルトキハ注意シテ之ヲ搔爬シ沃度防謨綿紗ヲ挿入シテ繃帶ヲ施ス、

腦膿瘍

腦膿瘍 Hirnabscess.

耳性腦膿瘍ハ大脳頰葉ニ於ケルモノ最モ多ク又小脳ニ來ルモ少ナカラズ其大小ハ胡桃大乃至鶏卵大ナルモノアリテ一定セズ屢々囊胞ヲ以テ包裹セラル時トシテハ多發スルコトアリ

症候

膿腦瘍ハ往々殆ンド異常ヲ覺エズシテ久シク經過スルコトアリト雖モ又輕微ノ頭痛發熱食機不振等ヲ伴フコトアリ而シテ外傷手術等其ノ誘因トナリテ全身及ビ病竈症狀ヲ發スルニ至ルコトアリ

A 一般症狀 惡寒戰慄脈搏遲徐緊張兩側視神經炎劇シキ頭痛(強弱及位置變更シ易シ)惡心嘔吐殊ニ胃ノ空虛ノ際(精神變調(歡呼或ハ憂愁等ナリ)又初期ニ於テ日常ノ事物ヲ忘却シ易ク遲鈍嗜眠反對側ノ痙攣腱反射亢進ヲ來シ遂ニ人事不省ニ陥ル

B 病竈症狀 膿腦瘍ノ所在ニ從ツテ異ナリ左ノ如シ(ベルグマン氏)

- 1 左第一頰顛廻轉ニアルトキハ語聲精神聾(聞ユレドモ理解シテ答フル能ハズ)嗅覺脫失ヲ來ス又讀書及計算不能ヲ併發スルコトアリ

病竈症狀

一般症狀

鑑別

ヲ要スルモノ左ノ如シ

- 2 左第三前頭廻轉ニアルトキハ運動性失語症答ヘント欲スルモ口ヲ動カスコト能ハズヲ第二前頭廻轉ニアルトキハ失讀症及ビ失書症ヲ起ス
- 3 後頭葉ノ膿瘍ハ健忘性失語症(物體ノ命名或ハ使用法ノ説明ヲナシ能ハザルガ如キ)及ビ半盲症ヲ發ス
- 4 ローランド氏溝ニアルハ癲癇様痙攣四肢ノ交叉麻痺及ビ顔面神經麻痺ヲ
- 5 大脳脚ニアルハ半身不隨交叉性動眼神經麻痺ヲ
- 6 ワロル氏橋ニアルハ兩側顔面神經麻痺交叉性半身不隨ヲ來ス
- 7 小脳膿瘍ハ失調運動眩暈步行蹣跚眼球震盪羸瘦項部強硬等ヲ起ス又呼吸數ノ著シク減少スルコトアリ是レ呼吸中樞ニ壓迫ノ加ハルガ爲メニシテ甚シキハ呼吸麻痺ヲ起スニ至ル
- 8 其他腦底及ビ内聽道ノ直接壓迫ヲ受クルトキハ爲メニ顔面神經外旋神經動眼神經麻痺ヲ發シ時トシテハ三叉神經痛ヲ起ス

腦膿瘍

1 膿瘍ハ視神經炎ヲ起スコト多ク鬱血乳頭ハ少ナシ之ニ反シ腫瘍ハ必ズ鬱血乳頭ヲ認ム

2 腦膜炎ト類似スレドモ腦膜炎ハ突然起リテ高熱ヲ發シ又他ノ腦神經障害ヲ伴フコト多シ且ツ腦膿瘍ノ腦室ニ破潰セザル間ハ腫瘍ト同ジク腰椎液ハ透明ニシテ白血球、蛋白質ニ乏シク且細菌ヲ有セザルヲ以テ腦膜炎ト判別スルヲ得ベシ

豫後 通常不良ニシテハ多クハ腦室ニ破潰ス、然ルトキハ惡寒、速脈、瞳孔反應消失、昏睡ニ陥リテ斃ル稀レニ手術ニヨリテ九死ニ一生ヲ得ルモノアリ

療法 手術ヲ施スノ外良策ナシ術式ハ先ヅ根治手術ヲ行ヒ後チ、瘻孔ヲ探求シテ其周圍ノ骨ヲ廣ク鑿去シテ骨鉗子ヲ使用スルヲ便利トス、硬腦膜ヲ露出シテ之ヲ切開ス若シ膿ヲ認メザルトキハ顛顛葉ノ下面ヨリ外上方ニ向ヒ約五仙迷深ク切開ス、尙ホ膿ニ遭遇セザレバ種々ノ方向ニ穿刺ヲ行フベシ而シテ膿瘍ヲ開キタルトキハ其竈内ニ沃度防謨綿紗ヲ挿入シテ綳帶ヲ施ス

第一卷圖

左側顱額葉膿瘍



靜脈竇血栓
及膿毒症

右側ハ左側ニ
比スレバ多
ク、男性ハ女
性ヨリ多キコ
ト二倍以上ナ
リ

靜脈竇血栓及膿毒症 Sinus thrombosis et Pyaemia.

原因及病理解剖

中耳化膿及ビ眞珠腫ノ爲メニ骨崩壞ヲ來シ竇壁ヲ犯スニヨリテ發スルモノニシテ壁ハ先ヅ細胞滲潤ヲ來シ處々ニ化膿ヲ起シ屢々硬腦膜外膿瘍ヲ併發ス肥厚セル竇壁ノ表面ハ肉芽組織ヲ以テ被ハレ内皮細胞ハ破壊シ先ヅ内壁ニ血栓ヲ生ジ漸次増大シテ竇内ヲ充填スルニ至ル

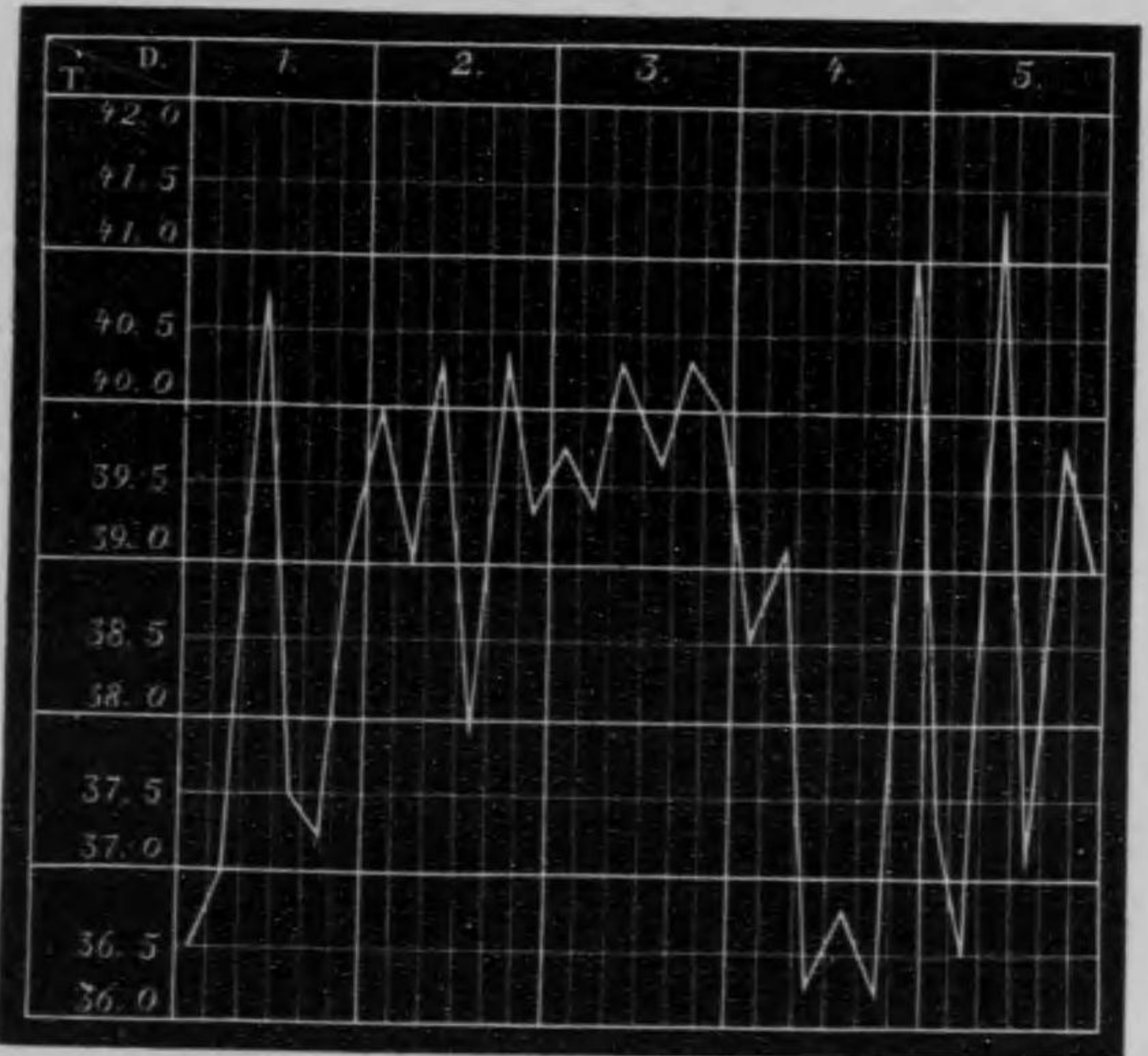
血栓ノ發生スルコト最モ多キハ橫竇及球部ニシテ岩樣竇、海綿竇等ニ來ルコトアレドモ稀レナリ

血栓ハ自然吸收ニヨリテ治癒スルコトアレトモ化膿菌ノ侵襲ヲ受ケテ化膿シ轉移シテ膿毒症ヲ發スルコト多シ

症候

稀レニ著變ヲ呈セザル者モアレドモ多クハ頭痛、嘔吐、嚙下痛、視神經炎、樽血乳頭、眼球震盪症ヲ發ス熱ハ不定ニシテ時トシテハ缺如シ時トシテハ發ス然ドモ若シ血栓膿瘍シテ膿毒症狀ヲ起シタル時ハ惡寒、戰慄ヲ伴フ處ノ高度ノ弛張性熱ヲ特徴トス寒戰ハ十五分乃至半時間、時ト

圖七十五第
型熱症毒膿



部位徴候
 痢脾腫ヲ來ス
 血栓ノ位置及ビ蔓延ノ度ニ應ジテ種々ノ部位的徴候ヲ現ハスモノナリ
 即チ横竇ノ血栓ニシテ乳嘴導血管ヨリ外方ニ進ムトキハ乳嘴突起後上

シテハ一二時間持續スル
 コトアリテ四十度乃至四
 十一度ノ熱ヲ發シ發汗ト
 共ニ平温若クハ以下ニ下
 降ス其最高低ノ温差ハ四
 度乃至五六度ニ及ブ者ア
 リ而シテ發作ハ一晝夜二
 三回或ハ隔日ニ稀レニ二
 三日ヲ隔テテ現ハレ規則
 的ナルアリ不規則ナルア
 リ發作間歇時ニハ通常爽
 快トナル又稀レニ黄疸下

グリー
グセル
症候

グセル
ハルト
氏症候

圖八十五第
剖解處局ノ竇脉靜



縁ニ浮腫疼痛ヲ起ス之ヲグリー
 静脈ニ及ビ外頭靜脈吻合部ノ上ニ生ズルトキハ同側外頭靜脈ニ、コルラ
 プスヲ來シ又吻合部ヲモ閉鎖スルトキハ患側外頭靜脈ハ却テ健側ヨリ
 モ強實トナル之ヲグ
 ルハルト氏症候ト云
 フ此際頭側ニ有痛性
 索狀硬結ヲ觸レ頭首
 ノ廻轉運動ヲ妨ゲ或
 ハ斜頸ヲ來ス若シ頸
 靜脈球ニ生ズルトキ
 ハ迷走神經、副神經、舌
 咽神經ノ麻痺ヲ起シ
 發聲、呼吸、嚥下等ノ障
 害ヲ惹起スルコトアリ

靜脈竇血栓及膿毒症

血栓若シ海綿竇ニ存在スレバ眼瞼浮腫、眼球突出、前頭神經痛、其他動眼神經、滑車神經及ビ外旋神經麻痺ヲ來ス

診斷

麻刺里亞及ビ腸室扶斯ト酷似スル處アリト雖モ、血液検査、ウキ

豫後

危険ナリ但シ早期ニ診斷シ手術ヲ施セバ成績稍佳良ニシテケ

療法

ヨルネル氏ノ調査ニ據レバ大凡五八、四%ノ治癒ヲ認ム
ヒ進ンデ横竇壁ヲ露出シテ之ヲ檢スベシ健全ナル竇壁ハ青赤色ナレドモ若シ血栓アルモノハ稍ヤ綠色ヲ帶ビ指壓ヲ試ムルニ稍ヤ硬固ニシテ抵抗アリ

若シ膿毒症ノ存在スルニ拘ハラズ外見上血栓形成ノ不明ナルトキハ確實ニ消毒セルブラワツツ氏注射器ヲ以テ試験的穿刺ヲ行フベシ、此際穿刺部ニ血栓ナキカ或ハ壁立血栓ナルトキハ血液ヲ吸出シ、若シ膿壞セルモノニアリテハ膿汁ヲ認ムベシ

閉塞性血栓アル際ハ竇壁ヲ切開シテ之ヲ除去シ輕度ノ出血ヲ見ルニ至

化膿性軟腦膜炎

リテ止ム、壁立血栓ニアリテハ豫メ頸靜脈ヲ結紮シテ切開シ、既ニ細菌ノ感染アルモノハ搔爬若クハ患壁切除ヲ行フ
頸靜脈及ビ其球部ニ於ケル血栓ハ豫メ頸靜脈結紮ヲ行ヒ、顔面神經ヲ充分保護シツ、乳嘴突起尖端ヨリ骨ヲ切除シテ靜脈ヲ切開シ沃度防護綿紗栓塞ヲ施ス
其他一般狀態ニ應ジテ、強心劑及ビ規尼涅ノ内服、連鎖狀球菌血清ノ注射等用ユベシ

化膿性軟腦膜炎

Leptomeningitis purulenta.

原因

腦膿瘍、硬腦膜外、アブセス、又ハ靜脈竇血栓ヨリ來リ或ハ單獨ノ化膿性中耳炎ニ續發ス

症候

徐々ニ發スルコトアレトモ通常俄然惡寒、戰慄、發熱(三十九度乃至四十度)ヲ以テ起ルコト多シ時トシテハ熱型不正ニシテ或ハ全ク平温以下ニ降ルコトアリ
頭痛ハ輕微ナルコトアレドモ多クハ劇烈ニシテ患者ハ號泣シ手ヲ以テ

頭首ヲ把攔シ時トシテ打撃スル者アリ多クハ無意識ニ陥ルマデ持續ス
初期ニハ眩暈歩行蹣跚嘔吐項部強直瞳孔縮少譫語搖擗摸床等ノ症
狀アリ後チ瞳孔散大眼臉浮腫共同偏視ケルニヒ氏症狀牙關緊急眼球震
盪症脈搏遲徐偏癱顔面神經及ビ聽神經麻痺膀胱及腸麻痺嬰兒ニ在リテ
ハ大顛門緊張ヲ起シ昏睡ニ陥リテ斃ル時トシテハ治癒スルコトナキニ
非ズト雖モ極メテ稀有ナリ

診斷

腰椎穿刺ヲ施シ腦脊髓液ヲ檢スルトキハ濁濁膿性ニシテ蛋白
白血球ヲ認ム流行性腦脊髓膜炎ハ頭部強直角弓反張口唇ヘルペス等ヲ
來スコト著シキヲ異ナリトス

療法

一般消炎法或ハ乳嘴突起ノ根治的鑿開術ヲ行ヒ硬腦膜ヲ切開
ス

第二編

感音器官ノ疾病

Krankheiten des

Schallempfindendene Apparates.

第一章

迷路ノ疾病

Krankheiten des Labyrinthos.

迷路ノ疾病

迷路ノ疾病ハ原發性ノモノ少ナク多クハ續發性ナリ稀レニハ迷路ノ發
育障礙ニ由ル神經性難聽ヲ來スコトアリ又高齢者ノ聽力減退或ハ職業
的難聽ハ迷路ノ變性ヲ來スニ由ル其他藥物ノ中毒急性傳染病等ニヨリ
テ發ス續發性ノモノハ加答兒性癒着鏡骨強直化膿性中耳炎等ヨリ來ル
コトアリ

迷路ノ疾病ハ視診上特徴ヲ有セズ其診斷困難ナルガ如シト雖モ併發症
ナキトキハ音叉及ヒ談話診斷法ヲ施シ同時ニ聽診或ハ視診シ得ベキ外
中耳部位ノ健全ナルヲ確認スルニヨリテ判定スルヲ得ベシ

迷路貧血

Anämie des Labyrinthos.

迷路貧血

迷路貧血

原因

急性ノモノハ大失血、内聽動脈又ハ基礎動脈ノ狹窄若クハ閉塞ニヨリテ來リ其他海底ノ業ニ從事スルモノ、普通大氣中ニ出デタルトキニ起リ又腦貧血ノ分症トシテ現ハレ慢性ノモノハ全身貧血病(例之ハ白血病、萎黃病ノ如キ)ニ伴ヒ若クハ血管變性、腫瘍ノ壓迫等ニ因ス

症候

急性症ハ高度ノ耳鳴、及ビ難聽、眩暈、惡心、若クハ嘔吐アリ時トシテハ失神スルコトアリ
慢性症ハ耳鳴、難聽、眩暈等ノ外、時トシテハ外聽道鼓膜等ニ貧血ヲ見ルコトアリ

豫後

急性症ハ一般ニ佳良ナリ而シテ原因ノ良否ニ從フテ異ナリ

療法

全身貧血ノ療法ト同一ナリ專ラ滋養物ヲ攝取セシメテ新鮮ノ空氣中ニ在ラシメ強壯劑、鐵劑ノ内服、酒精飲料、一%ニトログリセリンノ至十五滴服用、アミールニトリツトノ嗅引ヲ施スベシ又シユワルゼ氏ハブリースニツ電法ヲ行フテ効アリト云フ

迷路充血 Hyperämie des Labyrinthes.

原因

急性及ヒ慢性中耳炎殊ニ傳染性疾患ニ因スルニ來リ或ハ熱性病、心臟疾患、妊娠、頭部血行障害等ニヨリテ發シ又強呼氣ヲ營ム職業、規尼涅、撒里矢兒酸ノ内服、酒精、煙草ノ亂用、炭酸中毒、精神亢奮、アミールニトリツト、嗅引等ニ由ル、稀レニハ比私的里性、交感神經性ノモノアリ

症候

耳鳴、難聽、眩暈、惡心、若クハ嘔吐ヲ發シ時トシテ耳翼、外聽道、鼓膜殊ニ槌骨把柄部ノ充血ヲ見ルコト、アリ、而シテ耳鳴、難聽ハ一時性ナルアリ持続性ナルアリテ一定セズ

診斷

迷路貧血ト略ホ同様ノ症狀ヲ呈スルモノナレドモ貧血ハ、アミールニトリツト、嗅引ヲ行フトキハ耳鳴止ミ、充血ノ時ハ却テ増劇スルモノナリ又貧血ノ場合ニハ酒精飲料、横臥等ニヨリテ輕快シ、充血ノ際ハ却テ増悪ス

豫後

原因ニ關係アルモノニシテ、全治スルモノアリ又永ク耳鳴及難聽ヲ遺スコトアリ

療法

原因ヲ去リ安靜ナラシメ、人工、カル、ス、泉、硫麻等ノ下劑ヲ投ジ乳嘴部ニ水蛭、頭部、項部等ニ氷囊ヲ用ヒ或ハ脚湯、芥子泥ノ足蹠貼付、臭素

迷路出血

劑ノ内服等ヲ行フ諸症狀永ク持續スルトキハ「ピロカルピン」注射療法、按摩法等ヲ施シテ効ヲ奏スルコトアリ

迷路出血 *Hämorrhagie des Labyrinthes.*

原因 頭蓋底骨傷、強劇ナル頭部ノ震盪、大砲發射、潜水業者ニ來リ其他血管「アテローム」變性、百日咳腎臟炎、白血病、糖尿病、キニーネ中毒、其他急性傳染病ノ際ニ發スル急劇ナル充血等ニ因リテ來ル

症候 突然高度ノ難聴又ハ聾ヲ來シ且ツ耳鳴、眩暈、惡心嘔吐、歩行蹣跚等ヲ伴フ

豫後 出血僅少ナルトキハ吸收セラレ聽力ノ恢復スルコトアレドモ通常不良ナルモノ多シ

療法 安靜ヲ主トシ、頭部ニ充血スベキ原因ヲ除キ、乳嘴部ニ水蛭水囊ヲ付シ下劑ヲ投ズル等都テ充血ノ療法ニ同ジ又沃度加里ノ内服、「ピロカルピン」注射ヲ施シテ吸收ヲ促ス

急性迷路炎

急性内耳炎 又 迷路炎 *Otitis interna acuta s. Labyrinthitis acuta.*

原因 急性傳染病殊ニ猩紅熱、實扶埤里、インフルエンザ、流行性耳下腺炎、流行性腦脊髓膜炎、室扶私、痘瘡等ニヨリテ來ル其他急性中耳炎ニ續發ス

病理解剖 非化膿性ノモノハ初メ螺旋神經節細胞コルチ氏機關、聽神經纖維等ノ充血滲出崩潰ヲ來シ終ニ實質變性「アトロヒ」等ヲ起ス又化膿性ノモノハ多クハ結締織増殖、膜様迷路ノ頹敗ヲ起シ神經末端、コルチ氏機關ライスネル氏膜コルチ氏膜、ローゼンタール神經節等ノ膿浸潤ヲ見ル且ツ神經纖維ノ變性、上皮ノ腫起、色素ノ沈着等ヲ起スコトアリ

症候 突然發熱、顔面潮紅、劇シキ頭痛嘔吐アリ甚シキハ次テ譫語全身痙攣ヲ發シ人事不省ニ陥ルコトアリテ恰モ急性腦膜炎ノ如シ、其醒覺スルヤ通常高度ノ難聴又ハ聾トナリ且ツ眩暈、共同運動機失調アリ

耳鏡検査上鼓室ノ異常ヲ認メズ、音叉検査ヲ施スニ骨導時著シク短縮シ

全耳炎

「ウエベル」試験健側ニ亢進シ、高調音又ノ氣導不良トナル
 又急性傳染病ニ續發スルモノハ内耳中耳共ニ同時ニ發病スルコトアリ
 之ヲ全耳炎、Panotitis ト云フ
 白血病患者ノ約十%ハ聽力障害ヲ起スモノニシテ膜様迷路ノ白血病性滲
 出、淋巴滲潤並ニ出血反應炎ヲ起シ突然メニール氏綜合症狀ヲ發ス
豫後 眩暈蹣跚等ハ輕快又ハ消退シ易キモノナレドモ耳鳴聽力障害
 ハ容易ニ恢復セザルコト多シ
療法 迷路出血、充血等ノ療法ニ同ジ、急性症狀去リタルトキハ、ピロカ
 ルビン注射療法(治療總論參照)沃度劑臭素劑ノ内服、平流電氣ノ應用ヲ行
 フ

慢性迷路炎

慢性内耳炎又迷路炎 Otitis interna chronica s.
 Labyrinthitis chronica.

原因 梅毒ニ因スルモノ最モ多シ其他急性症ヨリ移行シ又慢性中耳
 炎ニ續發シ或ハ脊髓勞、動脈硬化症、糖尿病、腎臟病等ヨリ來ル

梅毒性内耳炎

病理解剖

結締織新生増殖、血管硬化、内聽道又ハ卵圓窓ノ骨膜肥厚
 ローゼンタール氏管ノ神經節細胞核ノ頽敗、骨螺旋板内ニ於ケル聽神經
 削瘦等ヲ起ス

症候

劇シキ耳鳴、難聽、眩暈、歩行蹣跚等ナリ

梅毒性内耳炎

先天的梅毒性ノモノハ不定ニシテ六歳乃至二十歳ノ間
 ニ發ス而シテ角膜實質炎、ハッチンソン氏齒牙異常ヲ呈ス

豫後

概シテ不良ナリ但シ梅毒性ノモノハ他ノ原因ニ比スレバ比較
 的佳良ニシテ殊ニ後天性ノ經過短少ナルモノハ著シク輕快スルコトア
 リ

療法

驅梅毒法ヲ施シ、ピロカルビン注射ヲ併セ行フベシ其他沃度劑及
 ビ臭素劑ノ内服又ハ平流電氣ヲ應用スルコト急性症ニ於ケルガ如シ

迷路震蕩症

迷路震蕩症 Labyrintherschütterung.

原因

頭部或ハ耳部ノ衝突打撃近傍ニ於ケル爆發、大砲發射等ノ爲メ

ニ起ルモノニシテ屢々海軍士官、陸軍砲兵士官等ニ來ル、鼓膜ハ介達性裂傷ヲ蒙ルコトアリ又異常ナキコトアリ

病理解剖 輕度ノモノハ單ニ迷路ノ鬱血、滲漏若クハ終末細胞ノ排列弛緩ニ止マルモ、高度ノモノニアリテハ出血、聽神經、終末器關ノ破壊ヲ來ス

症候 頭痛、眩暈、耳鳴、難聽アリ、高度ノ者ハ惡心、嘔吐若クハ失神ヲ來ス

經過及豫後 輕症ハ暫時ノ後チ乃至一兩日ニシテ治癒シ稍ヤ重キモノハ一ヶ月乃至半歳ヲ經テ聽力恢復スルモ耳鳴ハ持續スルコト多シ

重症ハ諸症輕減セズ加之漸次聽力減弱ス

療法 安靜ナラシメ沃度劑、臭素劑ノ内服、平流電氣應用、ピロカルピン注射等ヲ施ス

メニール氏綜合症狀

メニール氏綜合症狀 Menierescher Symptomencomplex.

突然失神卒倒シ、醒覺後、耳鳴、難聽、眩暈、步行蹣跚、惡心、嘔吐等ヲ發スルヲメ

聽神經中樞ノ疾病

ニール氏綜合症狀ト稱ス

往時ハ前記ノ症狀ヲ發シテ、耳部ノ視診、聽診其他ノ検査法ヲ行フモ證明スベキ變化ヲ認メザルトキハメニール氏ニ從ヒ之ヲメニール氏病又類卒中症ト名ケタリシガ、近來多クノ耳科學者ハ此ノ如キ症狀ヲ發スルハ或ル原因ニヨリテ迷路ニ一定ノ變化、溢血、殊ニ半規管ニ於テヲ生ズルニヨリテ現ハル、症候ナリトシ特ニ病名トナサズ所謂メニール氏綜合症狀ト稱スルニ至レリ

第二章 聽神經中樞ノ疾病 Krankheiten des

Hörnerven und der Hörzentren.

聽神經ノ疾病ハ稀レナリ而シテ多クハ迷路ノ疾病ニ併發ス

充血 硬腦膜ノ充血ト共ニ現ハル

溢血 頭蓋底ノ損傷、白血病等ヨリ來ル

炎症 上行性、炎ハ内耳炎ヨリ波及スルモノニシテ發赤、膿浸潤、神經纖維ノ崩壞、澱粉變性、ヒアリン、砂瘤小體ノ沈着、神經鞘ニ石灰沈着等ヲ來シ

下行性、炎ハ腦膜炎ヨリ來リ、ソノ他傳染病、藥物(キニーネ、サリチル酸等)腎炎、糖尿病ヨリ來ルコトアリ

萎縮 前記諸病ノ結果或ハ基礎動脈、内聽道ノ閉塞(梅毒性骨增殖)腫瘍等ニ由リテ來リ又脊髓勞ノ際ニ現ハル

症候 迷路ノ疾病ト略ボ同一ナリ唯病變ノ聽神經ニ局限スル時ハ眩暈缺如シ上音界ノ減弱スルコト少ナク中等音ニ對スル聽力障害著シ(グラデニゴー氏)

中樞性ノモノハ他ノ神經領域ニ於ケル官能障害アルヲ以テ知ルヲ得ベシ

療法 對症療法

第三章 聾啞 Taubstummheit

聽器ノ官能廢絶シタルモノヲ聾ト云ヒ腦溢血等ヲ起シタル爲メニ談話スルコト能ハザルトキハ啞ト云フヲ得ベシト雖モ吾人ノ所謂聾啞ト稱スルモノハ聾ナルガ爲メニ談話スル能ハザルニ至リシモノヲ云フナリ

聽官ノ完全ナル小兒ハ聲音ヲ聽取シ之ニ倣フテ談話ヲ學ブモノナリ然ルニ先天性ノ聾兒ハ聲音ヲ聽取スルコト能ハザルガ故ニ聾啞トナルハ觀易キノ理ナリ七才以下ニシテ聽器ノ疾病ニ罹リ聾トナルトキハ習得シタル談話ヲ忘却シ、春機發動期ニ達シテ聾トナルトキハ之ヲ忘ル、モノニ非ズ

聾啞ヲ別ツテ先天性及後天性ノ二トス

先天性聾啞 ハ迷路、聽神經中樞器官其他聽器各部ノ缺如若クハ成形異常、變性等ニ由ルモノニシテ母胎生活中ノ疾病或ハ兩親ノ酒家、虛弱、精神病等ニ基因ス近來諸家ノ研索ニヨリテ血族結婚モ亦之レガ原因ヲナスモノナルコトヲ知ルニ至レリ又遺傳ノ關係アルハ疑ヒナキガ如シ

後天性聾啞 ノ最モ多キ原因ハ腦膜炎、流行性腦脊髓膜炎ナリ、其他急性傳染病、化膿性中耳炎、迷路炎等ヨリ來ル

療法 先天性聾啞ハ殆ンド治癒ノ望ミナシ但シ近時ベツオールド、ウルバンチツチユ等ノ諸氏ハ精密ナル聽覺検査ヲ施ストキハ時トシテ猶ホ多少殘音ノアルコトヲ知リ聽取發音ノ方法ヲ實驗シテ効アリシヲ報告

セリ
 後天性聾啞ノ中耳病ニ由リテ發シタルモノハ其初期ニ在リテハ治療ニ
 ヲリテ恢復スルコトナキニ非ズ
 最モ必要ナルハ豫防法ニシテ聾啞ノ由ツテ來ル處ノ原因ヲ知リ之ヲ艾
 除スルニ甞ムベシ既ニ完全聾啞ト斷定セラレタルモノハ聾啞教育法ヲ
 施スノ外ナシ

第四章 比斯的里性聾 Hysterische Taubheit

比斯的里ノ婦人ニアリテ内耳又中樞ニ證明スベキ變化ナク高度ノ難聽
 又ハ聾ヲ來スコトアリ(屢々驚怖ノ爲メニ起ル)稀レニハ聽覺障害ノミ來
 ルコトアレドモ通常種々ノ比斯的里症狀即チ知覺運動障害若クハ精神
 障害ヲ有スルモノニシテ殊ニ注目スベキハ難聽ノ外ニ耳翼ノ知覺麻痺、
 耳鳴、眩暈、自發性疼痛及ビ乳嘴突起ノ壓痛等ヲ訴フルコトナリトス
 聽力検査其他ノ診斷法ヲ行フニ當リ時トシテハ其検査成績殆ンド内耳
 又中樞ノ器質變化ノ存在スル際ニ見ルガ如キコトアリ又時トシテハ吾

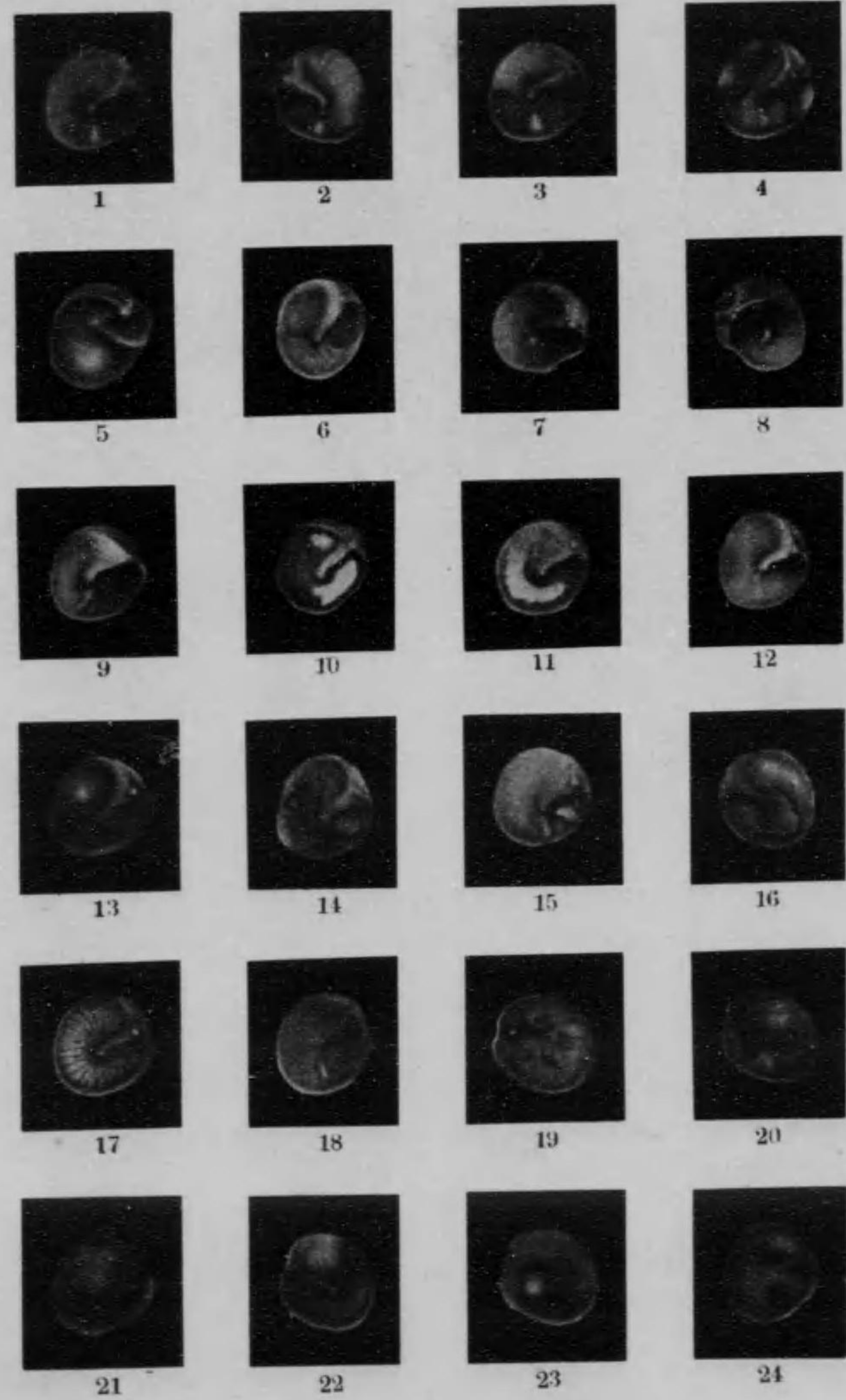
人ノ科學的診斷法ノ學說ト一致セザルモノアリ

第五章 聽器ノ新生物 Neubildungen des Gehörorgans.

耳翼ニ來ルモノハ纖維腫、稀レニ軟骨腫ニシテ耳垂ニハ癬痕、ケロイド、耳
 ノ飾輪ノ刺戟ヲ生ズルコト少ナラズ其他皮樣囊腫、毛細管擴張血管腫、肉
 腫、癌腫等ヲ見ルコトアリ而シテ癌腫ハ耳翼、顚顚骨全部ヲ侵蝕シ迷路ヲ
 破壊スルコト少カラズ乳嘴突起、骨膜ニハ骨腫、護膜腫、クロローム等ヲ生
 ズ
 外聽道及鼓室ニ來ルハ、ポリープニシテ炎症ノ結果ナルコト多シ
 聽神經ニハ神經腫、グリオーム、纖維肉腫等ヲ生ズルコトアリ

耳科學終

(甲) 像 膜 鼓

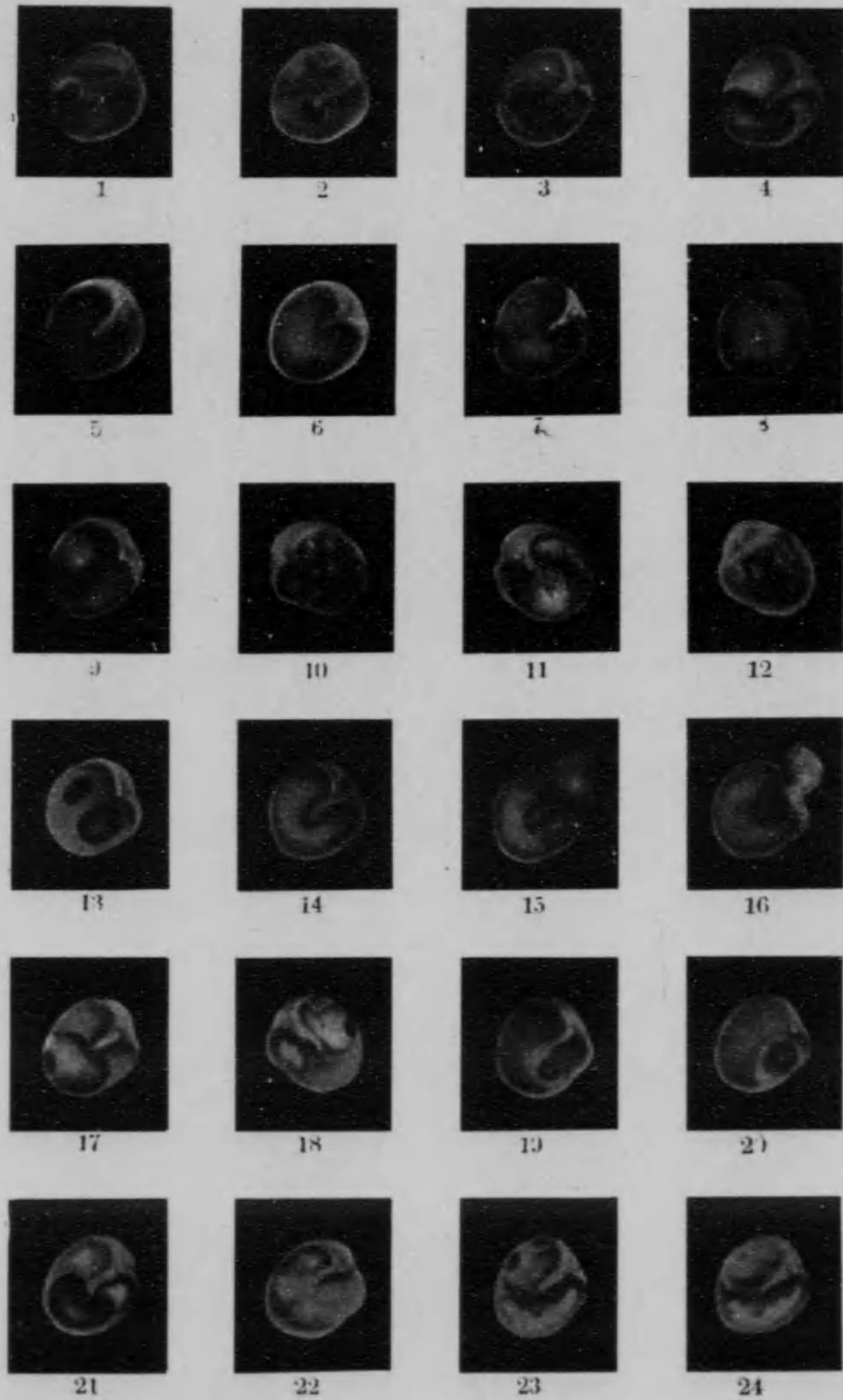


第二着色圖

(ブリュール氏ニ據ル)

- 21 右正規鼓膜 (砧骨馬鐙骨關節、鼓室岬、正圓窓ヲ透見ス)
- 20 右正規鼓膜 (頸靜脈膨隆部透見)
- 19 骨瘤腫 (後壁二個、前壁一個)
- 18 慢性漿液性中耳加答兒 (臍ノ前部ニ於テ水平線ヲ見ル)
- 17 急性漿液性中耳加答兒 (槌骨把柄下部ニ於テ水平線ヲ見ル)
- 16 癒着性中耳加答兒 (鼓膜牽縮、短突起後皺襞隆出、槌柄短縮ノ觀、シユラフネル膜及前下界ニ於ケル點狀光體反射)
- 15 同上、シユラフネル氏膜癒着 (鼓膜高度ノ牽縮、槌柄光體反射歪斜、シユラフネル膜ハ槌骨頭ト癒着)
- 14 癒着性中耳加答兒 (鼓膜乳様潤濁、後半部半月狀潤濁)
- 13 同上 (鼓膜石灰沈着)
- 12 慢性中耳加答兒 (鼓膜潤濁、蹄鐵狀石灰沈着)
- 11 馬鐙骨強直 (鼓膜ハ槌柄ノ後部透明、鼓室岬ヲ透見ス)
- 10 室岬部充血
- 9 急性鼓膜炎 (鼓膜發赤、後部水泡、前下界小出血)
- 8 慢性顆粒性鼓膜炎 (潤濁、鼓膜下部小顆粒、鼓膜損傷(前上界ノ穿孔、孔緣及周圍出血))
- 7 同上 (下界ノ穿孔、孔緣出血鼓膜充血)
- 6 急性單純中耳炎 (放線狀血管及把柄血管充血)
- 5 同上 (把柄不明、上皮剝離)
- 4 同上 (鼓膜潮紅、溢血、短突起前上界ニ突隆)
- 3 急性化膿性中耳炎 (後上界水泡狀膨隆、把柄不可見、鼓膜潮紅、溢血アリ)
- 2 同上 (後界暗赤色膨隆、把柄被覆)
- 1 同上 (後上界乳嘴狀膨隆、尖端ニ膿汁ノ滲漏ヲ見ル)
- 24 同上 (鼓膜潮紅把柄不可見、前下界球狀膿瘍)
- 23 同上 (鼓膜潮紅把柄上部短突起ヲ見ル、前下界大痙攣大穿孔)

(乙) 像 膜 鼓



第三着色圖

(ブリュール氏ニ據ル)

- | | | | | | | | | | | | |
|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 慢性化膿性中耳炎(鼓膜潤濁、牽縮、臍後部ノ圓形穿孔、鼓室粘膜炎潮紅) 同上(把柄下部ノ小腎形穿孔、後上界ニ砧骨馬鐙骨關節) 同上、再燃(腎形穿孔、孔縁肉芽、鼓室粘膜炎潮紅) 同上(腎形大穿孔) 同一、猩紅熱性(周縁マテ鼓膜脫失、把柄穿孔部ニ突出、後上界ニ砧骨馬鐙骨關節、後下界ニ卵圓窓ヲ見ル) 同一(周縁マテ鼓膜脫失、把柄尖端鼓室脚ニ癒着、後上界ニ鐙骨頭ヲ見ル、砧骨長脚缺如、鼓室底ノ肉芽) 同上(シユラブネル膜部マテ鼓膜缺損、後下界正圓窓窩、後上界鐙骨頭) 同上(鼓膜把柄砧骨全部脫失、鼓室底ノ肉芽後上界鐙骨頭、後下界正圓窓窩) 同上(ボリブ標息肉、鼓膜缺如、槌骨殘部) 同上(鼓室粘膜炎顆粒狀) 同上、コレステアトーム(鼓膜上縁マテ缺損、槌柄端鼓室脚ニ癒着鼓室粘膜炎上皮變性、後下界顆粒、後上方ニ眞珠腫膨出) 同上(槌柄砧骨全脫失、鼓室粘膜炎數個ノ顆粒、上皮新生) 同上(重複穿孔) 同上(シユラブネル氏膜穿孔、砧骨カリエス) | | | | | | | | | | | |
| 24 | 23 | 22 | 21 | 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 |
| 同上(シユラブネル氏鼓穿孔(息肉)短突起ノ上部ニボリブ、鼓室上腔骨部缺損) 同上、コレステアトーム(シユラブネル氏膜、鼓室上腔骨壁缺損、コレステアトーム塊外聽道ニ突出) 同上、遺殘(乾性腎形穿孔、後下界正圓窓窩、鼓室後部ニ血管アリ) 同上(後上界穿孔、槌骨砧骨關節、正圓窓窩、前上界石灰沈着) 同上、癒着性癍痕(鼓膜牽縮、前下界ハ鼓室脚ト癍痕癒着) 同上(前部ニ於テ鼓室ニ癒着セル陷沒シタル癍痕) 同上(前上界後上界ノ石灰沈着、槌柄下部ニ腎形易動性癍痕) 同上(癒着性癍痕槌柄鼓室脚ニ癒着) 同上(半月形石灰沈着、後上界癍痕砧骨鐙骨關節) 同上(ボリブ氏法應用後ノ十五圖ノ癍痕、癍痕ハ囊胞狀膨隆諸處消失) | | | | | | | | | | | |

鼻咽喉氣管病學總論

一般原因論

第一編 一般原因論 *Allgemeine Aetiologie*

兩性 上部氣道ノ疾病ハ女性ニ於ケルヨリハ男性ニ多シ是レ畢竟氣候ノ變換ニ遭遇スルコト又ハ飲酒喫煙聲音使用等ノ關係ニ因ルナルベシ

年齡 幼少ノ者ハ上部氣道ノ疾病ニ罹リ易キ素因ヲ有ス(腺病質、氣候ニ習慣セズ、急性傳染病ニ襲ハレ易キ爲メ)殊ニ春機發動期ニ著シ、高老者モ亦抵抗力衰凋ノ爲メニ犯サレ易シ

遺傳 遺傳ノ關係アルコトハ疑ヒナシ鼻咽喉腺增殖症、鼻加答兒等ハ其顯著ナルモノナリ

感冒 感冒ナルモノ、義解ハ明瞭ナラズト雖モ而モ上部氣道ノ疾病ヲ誘起スルニ重要ノ原因的關係ヲ有スルモノトシテ認定セラル即チ全

身又ハ項頸部、足部ノ如キ一部ノ冷却、濕濡隙風、天候劇變、空氣濕度ノ急變、烈風、熱帶地ノ滞在等ニヨリテ好デ鼻、咽喉、氣管、氣管枝等ノ炎症ヲ惹起シ易キハ人ノ知ル處ナリ

非衛生的關係

濕氣多ク、日光不充分、換氣裝置不備ノ家屋ニ住居シ或ハ室内ノ温度高キニ過ギ或ハ衣服ノ厚薄不適當若クハ運動不足等又狹隘ノ「カラ」頸卷等ノ壓迫ハ上部氣道ノ疾病ニ罹リ易カラシム

營養及血行障害

腺病、萎黃病、貧血、多血、肺臟、心臟、腎臟並ニ消化器ノ疾病等ハ上部氣道ノ疾病ヲ誘發スルニ便宜ヲ有ス

深部呼吸器ノ疾病

慢性氣管枝加答兒、肺氣腫、肺勞等ハ管ニ上部氣道ニ蔓延スルノミナラズ營養及血行ノ障害ヲ起スガ爲メニ抵抗力薄弱トナリテ上部氣道ニ發病スルコト容易ナリ

神経系疾病

上部氣道ニ於ケル各種ノ痙攣及麻痺ハ屢々中樞又ハ末梢ノ神經障害ニヨリテ發スルモノナリ例之バ「ヒステリ」脊髓勞、散在性硬化等ノ如シ

急性傳染病

就中實扶垤里、猩紅熱、麻疹、室扶斯等ハ上部氣道ニ於テ

各種ノ炎症ヲ起ス好機トナリ加之此部ハ急性傳染病ノ原發地トナルコト多シ

慢性傳染病

梅毒、結核、狼瘡、癩病等ハ皆上部氣道ノ疾病トシテ現ハル、モノナリ

嗜好品

喫煙、飲酒及苛烈ノ飲食品等ノ爲ニ生ズル疾病モ亦頗ル多シ

微菌

上部氣道ニ於ケル實扶垤里、蜂窩織炎、猩紅熱、結核等ハ微菌ノ直接侵入ニヨリテ發起スルハ疑ヒナキコトニシテ其他加答兒、性安魏那、急性扁桃腺炎、オツエーナノ如キモ亦微菌ノ侵入ニヨリテ發スルガ如シ

職業的原因

寒熱空氣ノ呼吸又ハ塵芥多キ不潔ノ空氣或ハ種々ノ瓦斯ノ吸入若クハ異物ノ侵入等ハ直接ノ原因トナルモノニシテ例之バ消防夫、火夫、機關士、鍛冶工ノ如キ又化學的製造業者、石工、烟突掃除夫、製粉業、石炭工、煙草製造人、セメント工等ハ上部氣道ノ病ニ罹リ易シ

毒物

或ル毒物殊ニ沃度、鉛、水銀、砒素等ハ粘膜ノ急性及慢性炎症ヲ起シ往々浮腫、筋麻痺ヲ來スコトアリ飲酒、喫煙等モ同ジク此部ニ算入スルヲ得ベシ

發聲 不適當及び過度ノ發聲ハ喉頭ノ疾病ヲ來シ易シ例令バ教師謠吟者士官俳優說教者糶賣業者等ニ於テ見ルガ如シ

一般症候論

第二編 一般症候論 Allgemeine Symptomatologie.

全身症狀

第一章 全身症狀 Allgemein Befinden.

主トシテ急性炎症ニ於テ現ハル、モノナレドモ亦慢性症ニモ來ルコトナシトセズ熱ハ急性、加答兒性、化膿性及ビ纖維性炎症ニアリテハ通常三十八度五分乃至三十九度ニ昇騰スルモノニシテ若シ膿瘍ヲ形成スルトキハ尙ホ高度ニ達スルモノナリ
其他頭痛、眩暈、倦怠、精神機能障害等ヲ起スモノニシテ此症狀ハ慢性症ニ發スルコト多ク殊ニ鼻及鼻咽腔ノ疾病ニ多シ

呼吸障害

第二章 呼吸障害 Respirationsstörungen.

上部氣道ハ呼吸氣ノ通路ナルガ故ニ若シ此ノ部ニ異常アルトキハ呼吸障害ヲ發スルハ當然ノ理ナリ而シテ其輕重強弱ハ罹病部位或ハ病性ノ如何ニヨリテ一様アラズ

鼻狹窄 Nasalstenose 鼻道及ビ鼻咽腔ノ閉塞スルトキハ空氣ハ自由

全身症狀 呼吸障害

ニ通過スルコト能ハザルモノニシテ完全及ビ不全狭窄ヲ來ス鼻腔内ハ生理的狀態ニ於ケル呼吸道ノ廣狹一定不變ノモノニ非ザルガ故ニ輕微ノ粘膜腫脹モ直チニ呼吸障害ヲ喚起スルニ足ルベク之レニ反シ稍高度ノ腫脹モ著シキ狭窄ヲ感ゼザルコトアリ

鼻狭窄ハ鼻粘膜ノ加答兒性腫脹ニヨリテ來ルコト多シ其他鼻茸腺增殖症臭鼻ニ於ケル分泌物乾固又ハ先天後天性骨及ビ軟骨ノ變化即チ鼻中隔彎曲等ハ鼻通氣障害ヲ起スモノナリ鼻孔前庭部ノ狭窄ハ瘰癧收縮ニヨリテ來ルコトナキニ非ズト雖モ稀レニシテ之レニ反シ鼻腔内ノ狭窄ハ頗ル多シ

鼻狭窄ハ片側ナルアリ兩側ナルアリ又持續性ナルアリ間歇性ナルアリ或ハ左右交換性ナルアリテ其頻回交換性ニ來ルモノハ血管運動神經性鼻炎ニ於テ最モ多ク見ル處ナリトス

鼻狭窄ハ之ヲ他覺的ニ認識スルコトヲ得ベシ即チ輕度ノモノニアリテハ呼吸ニ當リテ狭キ腔隙ヲ通過スル空氣ノ雜音ヲ聽取ス而シテ其雜音ハ呼吸ニ於ケルヨリモ吸氣ノ際ニ著シ

鼻狭窄ハ他覺的ニ認識スルコトヲ得

稍狭窄ノ強キモノハ開口シテ口呼吸ヲ營ムヲ見ルベク殊ニ鼻咽腔腺增殖ノ強大ナルモノニアリテ著明ナリ又口呼吸ハ睡眠ノ際ニ著シ睡眠中ハ軟口蓋ノ振動激シク鼾聲著明ナルモノニシテ是レ臥位ニ在リテハ鼻咽腔内ノ粘膜ニ血液充盈スルト粘液流下セズシテ其部ニ滯留スルトニ基因ス

又鼻狭窄アルトキハ吸氣ニ際シ鼻翼ハ中隔ニ向ツテ牽引セラレハ見レベシ之レ鼻翼筋ノ弛緩ニ由ルナリ但シ鼻狭窄ノ爲メニ鼻翼ノ吸引セラルハニ非ズシテ鼻翼ノ弛緩ト鼻腔内ノ狭窄ト相關聯シテ鼻呼吸障害ヲ起スコト少ナカラズ

若シ鼻粘膜ニ異常アリテ其吸氣ヲ温メ或ハ濕潤ナラシメ氣中ノ塵芥及病芽ヲ除去スル等ノ生理的作用停止スルトキハ咽喉氣管及ビ氣管枝ノ加答兒ヲ喚起シ易ク又小兒ニ在リテ強度ノ鼻咽腔腺增殖症其他ノ疾病ニヨリテ鼻通氣ヲ全ク沮碍スルトキハ胸廓發育不全鼻骨口蓋等ノ變形ヲ來ス

其他鼻閉塞アルトキハ舌乾燥シ舌苔ヲ生シ精神遲鈍トナルノミナラズ

特ニ哺乳兒ニ於テハ極メテ危險ノ衰弱ニ陥ルコトアリ何トナレバ初生兒ハ哺乳ニ際シ鼻呼吸ヲ營マントスルモ能ハズ爲メニ反復哺乳ヲ中止シテ號泣シ甚敷ハ竟ニ哺乳セザルニ至ルモノナレバナリ

喉頭狹窄

Laryngostenose

喉咽狹窄ハ呼吸ニ最モ必要ナル喉頭ノ一

部即チ聲門ニ病的變化ノ限局スル時ニ來ルコト多シ然レトモ假令他覺的所見ハ喉頭狹窄ト認ムベキ情態ニアル人ト雖モ著シキ呼吸困難ヲ來サザル事アリ是レ一ハ聲帶外轉作用強盛ナルト一ハ極メテ徐々ニ狹窄ノ進行スルニヨリ狹隘ナル聲門ヨリ呼吸スルニ慣ル、爲メニシテ若シ肺ニ異常ナキ時ハ驚クベキ高度ノ聲門狹窄アルニモ不拘毫モ狹窄症狀ヲ發セザルモノヲ實見スルコト少ナカラズ(但シ小兒ニ在リテハ通常此ヲ以テ律スベカラザルモノトス)然レドモ急速ニ狹窄ノ進行スルトキハ比較的善ク發育シタル喉頭ニ在リテモ直チニ狹窄症狀ヲ起スモノニシテ先ヅ輕度ノ笛聲ヲ發ス此笛聲ハ最初ハ吸氣ニノミ聽取スルモノナリ而メ狹窄ノ漸次増進スルヤ喉頭ハ呼吸スル毎ニ上下運動ヲ營ミ副呼吸筋ノ作用強盛トナリ開口、鼻翼緊張並ニ顔面充血ヲ見ルニ至ル尙一層狹

窄ノ進行スルトキハ顔面チアノーゼ、苦悶前胸部及上腹部ノ陥沒ヲ呈スルモノナリ

喉頭狹窄ハ急劇ニ起ルハ急性粘膜炎ニ基因スルモノ多ク殊ニ實扶埤里及ビ其他ノ傳染病ニヨリテ來リ緩慢ニ發スルハ稀ニシテ癩痕形成腫瘍、聲帶麻痺等ニ因ルモノナリ

氣管狹窄

Trachealstenose

氣管狹窄ハ喉頭狹窄ニ於ケルト略ボ類似

ノ状態ヲ呈ス只此場合ニ於ケルモノハ喉頭ノ上下運動僅少ナルカ或ハ時トシテ全ク缺如シ又狹窄雜音ハ呼氣ニ著明ニシテ喉頭狹窄ノ際ニ在リテハ吸氣ニ著明ナルヲ以テ區別スルヲ得ベシ

咳嗽

Husten

一種ノ呼吸障害ニシテ急劇衝突性ノ呼氣運動ト見做ス

ベク主トシテ喉頭及氣管ノ疾患ニヨリテ屢々發生スル症候ナリ又咽頭ノ疾病ニ來ルコト稀ナラザレドモ鼻ノ反射刺戟ニヨリテ起ルハ例外トス

聲咳

Räusperrn

モ亦咳嗽ト同ジク強キ急速呼氣ナレドモ咳嗽ヨリハ

稍隨意的ノ性質ヲ有ス聲咳ヲナスニ當テハ呼氣流先ヅ咽腔ノ後壁ニ向

ツテ赴キ後チ舌根ト口蓋帆ノ間ヲ流レ出ツル者トス咽腔内ニ疾病アリテ分泌多ク且ツ分泌物潴溜ノ爲メ恰モ異物様ノ感ヲ生ジ患者ハ之ヲ除去セント欲スルニヨリテ發生ス

噴嚏 Niesen ハ突然口蓋帆開張シテ通路ヲ鼻腔ニ生ジ呼氣ノ急劇ニ鼻腔ヲ通ジテ进出スル一種ノ不隨意的呼氣運動ニシテ此症狀ハ主トシテ鼻腔ノ疾病ニ發生スルモノナリ殊ニ急性鼻炎、神經性鼻炎ニ來ルコト多シ

其他鼻腔及鼻咽腔病ニヨリテ屢々著シキ鼾聲及ビヒゲナ吸鼻ヲ發スルコトアリ

第三章 聲音障害 Stimmstörungen.

聲音障害

嘶嘎 Heiserkeit (Rauedo). 嘶嘎ハ聲音不純ナルモノヲ云ヒ聲帶振顫ノ正規ナラザルニ因テ起ルモノナリ其強弱ノ度一樣ナラズ輕度ナルハ聲音ヲ使用スルコト久シキニ渉ル時即チ演說謠吟等ニ際シテ發シ稍々強度ノモノハ日常ノ談話聲音ノ鈍濁スルモノアリ嘶嘎ハ聲帶自身ノ疾

病ニハ殆ンド缺如スルコトナキ症狀ナリ其他又遠隔ノ部位ニ疾病アルトキ或ハ近圍ノ腫脹、潤浸、浮腫等ノ爲メニ聲門閉鎖セザルカ又ハ不全閉鎖ニヨリテ發スルコト少カラズ

失聲 Aphonie 失聲ハ嘶嘎ノ一層高度ナル症狀ニシテ聲帶運動セズ毫モ音ヲ發セザルガ故ニ患者ニ接近セザレバ談話ヲ聞クコト能ハズ失聲ハ聲帶ノ種々ノ病的變化若クハ全麻痺ニヨリテ起ルモノニシテ此全麻痺ハ反廻喉頭神經ノ器質的變化及ビ「ヒステリー」ノ如キ官能的障害ニヨリテ生ズルモノナリ

重複聲音 Diphtonie 重複聲音トハ同時ニ二種ノ調音ヲ生ズルニヨリテ發スル者ニシテ聲帶ハ發聲時二個ノ不等振顫部ニ區劃セラルルガ故ナリ此症狀ハ聲帶ノ遊離緣ニ於ケル謠人結節又ハ其他ノ小新生物或ハ結節様肥厚症等ニ發スルコト多シ又ステールク氏等ハ反廻神經麻痺ニヨリテ來ルヲ得ベシト云ヘリ

管聲 Fistelstimme 管聲ハ異常ノ高調音ニシテ恰モ女子ノ音聲ノ如ク又去勢音 Castrationsstimme ノ如キモノヲ云フ此ノ症狀ハ多クハ喉頭筋ノ

聲音障害

使用不適當ナルガ爲メニ聲帶ノ官能障礙ヲ來シ中及低調ニ必要ナル緊張ヲナシ能ハザルニヨリテ現ハル、モノナリ

閉塞性鼻聲 Rhinolalia clausa 閉塞性鼻聲ハ鼻腔又ハ鼻咽腔ノ粘膜

腫脹若クハ新生物等ノ爲メニ其容積減少セラレ、ニ由リテ發スルモノニシテ著明ナル聲音變化ヲ來ス所謂閉塞性鼻聲ナリ

鼻ノ前部ニ於テ高度ノ狹窄又ハ閉鎖アルトキハ聲音ハ彼ノ通常急性鼻加答兒ニ於テ現ハルルガ如キ鼻調ヲ帶ブルモノニシテ此音聲ノ性質ハ

鼻腔内及ビ咽腔内ニ起ル共鳴ニ由ルモノトス何トナレバ音波ハ鼻腔ヨリ遁逃スルコト容易ナラザルガ故ナリ之レニ反シ先天性後鼻腔閉鎖、口

蓋帆ノ癒着、鼻咽腔腺增殖症等ノ爲メニ鼻ノ後部或ハ鼻咽腔ノ閉塞スルトキハ談話聲音ハ共鳴少ナク殊ニm m gノ聲音ハ著シク變化スルモノニ

シテ例ヘバ「慢性」ハ「バウンセイ」先月ハ「ゼツグツ」ト變ズルガ如シ

開放性鼻聲 Rhinolalia aperta 開放性鼻聲ハ談話ノ際鼻咽腔閉鎖不可能ニシテ空氣ノ多量ニ鼻腔ヨリ遁出スル爲メニ起ルモノニシテ等シク鼻調聲音ナレドモ前項ノ閉塞性鼻聲ト異ナリ其特性トスベキハ諸母

音ノ鼻音ヲ帶ベルト終結語ノ不明瞭ナルコトナリ此聲音異常ヲ起ス最も多キ原因ハ口蓋ノ全麻痺及ビ不全麻痺、口蓋ノ穿孔、口蓋破裂並ニ習慣之レナリ

第四章 分泌障害 Sekretionsstörungen.

分泌障害

粘膜ノ分泌ハ粘膜ノ表面ヲシテ僅カニ湿润ヲ保タシムルヲ以テ生理的トス然ルニ病的状態ニ在リテハ殆ンド毎常分泌過多ヲ起スモノニシテ且ツ屢々其分泌物ノ性質變化スルモノナリ而シテ異常ニ減少スルハ極メテ稀レナリ

分泌過多

顯著ノ分泌過多ヲ來スハ鼻ノ疾病ニ多ク殊ニ血管運動神經性鼻炎ノ症状トシテ來ルモノハ稀薄水様ニシテ其量極メテ夥シ

分泌物變性

分泌物ノ性質變化ハ通例膿性分泌ノ場合ニシテ多クハ極メテ粘稠ナリ且ツ容易ニ乾燥ノ傾向アリテ硬固ナル痂皮ヲ結ブコトアリ之レ鼻及鼻咽腔ニ於ケル疾病即チ「オツエナ」等ニ見ル處ナリトス上部氣道粘膜ノ分泌物ハ塵芥ト混和スルトキハ黒色トナルモノナリ若シ綠色ヲ帶ブレバ

分泌障害

一定ノ微菌ヲ混ジ赤色若シクハ褐色ヲ帶ブルトキハ血液ヲ混ジタルモノト知ルベシ若シ又鼻粘液膿性ニシテ臭氣甚敷ハ副鼻腔ノ疾病、眞正臭鼻、梅毒若シクハ癌腫等ニ多シ

上部氣道粘膜分泌物ノ增量且ツ變性シタルモノハ原發部ニノミ滯留スルモノニ非ズ深ク流下シ易キモノニシテ遂ニ深部呼吸器ノ續發性疾病ヲ起スコト少カラズ故ニ呼吸器ノ各部ニ變常アルトキハ必ず先ツ上部ヨリ治療ヲ施スヲ適法トス何トナレバ吾人ハ往々上部氣道ノ局部治療ニヨリテ深部呼吸器病ノ恢復スルヲ實驗スルコト稀ナラザレバナリ上部氣道ニ於ケル分泌物ハ其大部分若クハ幾分ハ隨意ニ又ハ不隨意ニ排除セララル、モノナリ例之バ鼻腔ニ於ケル者ハ前鼻孔ヨリ自然ニ流出シ時トシテハ噴嚏ニヨリテ或ハ擗拭ニヨリテ除去セラレ、鼻咽腔ニ於ケルモノハ吸、吸作用ニヨリテ、咽頭ニ於ケルモノハ警咳、咳嗽ニヨリテ排除セララル、ガ如シ

第五章 出血 Blutung.

出血

上部氣道ノ潰瘍性疾病及ビ惡性腫瘍ハ屢々出血ス殊ニ鼻粘膜ヨリスルモノヲ以テ著シトス又硬固トナレル痂皮ヲ剝離スルトキモ出血スルモノナレドモ此際通常單ニ分泌物中ニ血條(血線)トシテ顯ハル、ニ過ギズ吾人ガ屢々實見スル處ノ劇シキ鼻粘膜出血即チ衄血 Epistaxis ハ一ハ鼻粘膜ノ脈管系統ノ特有ナルト一ハ血管ノ粘膜表層ニ存在スルノミナラズ極メテ損傷シ易キ部位ニアルガ爲メナラズンバアラス然レドモ亦局所的原因ハ極メテ微弱ナルカ或ハ全ク證明スルコト能ハザルモノニシテ尙ホ且ツ著シキ衄血ヲ來スモノアリ所謂習慣性衄血之レナリ此ノ如キ場合ハ其原因ヲ不明素因若クハ遠隔部ニ於ケル疾病ニ求メザルベカラズ即チ心臟病腎臟病、肺結核等ノ如キ或ハ血管ノ脆碎性例之バ、アテローム變性其他血友病 Haemophilie 等ヲ考フルノ適當ナルヲ信ズ

第六章 運動障害 Mobilitätsstörung.

運動障害

痙攣 殆ント喉頭ノミニ來ルモノニシテ且ツ通常小兒ニ於テ見ル處ナリ(喉頭痙攣 Laryngospasmus)

出血 運動障害

麻痺不全麻痺 軟口蓋ニ於テ實扶坪里ノ結果或ハ半身不隨ノ一症候トシテ現ハレ又脚氣患者ニ發スルコトアリ通常咽頭ノ後壁或ハ側壁ニ來ルハ稀ナリ喉頭ニ於テハ麻痺ヲ起スコト稀ナラズ或ハ筋ノ炎症性疾
病ニヨリテ來リ或ハ末梢及ビ中樞性神經系統ノ異常ニヨリテ發スルモノトス喉頭麻痺ハ別項ニ詳述スベシ

第七章 知覺障害 Sensibilitätsstörung.

神經痛 Neuralgien 稀レナリ多クハ鼻副竇ノ疾病ニ現ハル

疼痛 Schmerz 急性蜂窩織炎又ハ悪性腫瘍潰瘍性疾病「ヒボコンデリ」ヒステリー等ニ來ルコト多シ

知覺過敏 Hyperästhesie ハ甚ダ多ク見ル處ニシテ殊ニ鼻咽頭ノ疾

病ヲ有スル神經質ノ患者ニ於テ著シ

知覺脫失 Anästhesie ハ只眞正鼻鼻ニ來ルコトアレドモ咽頭及喉頭ニ於テハ稀レナリ若シ咽頭ニ知覺脫失アルトキハ通例中樞神經系ノ疾病散在性硬化、延髓球麻痺若クハ「ヒステリー」等ノ爲メナルコト多シ

知覺障害

反射神經症

知覺失常 Parästhesie ハ通常咽頭疾患ニ於テ殊ニ神經質ノモノニ現ハル、症候ニシテ通例異物様感ヲ覺ユルモノナリ而シテ實際ノ患部ヨリモ遙ニ下部ニ當リテ感ズルヲ常トス

第八章 反射神經症 Reflexneurosen.

反射神經症ヲ理解セント欲セバ先ヅ上部氣道粘膜ノ生理的關係ニ於ケル種々ノ反射作用ヲ知ルヲ要ス例之バ鼻粘膜ヲ刺戟スルトキハ噴嚏、流涙ヲ起シ咽喉粘膜ノ刺戟ニヨリテ咳嗽ヲ來スガ如シ而シテ此反射神經症ハ鼻ノ疾病ニ因リテ起ルコト最モ多クシテ鼻性反射神經症ト稱ス
鼻性反射神經症ハ生理的ノ反射作用ニ於ケルガ如ク求心性知覺神經ノ刺戟ニヨリテ中樞神經系ヲ通過シ遠心性神經ニ傳達シ運動分泌若クハ血管運動等ノ官能障害ヲ起スモノナリ

A 運動性反射神經症 Motorische R.

喘息 運動性反射神經症ノ第一位ニ位スルモノニシテ初メフオルト
リニー氏 Volklini (1871) ハ鼻茸ニヨリテ來ルト云ヒ次デハツク氏 Hadk

運動性反射神經症

知覺障害 反射神經症

(1882) ハ其他ノ種々ノ鼻病ニヨリテ來ルコト屢々ナルヲ證明シタリ本症ハ男性ニ多キモノニシテ發作性呼吸困難ヲ起ス但シ鼻腔狹窄強度ナルモ必ズシモ發作スルモノニ非ズ却テ輕度ノ狹窄ニシテ高度ノ喘息ヲ惹起スルコトアリ

痙攣性咳嗽 *Hustenkrampf* モ亦稀レニ鼻ノ疾病ニヨリテ起ルコトアリ甚ダ稀レニ咽喉ノ疾病ニヨリテ起ル

痙攣性噴嚏 *Nieskrampf* ハ急性鼻加答兒ノ初期又ハ慢性加答兒ニ現ハル、モノナリ

聲門痙攣 *Glottiskrampf* ハ咽喉病ニヨリテ來ルコトナシ稀レニハ鼻病ノ反射作ニ用ヨリテ發シ喉頭病ニ因リテ發スルコト最モ多ク殊ニ小兒ニ於テ著シ

顔面神經痙攣、癲癇様發作 時トシテ鼻病ニ由テ來ル

B 血管運動性反射神經症 *Vasomotorische R.*

枯草熱 *Häufever.* (枯草鼻感冒) 英國及米國ニ多シ常ニ男性ニ多ク富

血管運動性反射神經症

分泌性反射神經症

裕ノモノ進歩セル人民ニ多シト云フ而シテ四十歳前ノ人ヲ侵シ又殆ンド常ニ神經質ノ人ニ來ルモノニシテ且ツ遺傳性ヲモ有ス枯草熱ノ發生スルヤ一定ノ時期アリテ必ズ夏季ニ來ルモノナリ (*Katarrhus aestivus*) 尤モ英國ニ於テハ初夏ノ候ニ米國ニ於テハ晩夏ノ候ニ若クハ秋ノ初メニ發スルコト多シト云フ此ノ如ク發生ニ一定ノ時期アルハ或ハ草花粉ガ鼻粘膜ニ作用ヲ及ボス爲メニ因ルナラン而シテ本症ハ通例粘膜ヲ侵スモノニシテ急性加答兒ヲ起ス、症狀ハ鼻閉塞、高度ノ水樣液分泌亢盛、烈シキ噴嚏、眼結膜ノ充血、前額ノ壓重感ヲ伴フ流涙、及ヒ全身異和等ナリ其他屢々喘息發作或ハ喘息様發作ヲ起ス

一過性紅疹 *Erythema fugax* ヲ起スコトアリ外鼻又ハ顔面局部ノ外皮ニ發作性充血ヲ呈スルモノニシテ鼻粘膜加答兒ノ結果トシテ現ハル、症候ナリ殊ニ亢奮時、食時、飲酒時若クハ月經時ニ於テ著シ

偏頭痛 *Migräne* ハ時トシテ鼻腔或ハ副鼻腔ノ疾病ニ現ハル

分泌性反射神經症

二〇九

C 分泌性反射神經症 *Secretorische R.*

血管運動神經ノ障害ニヨリテ鼻粘膜分泌機能亢進シテ多量ノ水様液ヲ漏シ(鼻漏 Hydrorrhoea nasalis)又同時ニ流涙稀レニハ流涎ヲ來スコトアリ

D 爾餘ノ反射神經症 Andere R.

三叉神經痛 Trigeminalneuralgie

ハ先キニ陳ベタル反射神經症ノ定義ニ適合セザルモノニシテ寧ロ末梢神經ニ働ケル刺激ノ放線狀刺戟傳達 Irradiation ト云フヲ可ナリトス而シテ主トシテ上下眼窩神經痛及ヒ齒痛トシテ現ハル、モノニシテ鼻結石、鼻内腫瘍及ヒ副鼻腔病ニ來ルコト多シ

頭痛 Kopfwch

ハ持続性壓迫性頭痛ナルアリ又頭重、壓重ノ感アリ多クノ鼻病、副鼻腔病及ビ咽喉病ハ之レカ原因トナルモノナリ而シテ副鼻腔内ノ疾病ニヨリテ發スルモノハ屢々頂部ニ疼痛ヲ起シ其他ノ場所ニ疾病アルトキハ多クハ前額、顛頂、額等ノ各部ニ限局スルモノナリ頭痛ハ硬腦膜ノ充血ニ基因スルヤ否ヤハ未ダ疑問ニ屬ス恐ラク蜘蛛網膜又ハ腦膜靜脈ト鼻内淋巴管及靜脈管トノ直接關係ノ爲メナルベシ

アプロセキシ

眩暈 Schwindel

眩暈ハ恐ラクハ血行障害ニ因ルモノナルベク而シテ鼻病ノ際ニ發スルコト多シ又喉頭病ニヨリテ來ルコトナキニ非ズ所謂喉頭眩暈ト稱スルモノ是レナリ

精神機能障害 Aprozixie

此症狀ヲ有スル人ハ事ニ向ツテ細心ナル注意ヲ持續シ又ハ強盛勢力ヲ以テ從事スルコト能ハザルモノニシテ例之バ讀書ニヨリテ難事ヲ咀嚼玩味スルコト或ハ數學的理解ヲナスコト困難ナルヲ特徴トス加之屢々記憶力乏弱、頭痛、頭重、眩暈其他ノ神經症狀ヲ伴フモノニシテ本症狀ハ男女ノ青春期并ニ成年男子ニ多キモノナリ而シテ少年期ニアリテハ鼻咽喉腺增殖症ニ基因スルモノ多ク成年ニアリテハ鼻ノ疾病殊ニ鼻閉塞、肥厚性鼻炎、鼻茸及ビ副鼻腔蓄膿症等ニ因ルコト多シ

嗅覺障害

第九章 嗅覺障害 Störungen des Geruchssinnes.

鼻病ニ發スル症狀ニシテ嗅覺部ノ異常ニ因リテ來ルノミナラズ又呼吸部及ヒ鼻咽喉ノ疾病モ之レガ原因タルコト少カラス

嚥下障害

最モ多キ嗅覺障害ハ嗅覺脫失 Anosmie ニシテ全脫失及ヒ一部脫失ノ二類トス稀レニハ嗅覺過敏 Hyperosmie アリ又嗅覺失常 Parosmie アリ甲ハ嗅覺ノ普通以上ニ過敏ナルヲ云ヒ乙ハ誤リ嗅グモノヲ云フ通常不快ナル臭氣トシテ感ズルモノナリ

嗅覺脫失并ニ嗅覺失常ハ腫瘍又ハ頭蓋底骨折等ノ如キ中樞性變常ニヨリテ發顯スルヲアレドモ多クハ急性慢性ノ鼻粘膜加答兒殊ニ鼻茸及ビ副鼻腔滯濃症等ニ由來スルモノナリ又一定ノ藥物例令バ古加乙涅安母尼亞等ノ直接作用ニヨリテ來ルヲアリ或ハ芳香物質ヲ永ク持續シテ嗅引スルガ爲メニ其物質ニ對スル嗅覺力減弱シ又ハ乏失スルヲ少カラズ

第十章 嚥下障害 Dysphagia

咽喉ノ疾病ニ發スルモノニシテ嚥下ニ際シテ疼痛ヲ感ジ或ハ嚥下困難ヲ起スモノナリ例令バ咽喉ノ急性炎症會厭軟骨及喉頭腔内潰瘍性疾病並ニ麻痺ニヨリテ來ル而シテ嚥下痛ハ耳ニ放散スルコト稀レナラズシテ患者ハ恰モ耳内ニ疼痛原發地ヲ有スルガ如ク自覺スルモノナリ

一般診斷論

第三編 一般診斷論 Allgemeine Diagnostik.

鼻咽喉ノ疾病ヲ診斷スルニハ既往症質問及ビ他覺的検査ノ二途ニ倚ルヲ常トス而シテ他覺的検査法ハ主トシテ検査者ノ眼ヲ以テスルモノ即チ視診法ナレトモ又觸診聽診及ビ嗅診ノ補助ニ俟タザルベカラズ

第一章 既往症 Anamnesis.

患者及ビ其附添人ノ病症ニ關スル陳述ハ其據ルトコロ極メテ薄弱ニシテ動モスレバ錯誤ヲ生ズルコトアルヲ忘ルベカラズ例之バ遠隔部ノ疾病ニヨリ喉頭ノ知覺異常ヲ訴フルガ如キハ屢々遭遇スル處ナリ乍併多クノ場合ニ於テハ診斷上極メテ有力ノ價值アルモノニシテ即チ副鼻腔ノ疾病及ビ鼻腔又ハ喉頭ノ異物等ニアリテハ患者ノ陳述モ亦決シテ等閑ニ附ス可ラザルモノトス

第二章 望診 Inspection.

望診

既往症 望診

望診 茲ニ望診ト云ヘルハ患者ノ外貌視診ハ疾病ノ種類ニヨリテ診斷上甚ダ有力ナルモノナリ例之バ鼻咽喉腺增殖症、真正鼻、前額竇病、鼻、喉頭及ビ氣管ノ狹窄、鼻中隔缺損、外鼻ノ畸形等ニ於テ然リ

前鼻検査法

第三章 前鼻検査法 Rhinoskopia anterior.

前鼻検査ヲ行フニハ人工光線又ハ日光ヲ用ヒ反射鏡ヲ以テ鮮明ナル光線ヲ鼻内ニ射入セシメ内部ヲ窺ヒ視ルモノニシテ鼻ノ内腔ハ通常開張器ノ援助ニヨリテ鼻孔ヲ擴大シ且ツ鼻毛ヲ壓排スルニ非ザレハ詳細ナル視察ヲ行フコト能ハザルモノナリ此ノ目的ニ向ツテ使用セラル、ハフレンケル、ジュブレ、ハルトマン、クラメル等諸氏ノ鼻鏡ニシテ是等種々ノ鼻鏡ハ診査ト手術ノ場合ニヨリテ各特點ヲ有スルハ勿論且ツ使用者各自ノ好ミト慣用トニヨリテ撰擇セラルルモノニシテ何レヲ是トシ何レヲ非トスルコト能ハズ

鼻鏡ノ種類

第五十九圖



ベシ若シ挿入深キニ過ギ或ハ擴開廣キニ過グル時ハ不快ノ感ヲ生ジ又屢々鼻中隔疼痛ヲ起サシムルノミナラズ時トシテ出血スルコトアリ擴開シタル鼻鏡ハ術者ノ左手ヲ以テ手柄ヲ保持シ右手ハ患者ノ頭首ヲ前後左右ニ傾斜又ハ仰俯セシムルノ用ニ供スベク以テ鼻内ノ上下側壁等各部位ヲ視診スルコトヲ得ベシ若シ鼻粘膜ノ腫脹及ビ知覺過敏等アリテ検査ヲ妨グルトキハ五—一〇%古加乙淫溶液又ハ「アドレナリン」等ヲ塗布シ五—十五分間ヲ經テ検査スルヲ可トス

消息子ヲ以テ鼻腔内ヲ探診スルハ極メテ緊要ナル方法ニシテ骨瘍、腐骨ノ存在、ポリープノ發生部等ヲ知悉スルヲ得ルノミナラズ又腫物ノ硬度、鼻粘膜肥厚ノ程度、刺衝機等ヲ知ルニ便益アルモノナリ前鼻検査ニヨリテ視得ベキ鼻腔内ノ各部ハ内側ニ鼻中隔アリテ屢々彎曲シ時トシテハ棘又ハ棘ヲ有ス外側ニハ下甲介アリテ其大部分

第六十圖
鼻用消息子



鼻粘膜所見

第六十一圖
前鼻検査所見



ヲ占メ其上内方ニ狭小ナル中甲介アリ上甲介ハ通常視ルコト能ハザルモノトス鼻粘膜ノ色ハ普通薔薇様紅色ニシテ後部ハ光線ノ達セザル爲メ稍ヤ暗黒ヲ呈ス而シテ、粘、膜、ノ、常、態、ハ、濕潤性ニシテ、光澤ヲ有シ、分泌、物、ヲ、付、着、セ、ザ、ル、ベ、シ

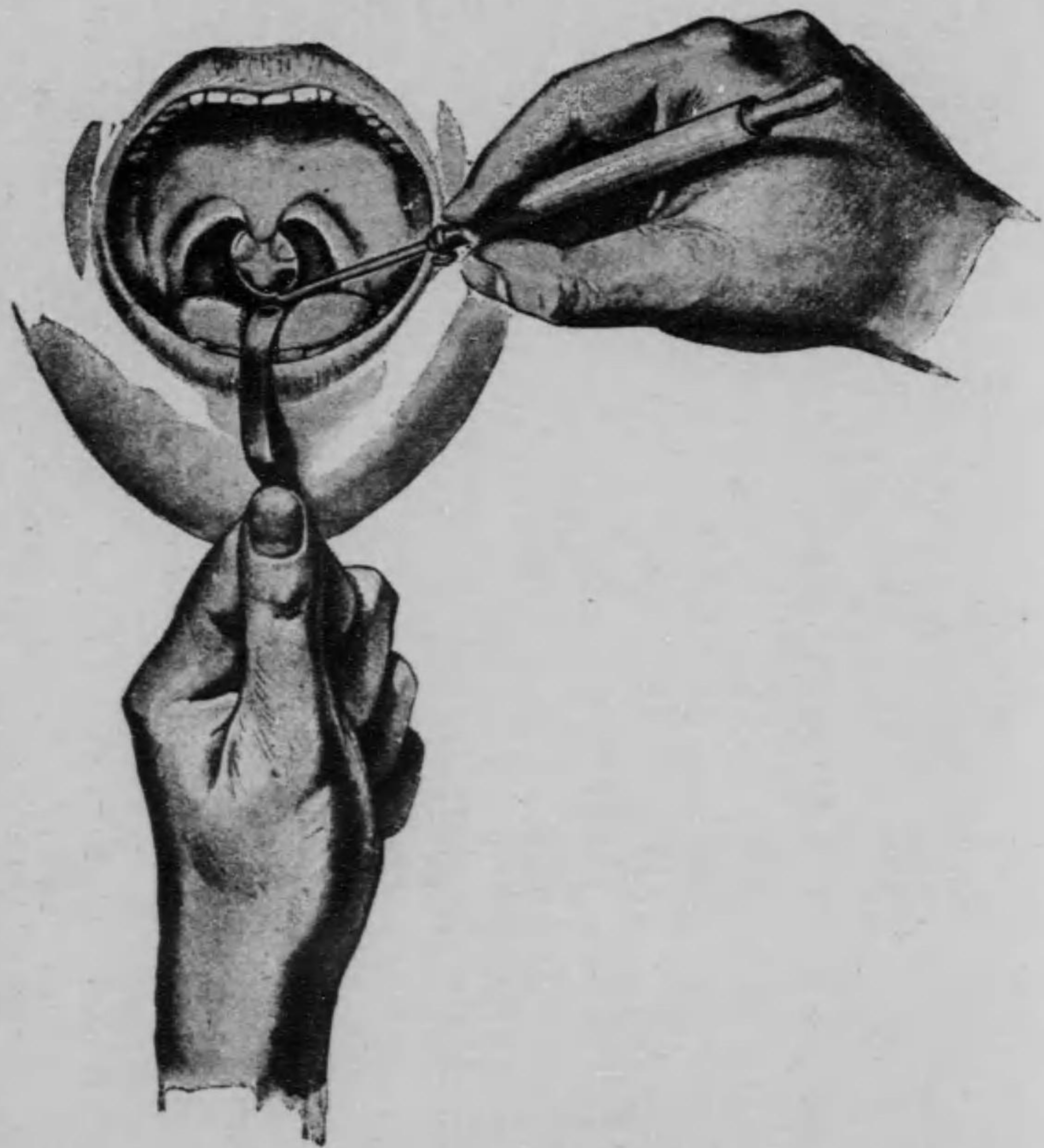
後鼻検査法

第四章 後鼻検査法 Rhinoskopia posterior.

後鼻検査法ハ鼻腔ノ後端並ニ鼻咽腔ヲ觀察スルニ必要ナル方法ニシテ是レニ要スル器械ハ約一仙迷ノ直徑ヲ有スル圓形若クハ橢圓形ノ小鏡ニ鈍角ヲ有スル手柄ヲ附着シタルモノ(又ハミヘル氏鼻咽腔鏡)及ビ舌壓子並ニ反射鏡ナリ又光源ハ前鼻検査法ニ同ジ検査法ハ患者ノ頭首ヲ少シク前方ニ傾ケテ開口セシメ左手ニ把リシ舌壓子ヲ以テ舌背ヲ壓下シ舌ヲ齒列外ニ挺出セザラシム但シ舌根ヲ壓スベカラズ右手ニ小鏡ヲ持チ鏡面ヲ前上方ニ向ケテ咽腔即チ懸壅垂ノ下部ニ挿入ス此際患者ヲシテ鼻腔ヲ通ジテ呼吸セシムベシ而シテ小鏡ハ豫メ温湯ニ

後鼻検査法

第 四 十 六 圖
後 鼻 腔 檢 査 法

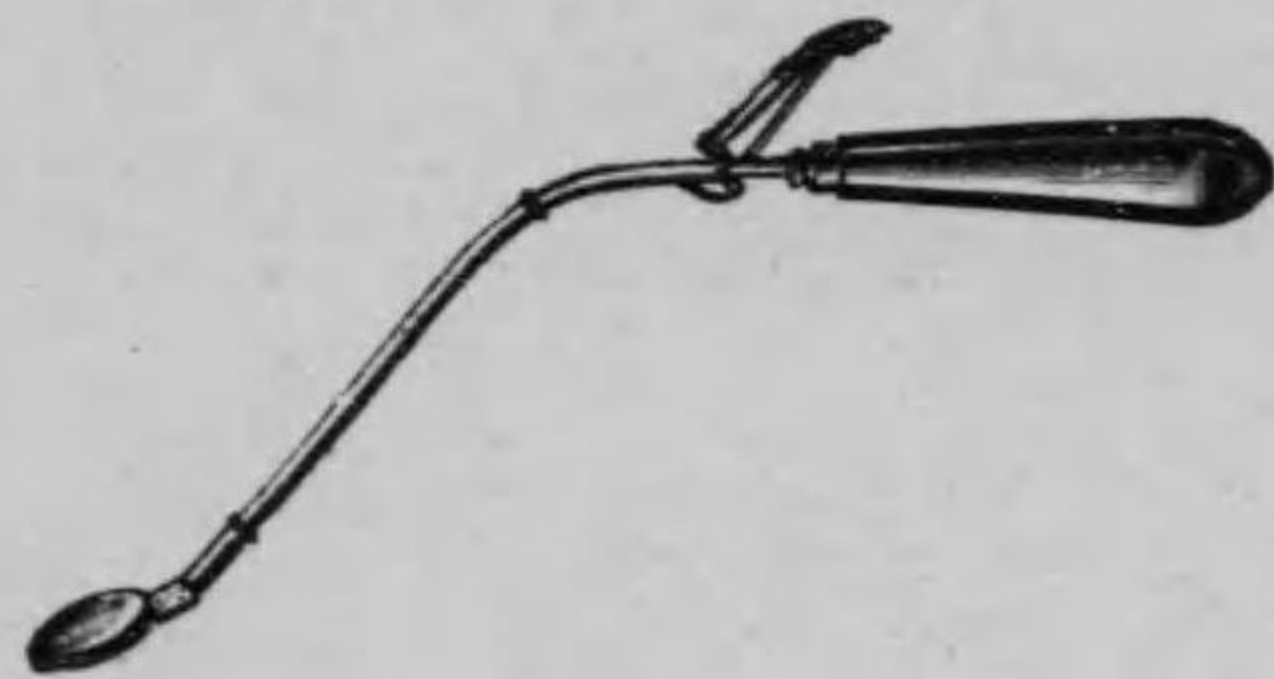


後鼻検査映像

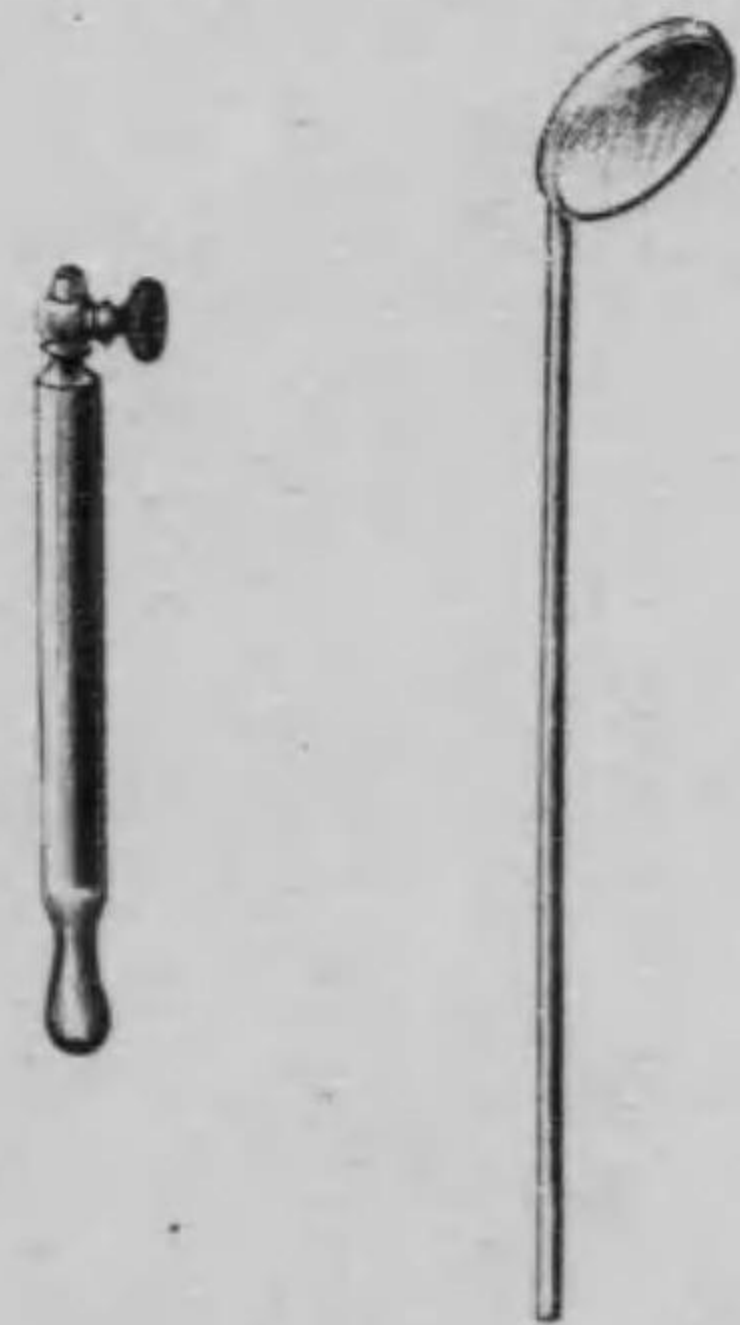
第一ノ注目點ハ鼻中隔後端鋤骨鉛直板ナリ上下兩

部ヲ見ルコトヲ得ベシ
入レ又ハ燈火ヲ以テ温メ鏡面ニ暈翳ヲ生ズルヲ防クベシ此ノ如ク咽腔
ニ送リタル小鏡面ニ映ジタル像ハ反射鏡ニヨリテ照シ見ルトキハ明カ
ニ見ルヲ得ルモノナリ但シ小鏡ヲ用フルトキハ一時ニ全部ノ映像ヲ現
ハスコト能ハザルモノナルガ故ニ手柄ヲ上下左右ニ運轉シテ始メテ各

第 二 十 六 圖
ミヘル氏後鼻鏡



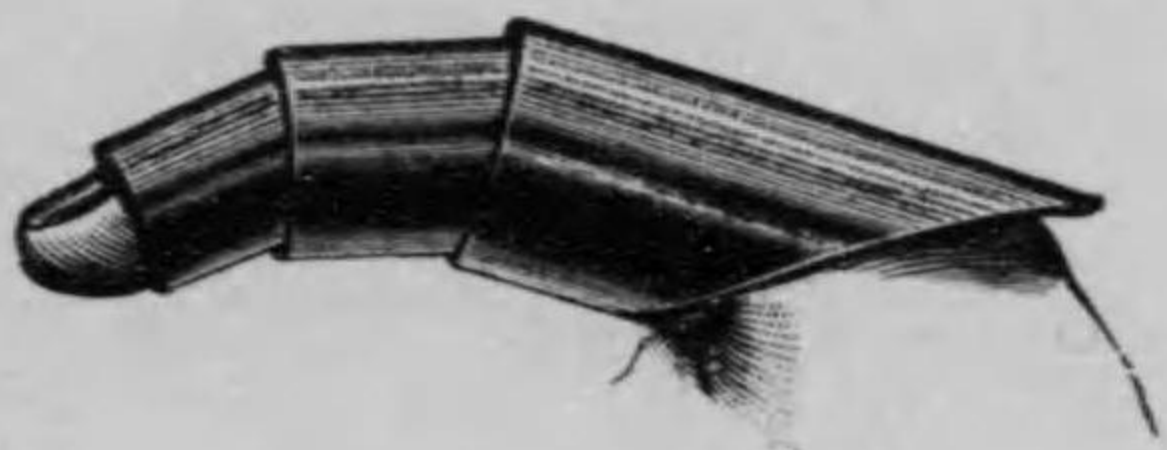
第 三 十 六 圖
喉頭鏡及鏡柄



端ハ稍ヤ廣キ細狭ノ隆線ニシテ淡紅色ヲ呈ス其兩側ハ後鼻竅ニシテ甲介及鼻道ヲ觀ルベシ中甲介ハ略ボ中央ニ位シ下部ニ下甲介後端ヲ有シ上甲介ハ通常中甲介ニ隱蔽セラレテ見得ベカラザルコト多シ小鏡ノ手柄ヲ左右ニ廻轉スレバ咽頭側壁ヲ見ルベク此處ニ歐氏管咽頭口歐氏管隆起、ローゼンミュレル氏窩等アリ又手柄ヲ扛起スルトキハ咽頭上壁及後壁ヲ窺フコトヲ得(第四着色圖)

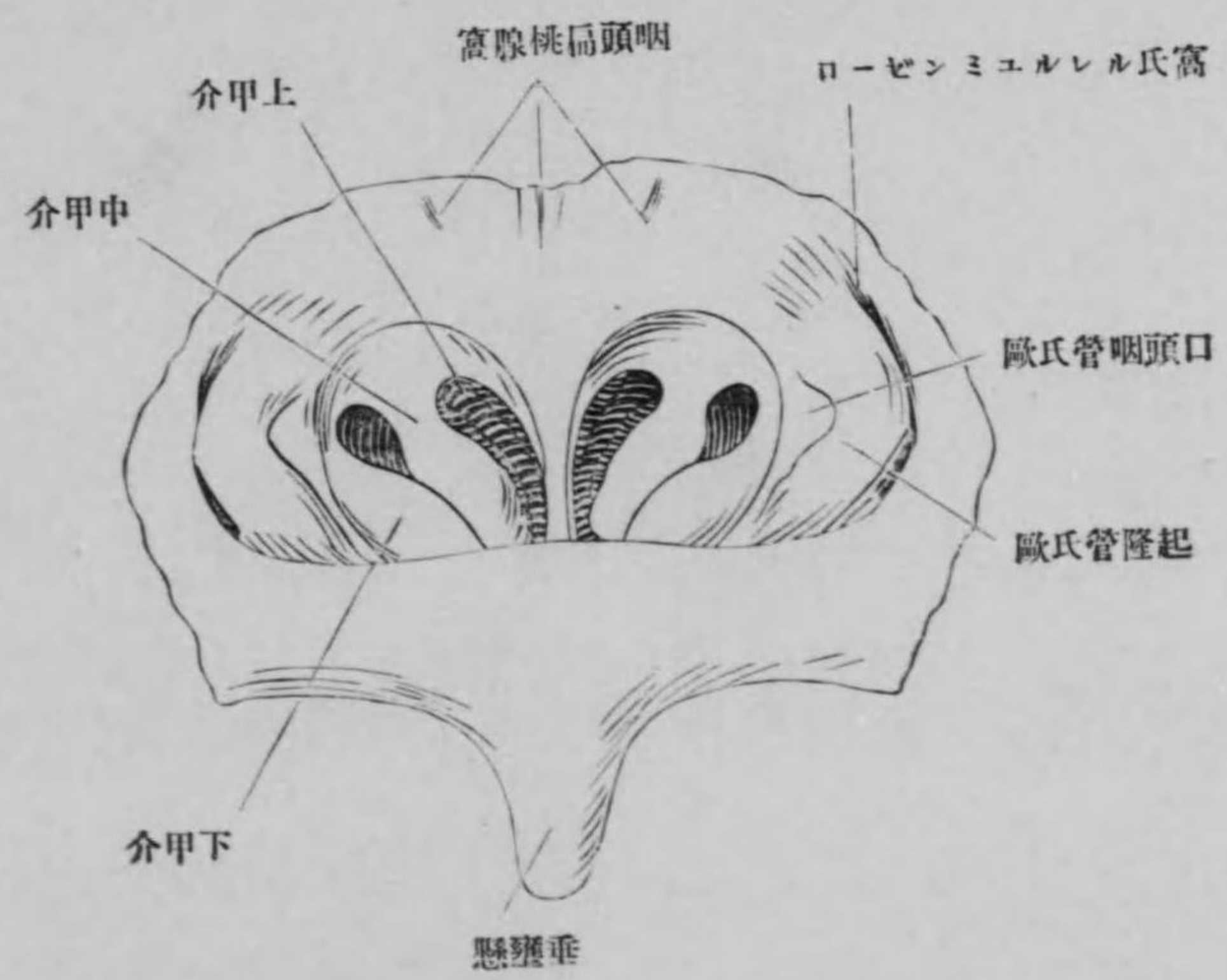
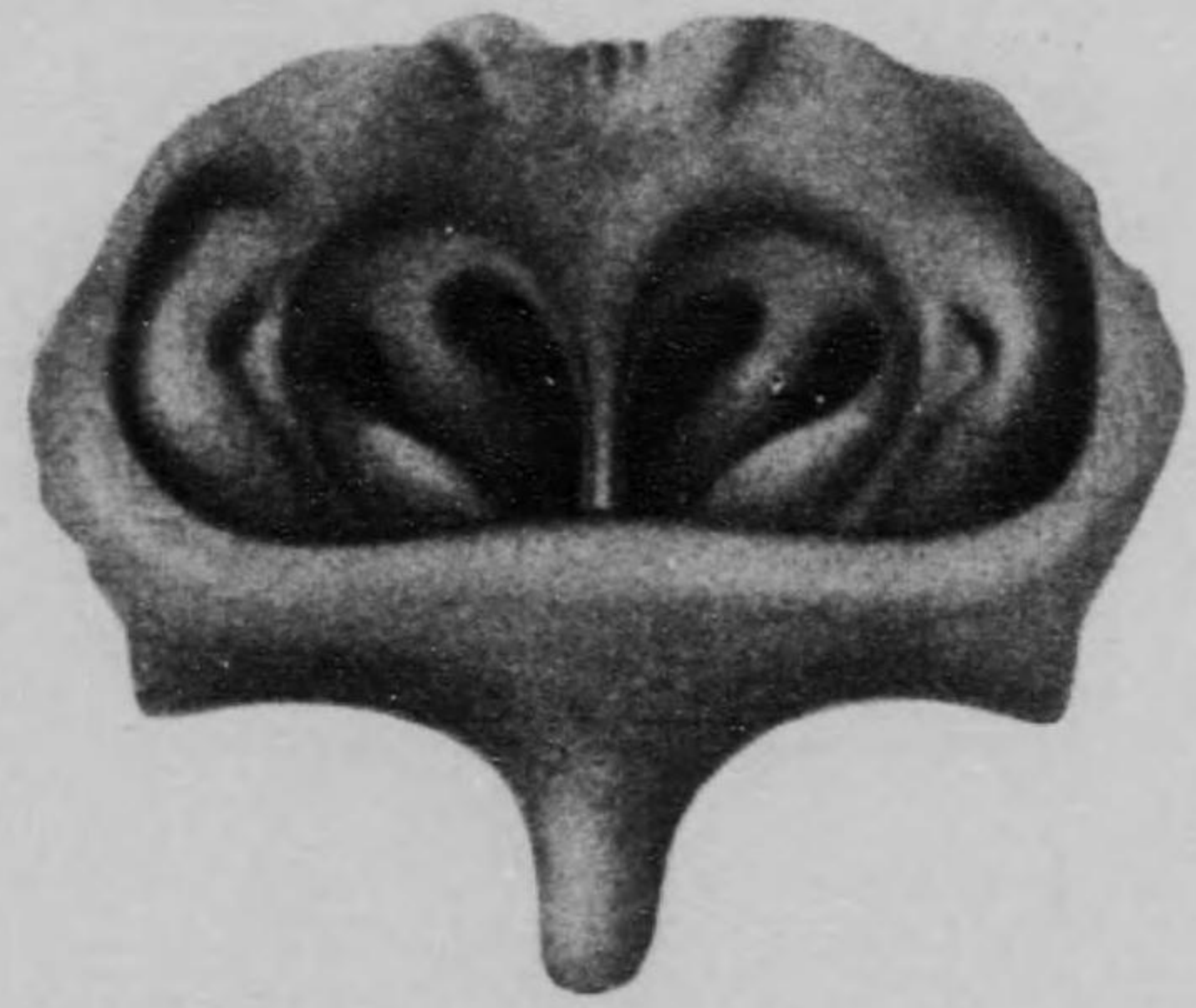
圖 五 十 六 第

甲 指



以上述べタル處ヲ見レバ後鼻検査法ハ極メテ簡單ニシテ何人モ容易ニ施行シ得ベキガ如シト雖モ決シテ然ラズ多クノ經驗ト熟練ヲ要スルモノナリ往患者知覺甚ダ過敏ニシテ單ニ舌壓子ヲ挿入スルカ或ハ咽頭ニ小鏡ノ達スルヤ直チニ絞扼運動Würgbewegungヲ發起シ縱令初學者ニ非ズト雖モ爲メニ検査スルコト能ハザルモノアリ此ノ如キモノニハ二―四%古加乙涅溶液ヲ塗布シ數分間ノ後検査スルヲ佳トス又屢々口蓋帆ト咽頭壁ノ間隙狭キニ過

第四卷
後鼻腔映像圖



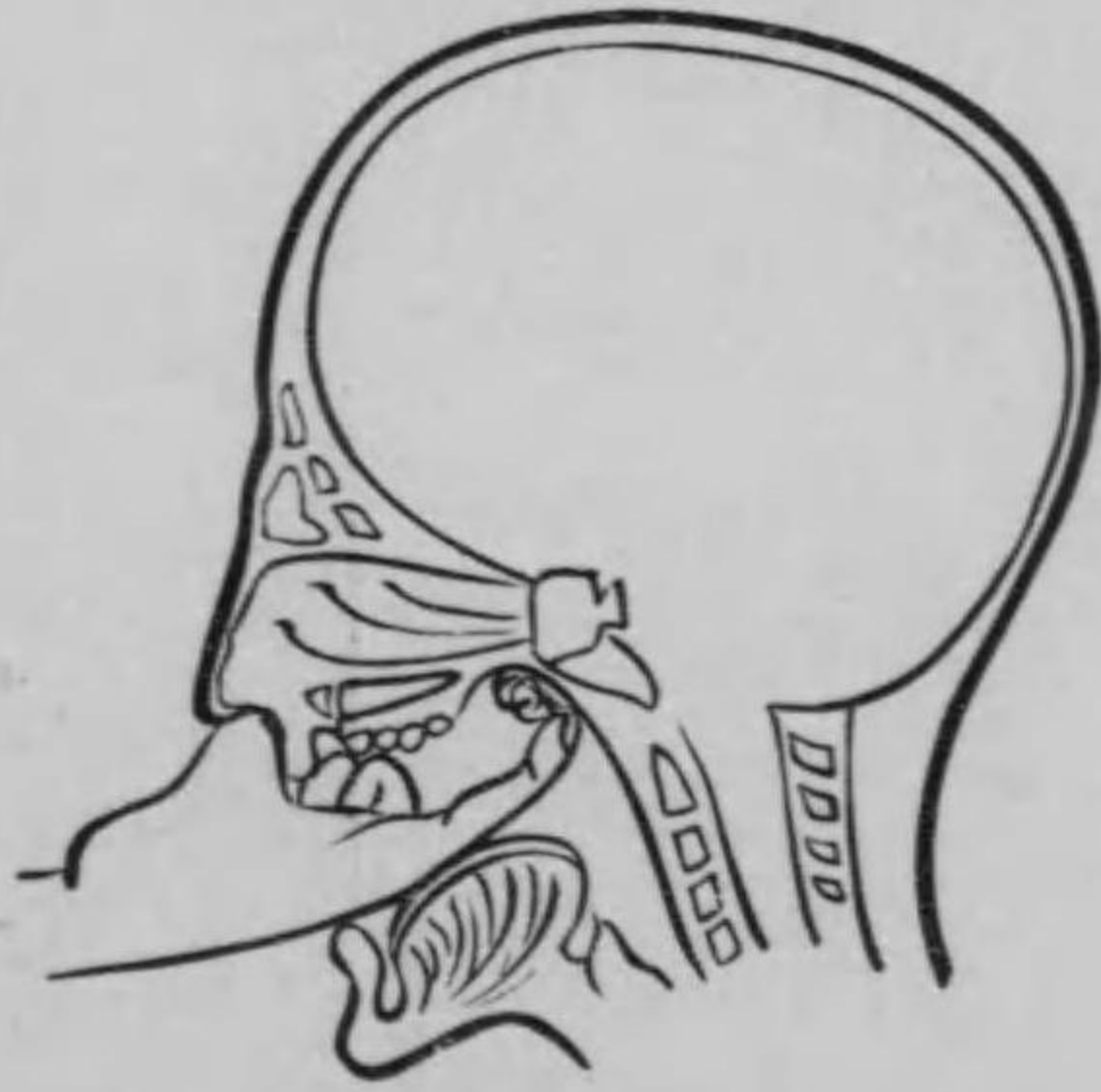
ギ或ハ口蓋帆及ビ懸壅垂ノ過長ナルガ爲メ検査ヲ妨ゲラル、事少カラ
 ズ然ル時ハ口蓋鈎ヲ以テ口蓋及ビ懸壅垂ヲ前上方ニ牽引スルヲ要ス時
 トシテハ後鼻検査法ハ絶対的ニ不可能ナルコトアリ殊ニ小兒ニ於テ多
 シ然ルトキハ觸診法ヲ行フモノナリ觸診法ハ鼻咽腔内ノ腫瘍就中腺肥
 大症ニ向ツテ其硬軟如何ヲ知ルニ極メテ必要ナル診斷法ニシテ小兒ニ
 在リテハ指ヲ咬ムコトアルガ故ニ之ヲ防グニ指甲ヲ用ウルモ佳ナリ、然

圖 六 十 六 第



鼻咽腔觸診ノ狀況

圖 七 十 六 第

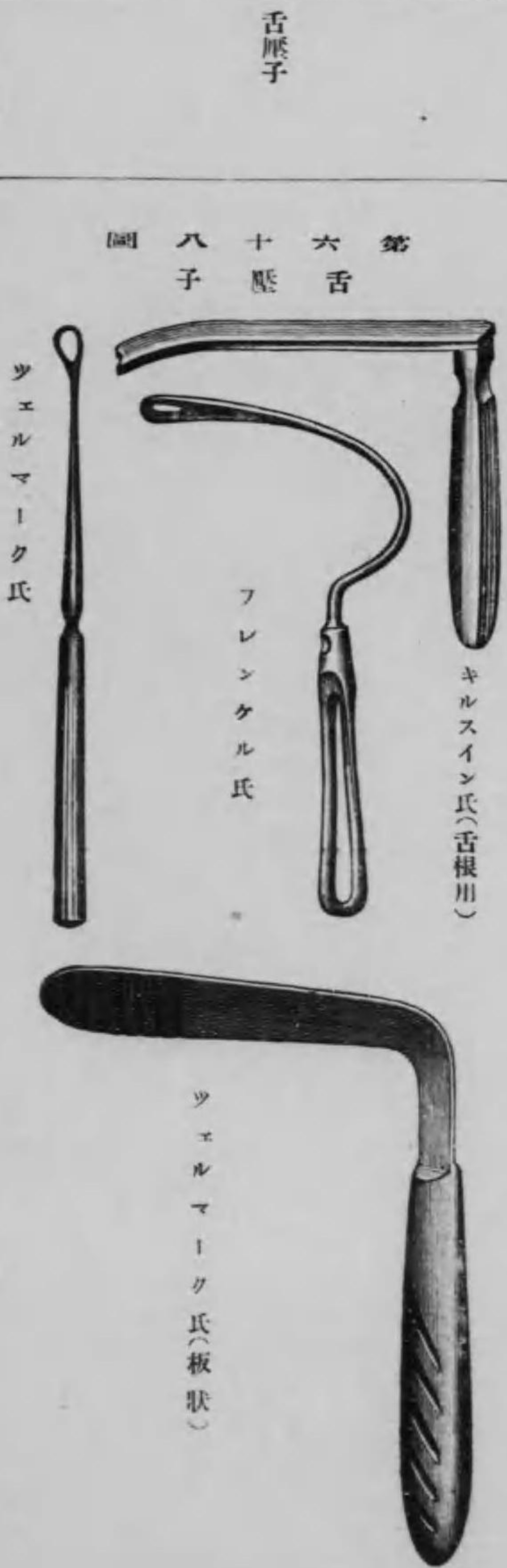


鼻咽腔觸診内景

レ凡最モ簡便ニシテ確實ナルハ檢者ノ左拇指ヲ以テ患兒ノ外頰部ヨリ
壓シテ頰粘膜ヲ上下ノ齒列間ニ押入シ清洗セル右示指ヲ鼻咽腔ニ挿入
スベシ然ルトキハ若シ咬嚙セント欲スルモ頰部ノ疼痛アルガ爲メニ咬
ムコト能ハザルナリ

第五章 咽頭検査法 Pharyngoscopic.

咽頭検査ハ反射光線或ハ直射光線ヲ以テ行フモノニシテ舌壓子ヲ以テ



舌背ノ中央ヲ壓抵シ同時ニ「アー」若クハ「ハイ」ヲ云ハシムベシ然ルトキハ
咽頭腔内ハ廣大トナリ之ヲ視察スルヲ得ベシ若シ舌壓子ヲ舌根ニ觸ル
ルトキハ嘔氣ヲ催起スルモノナリ但シ患者ニヨリテハ舌壓子ヲ要セズ
シテ自己ノ意志ニ從ヒ舌ヲ口腔底ニ降下セシムルヲ得ルモノアリ
咽頭検査ニ際シテハ粘膜ノ色澤腫脹ヲ觀ルノミナラズ探子ヲ以テ扁桃
腺窩及ビ後口蓋弓ノ後部等ヲ詳細ニ検査スルヲ要ス

第六章 喉頭鏡検査法 Laryngoscopic.

喉頭腔内并ニ氣管ノ上部ヲ照檢スルニハ反射鏡及ビ喉頭鏡ヲ使用スル
モノナリ喉頭鏡ハ直徑一—三仙迷ヲ有スル圓形平面鏡ニシテ百二十度
乃至百二十五度ノ角度ヲ以テ金屬性細長莖ニ固着セラル、モノトス而
シテ其莖ノ他端ハ木製又ハ金屬性ノ手柄ニ螺定セラル(第六十三圖)

A 喉頭鏡検査方法 Untersuchungsmethode.

人工光線ニヨリテ検査ヲ行ハントセバ検査室ハ日光ノ射入ヲ遮リ闇黒

検査方法

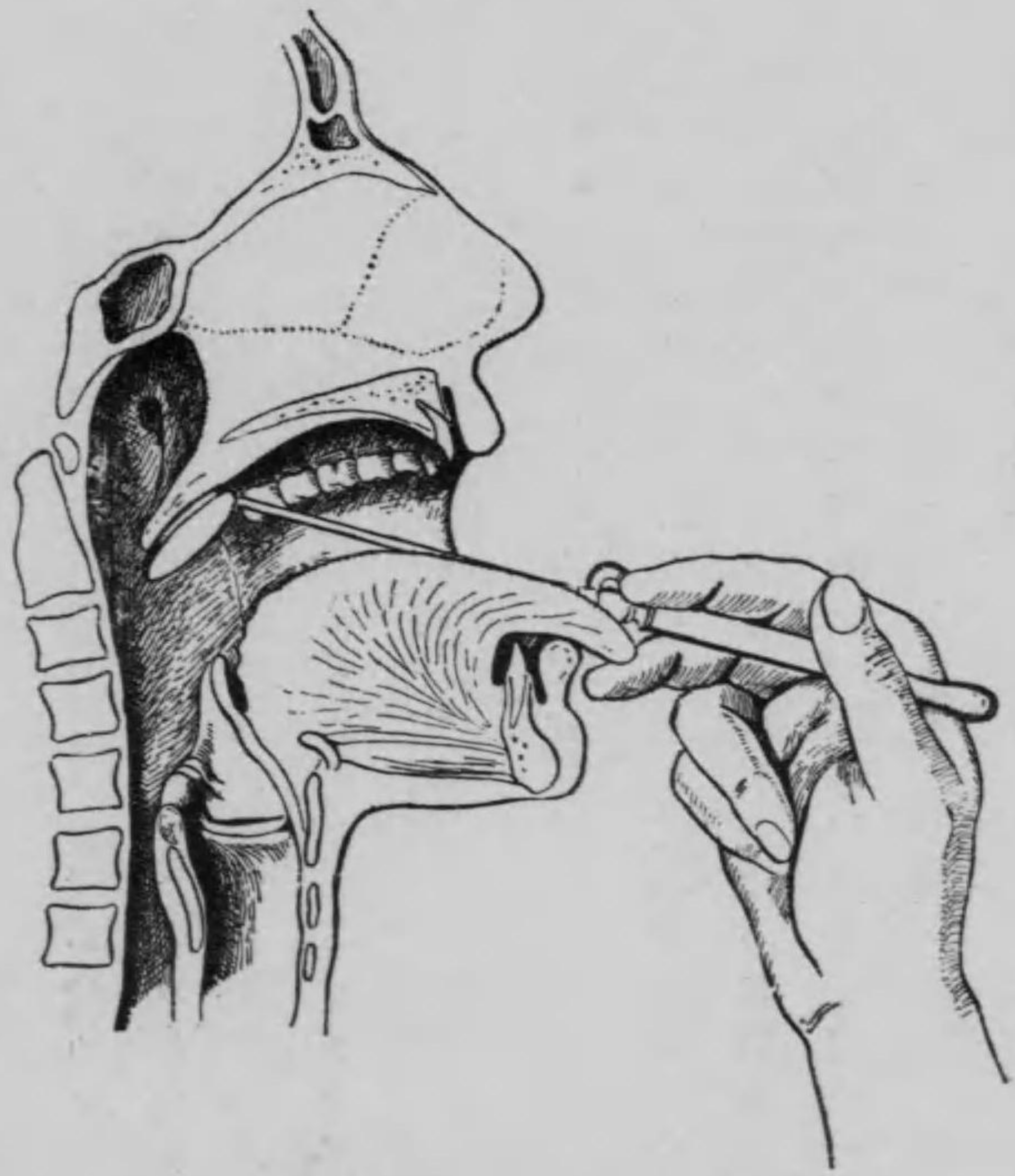
喉頭検査法

圖九十六第
(甲) 用應鏡頭喉



ナラシムルヲ佳トス、然レドモ通常絶對的闇黒トナサザルモ検査スルコ

圖十七第
(乙) 用應鏡頭喉



トヲ得ベシ

先ツ被檢者ヲシテ椅子ニ凭ラシメ軀幹ヲ眞直ニシ頭部ヲ僅カニ後屈セ

シムベシ檢者ハ之ニ對シテ坐ヲ占ム光線ハ被檢者ノ右側耳邊ニ置クヲ常トス斯クシテ檢者ハ額帶或ハ口保反射鏡ニヨリテ反射光線ヲ被檢者ノ口邊

ニ來ラシムベシ而シテ後チ鏡ノ中央ニアル小穿孔部ヨリ透見シ光像ノ鮮明トナルニ至ル様檢者ハ被檢者ニ近ヅキ或ハ遠カリテ調節スベシ斯クシテ光線ヲ集成シ得タル後チ被檢者ヲシテ舌ヲ前方口外ニ挺出セシメ布片ヲ以テ舌ノ上下面ニ通シテ纏絡シテ徐々ニ牽引シ或ハ被檢者ヲシテ自ラ牽引セシム但シ決シテ強カヲ以テスベカラズ何トナレバ動モスレバ尖銳ナル齒牙ニヨリ舌繫帶ノ疼痛裂傷出血等ヲ來スコトアルガ故ナリ

然ル後チ被檢者ヲシテ緩徐ニ而モ規則正シク呼吸セシメ徐ロニ喉頭鏡ヲ口内ニ送入スベシ單ニ検査ノミヲ行フニハ右手ニ保持スルモ可ナレドモ手術時ニハ左手ニ委ネザル可ラズ喉頭鏡ハ口内ニ送入スル時ハ水蒸氣ニヨリテ暈翳ヲ生ズル者ナレバ豫メ鏡面ヲ燈火上ニ持チ來シ或ハ温湯内ニ浸ス後鼻検査時ニ於ケルガ如シ鏡ノ暈翳ヲ防グニハ一%リゾール液、曹達水等ニ浸スモ効アリ先ツ鏡背ヲ自家ノ手背ニ接觸シテ其熱度ヲ試験シ鏡面ニ觸レザル様注意シテ硬口蓋ト舌背間ヲ經テ深ク送入シ鏡ノ背面ヲ以テ懸垂垂ヲ輕ク後上方ニ押シ上グル様ニスベシ然ル

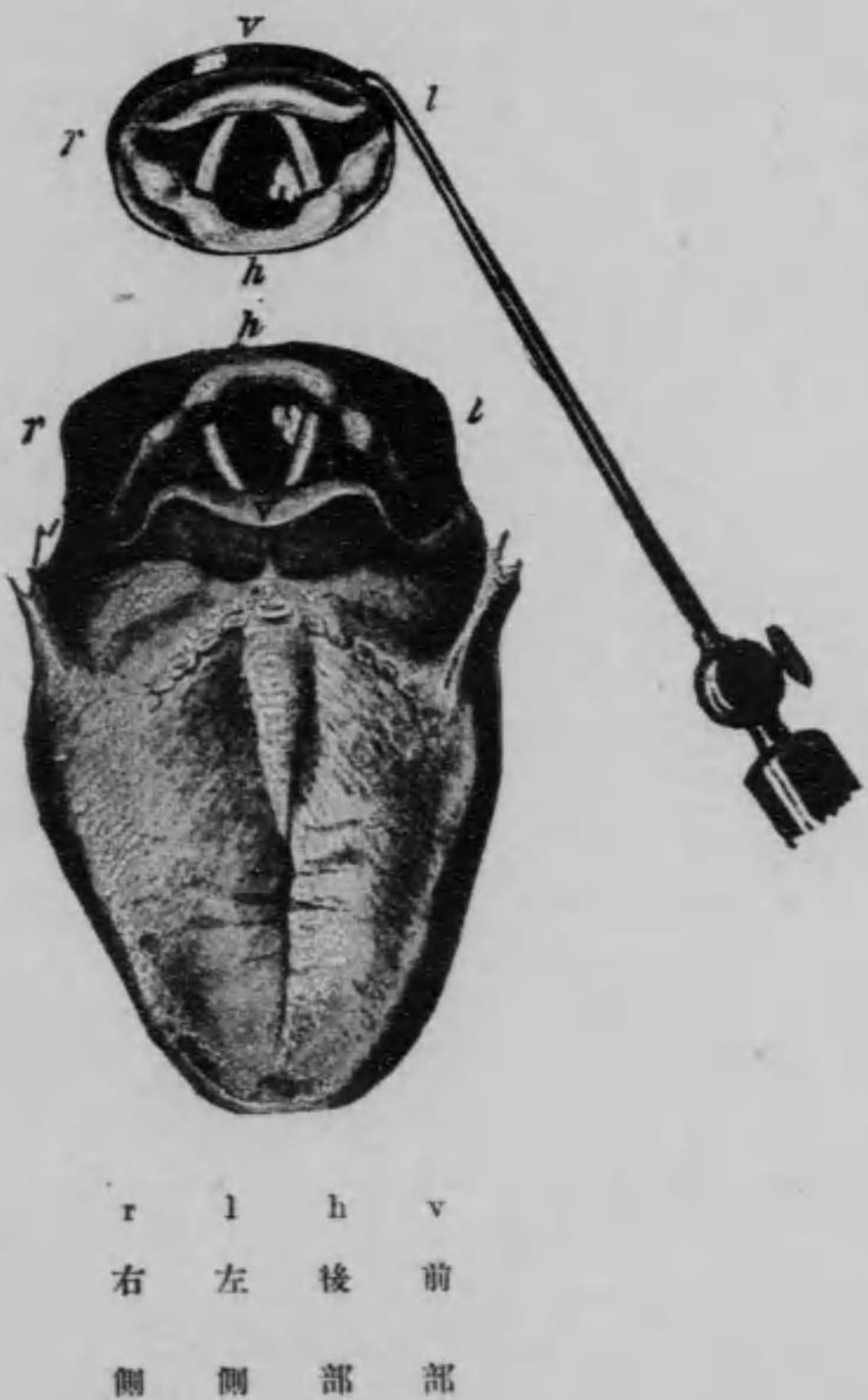
喉頭鏡映像

トキハ喉頭鏡面ニ喉頭内ノ映像ヲ見ル事ヲ得ベシ

B 喉頭鏡ノ映像 Laryngoscopische Bilder.

以上ノ如ク保持セラレタル喉頭鏡ノ面ハ聲門ト同一平面ニアラズ前上

第七十一圖 喉頭鏡映像



喉頭鏡検査法

二二七



方ヨリ後下方ニ向ツテ傾斜スルガ故ニ其映像モ從テ一定ノ變態ヲ示ス
 即チ喉頭ノ前部(會厭軟骨、聲帶前起根部等)ハ喉頭鏡ノ上方ニ映シ後部喉
 頭後壁、披裂軟骨、聲帶突起等ハ鏡ノ下部ニ現ハル然レドモ側方ハ實物ト
 同一ナルガ故ニ鏡面右側ノ映像ハ實物ノ右側ニシテ實物ノ左側ハ鏡面
 左側ニ映ズル者ナリ(第七十一圖)
 喉頭鏡検査ニ際シ被検査ヲシテ安靜呼吸ヲ營マシムルトキハ聲門ハ二
 等邊三角形ヲナシテ鏡面ニ現ハレ突然深吸氣ヲナサシムルトキハ聲門
 ハ著シク擴大シテ具サニ深部ノ狀態ヲ視察スルヲ得ベシ(第七十二、三、四

喉頭鏡検査ノ
障碍

圖)又高調音ヲ發セシムルトキハ會厭軟骨ハ舌根ニ向ツテ扛起セラレ喉
 頭内景ヲ觀察スルニ一層容易ナリ而シテ此際兩聲帶ハ内方ニ向ツテ中
 線ニ接近スルモノナリ此ノ如ク發聲セシムルトキハ管ニ聲帶ノ運動ヲ
 視ルノミナラズ其緊張及ビ振顫ノ狀態或ハ聲帶ニ於ケル腫物ノ可動性
 ナルヤ否ヤ粘液凝着ナリヤ否ヤ等ヲ確ムルヲ得ベシ

喉頭各部ノ粘膜色澤 聲帶ハ通常象牙様白色ナレドモ喫煙家、飲
 酒家、聲音使用過度ノモノ等ハ汚穢白色或ハ淡紅色ヲ呈ス
 會厭軟骨、假聲帶、披裂會厭韌帶ハ口唇様紅色ヲ呈シ且ツ軟骨ノ迂回部ニ
 於テ多クハ多數ノ血管分佈ヲ見ルベシ
 會厭軟骨遊離縁ハ鮮明黃色ヲ呈ス
 披裂軟骨部及ビ披裂間部ハ強ク潮紅ス(第五着色圖)

C 喉頭鏡検査ノ障碍 *Hindermiss bei der Laryngoskopie.*

最モ多キハ咽頭反射機能亢奮ニシテ咳嗽ヲ發シ或ハ絞扼運動劇シク鏡

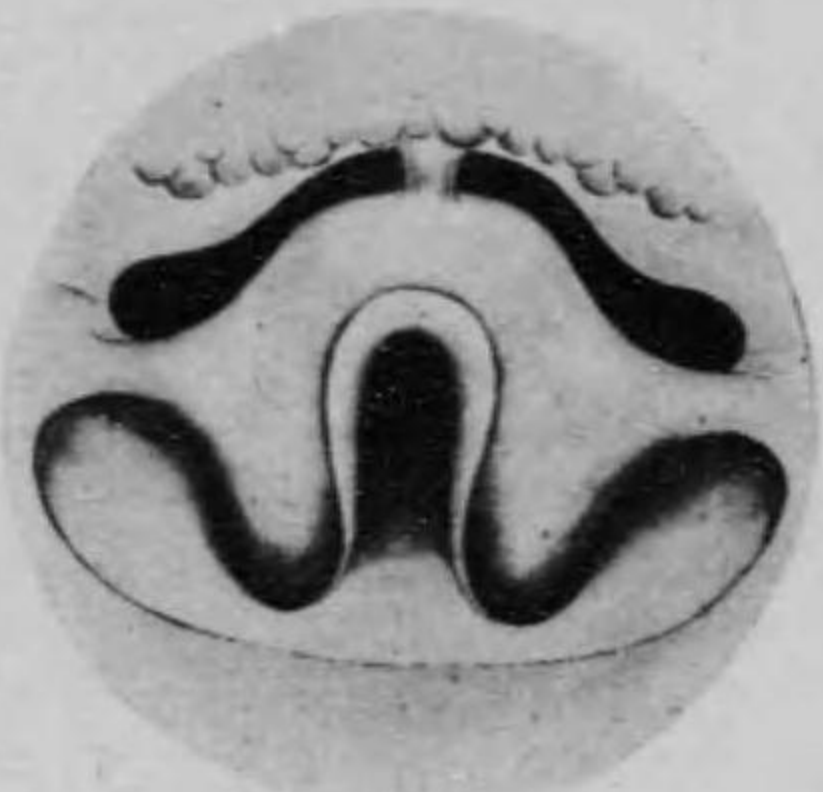
ヲ送入スルニ困難ナルモノアリ又時トシテハ嘔吐ヲナシテ鏡面ヲ汚染スルコトアリ

次ニ屢々遭遇スル處ノ困難ハ舌ノ弓形隆起ニシテ甚敷ハ爲メニ單ニ喉頭鏡ヲ送入スルコトスラモ困難ナル場合稀ナラズ或ハ著大ナル口蓋扁桃腺肥大症モ検査ヲ妨グルモノナリ

以上ノ如キ障碍アルトキハ五%古加乙涅ヲ咽頭ニ塗布シ數分ヲ經テ施行スルヲ佳トス然ルトキハ容易ニ目的ヲ達スルコトヲ得ベシ

オメガ狀彎曲
後方傾斜

第七十五圖
オメガ狀彎曲



第七十六圖
後方傾斜

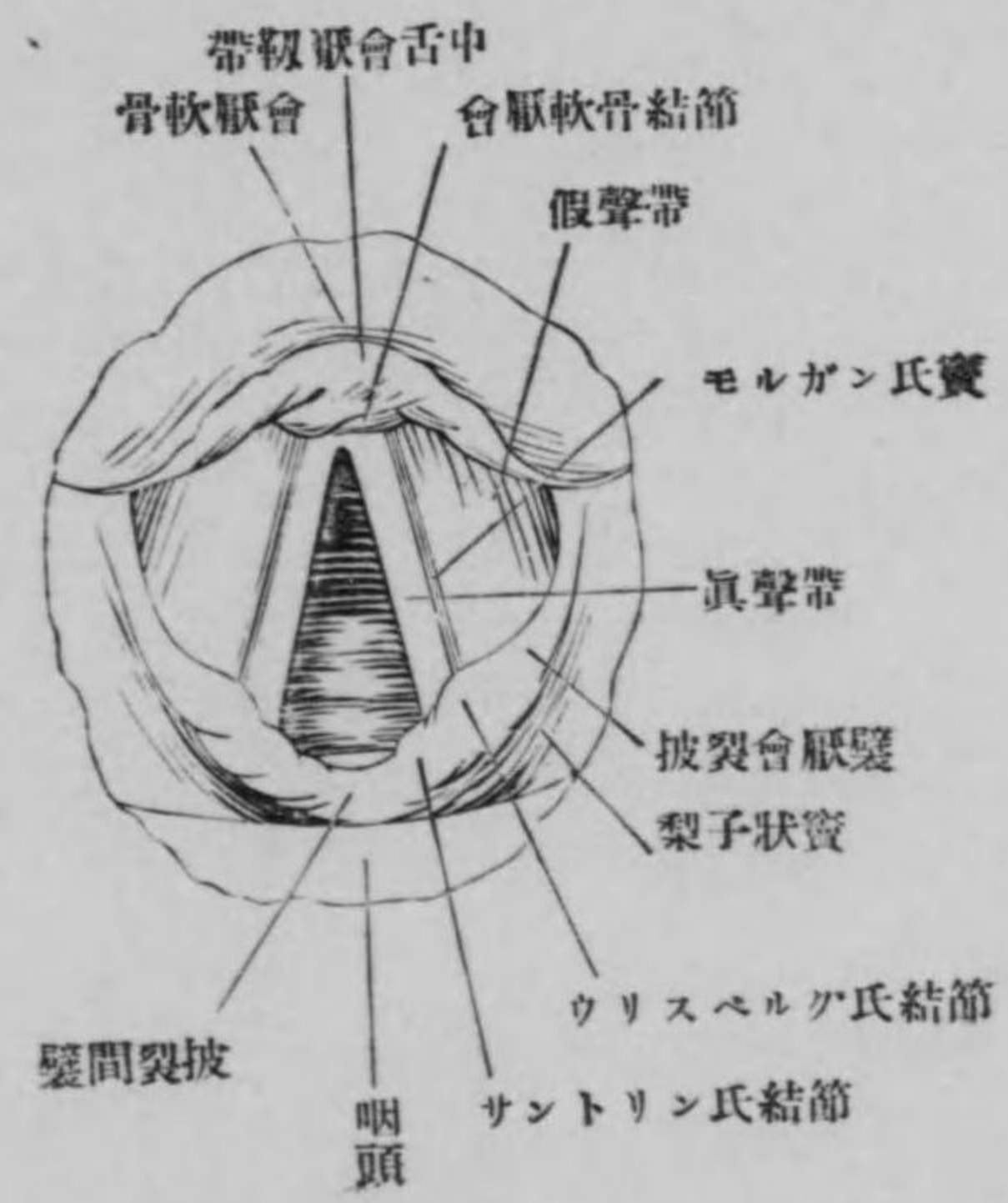


第七十七圖
同上(強度)



其他屢々検査ヲ妨グルモノハ會厭軟骨後方傾斜及ビオメガ狀彎曲ニシ

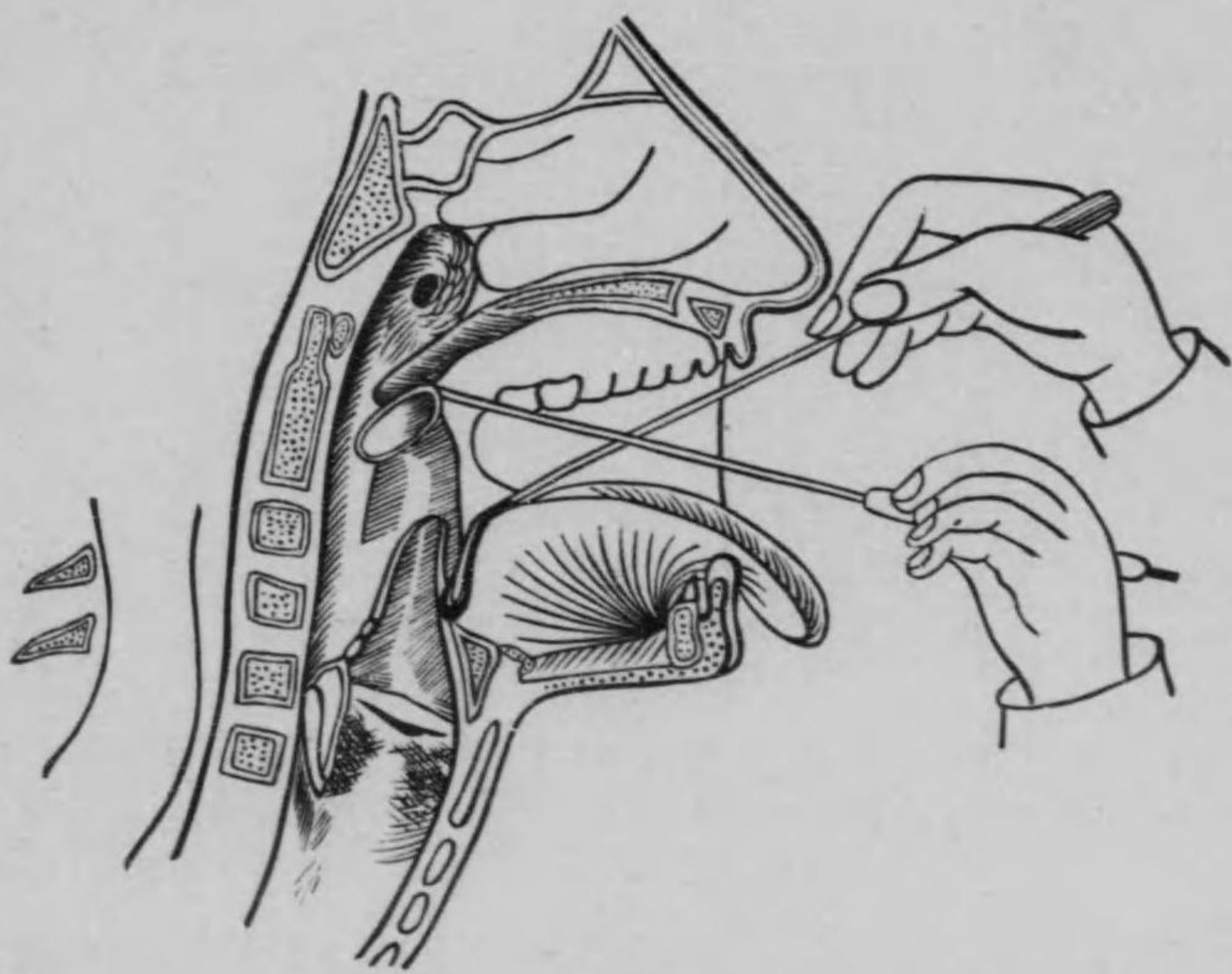
第五卷
喉頭鏡映像圖



第七十八圖



ヘイルブルン氏鏡子



ヘイルブルン氏鏡子を用いた図

テ其傾斜顯著ナルモノハ喉頭入口ヲ覆蓋シテ喉頭腔内ヲ窺ヒ見ルコト能ハザラシムルガ故ニライヘルト氏鏡子ヲ以テ會厭軟骨窩ヲ壓シ槓桿

喉頭鏡特殊検査法

作用ニヨリテ扛舉セシムルヲ要ス(第七十八圖)

D 喉頭鏡特殊検査法 Besondere Methode der Laryngoskopie.

以上述べタル普通喉頭鏡検査法ニヨリテ充分目的ヲ達シ得ザルトキハ左ノ特殊検査法ニ從ヒ補足スルヲ佳トス

アヴェルリス氏法

アヴェルリス氏法 Avellis'sche Methode

患者ノ頭首ヲ左右ニ廻轉セシメ或ハ左右ニ屈曲セシメテ聲帯其他各部分ヲ管ニ上方ヨリノミナラズ又邊縁ヨリ視ル方法ナリ

キリアン氏法

キリアン氏法 Kilian'sche Methode.

ハ病變好發部ナル後壁前面ヲ映出スルニ便ナリ其方法患者

第九十七圖 キリアン氏法検査法



キルスタイン氏直達喉頭検査法

第十八圖 アユリニゲン氏子鏡



ヲ起立セシメ頭部ヲ強ク前下方ニ屈セシメ検査者ハ膝位若クハ低位ヲ取リ喉頭鏡ヲ稍ヤ水平ニ保持シ光線ヲ下方ヨリ咽頭内ニ射入スルニアリ

キルスタイン氏直達喉頭検査法 Kir-

stein's directe Laryngoskopie 鏡子副匣及ビ電氣

燈ヨリ成ル所謂キルスタイン氏装置ヲ以テ検査スル方法ニシテ直達鏡ヲ會脈軟骨前邊マデ挿入シ鏡子ヲ以テ舌背ヲ壓下シ次ニ柄ヲ扛舉シテ齒牙ニ觸ル、ニ至ラシメ同時ニ舌根ヲ前下方ニ牽制シ副匣ヲ通ジテ直接ニ喉頭ヲ視診スルナリブリユーニングス氏鏡子ニ電燈ヲ裝置シテ用ユルトキハ一層便利ナリトス此検査法ハ小兒ニ在リテ最モ必用ナリ

第七章 電氣透照法 Electricische Durchleuchtung.

電氣透照法

喉頭鏡検査法 電氣透照法

本法ハ副鼻腔ノ疾患ニ在リテ顔面骨ヲ透照シテ検査スル者ニシテ検査



第十八圖
キスライ直達喉頭検査法

室ハ絶對的闇黒ナルヲ要ス即チ特ニ製作セラレタルフオーゼン氏又ハ
ヘーリング氏小電燈ヲ患者ノ口内ニ送入シテ上顎竇ノ變化ヲ檢ス若シ



第十八圖
前額電燈

第十八圖
ヘーリング氏電燈



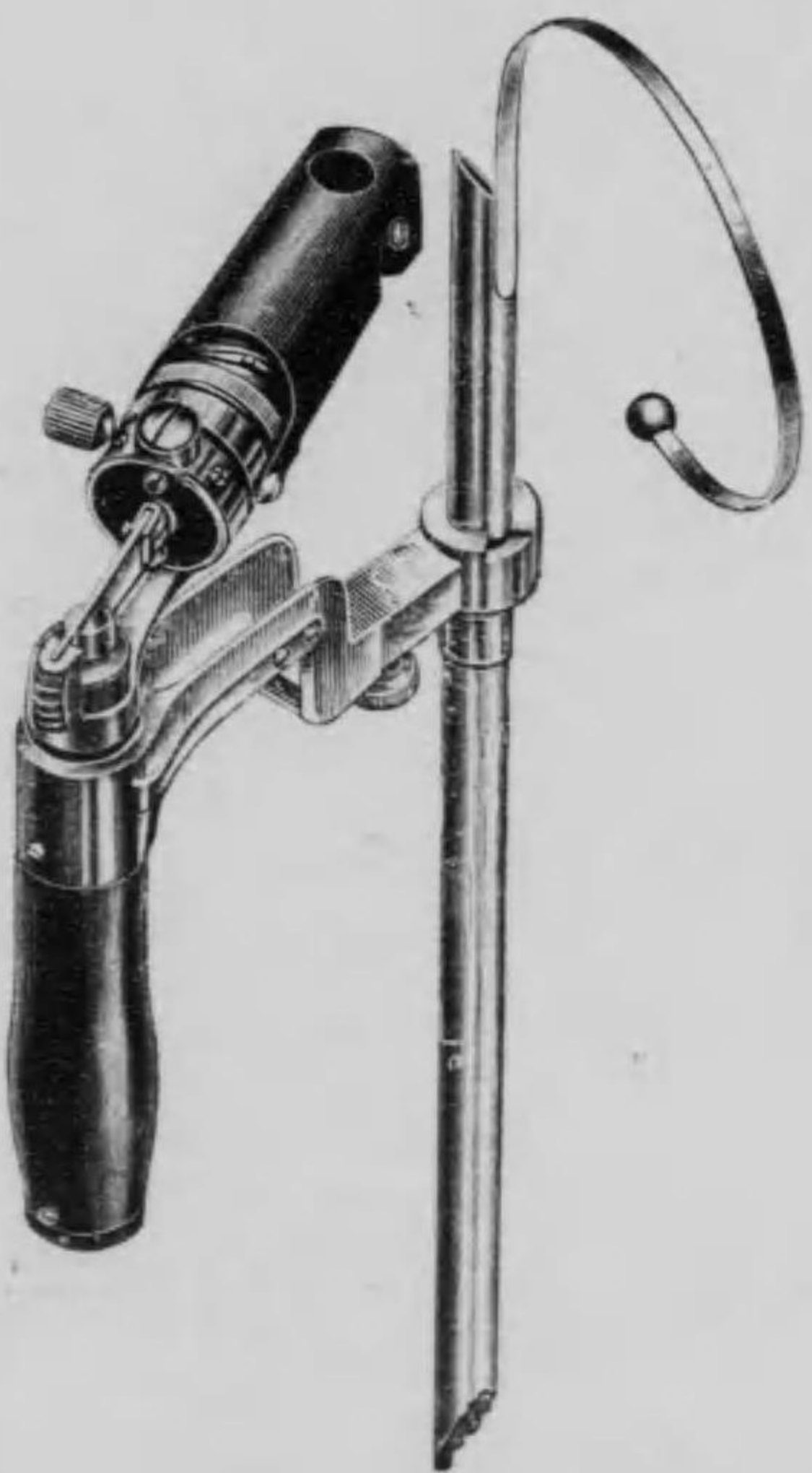
前額竇ヲ檢セント欲セバ眼
窩ノ天蓋ニ貼付シテ之ヲナ
スベシ

第八章 氣管及
氣管枝直達檢
査法 Tracheosco-
pia et Broncho-
scopia directa.

輒近キリアン氏(一八九七年)ノ考案ニ成ル検査法ニシテ金屬性強直管即
氣管枝鏡ヲ氣管及ビ氣管枝内ニ挿入シ内部ヲ精査シ之レヲ診斷並ニ治
療上ニ應用スルモノナリ

キリアン氏氣管枝鏡ハ管徑七及ビ九密迷ノ二種アリ十三乃至四十仙迷
ノ種々ノ長サヲ有スル長管ニシテ之ヲ氣管及ビ氣管枝ニ挿入シキル
ス
タイン前額燈又ハカスベル電燈ヲ以テ管腔ヨリ氣管枝内ヲ照射シ之ヲ
直視スルナリ

圖四十八第
鏡枝管氣直性延可氏スゲンニーユリア



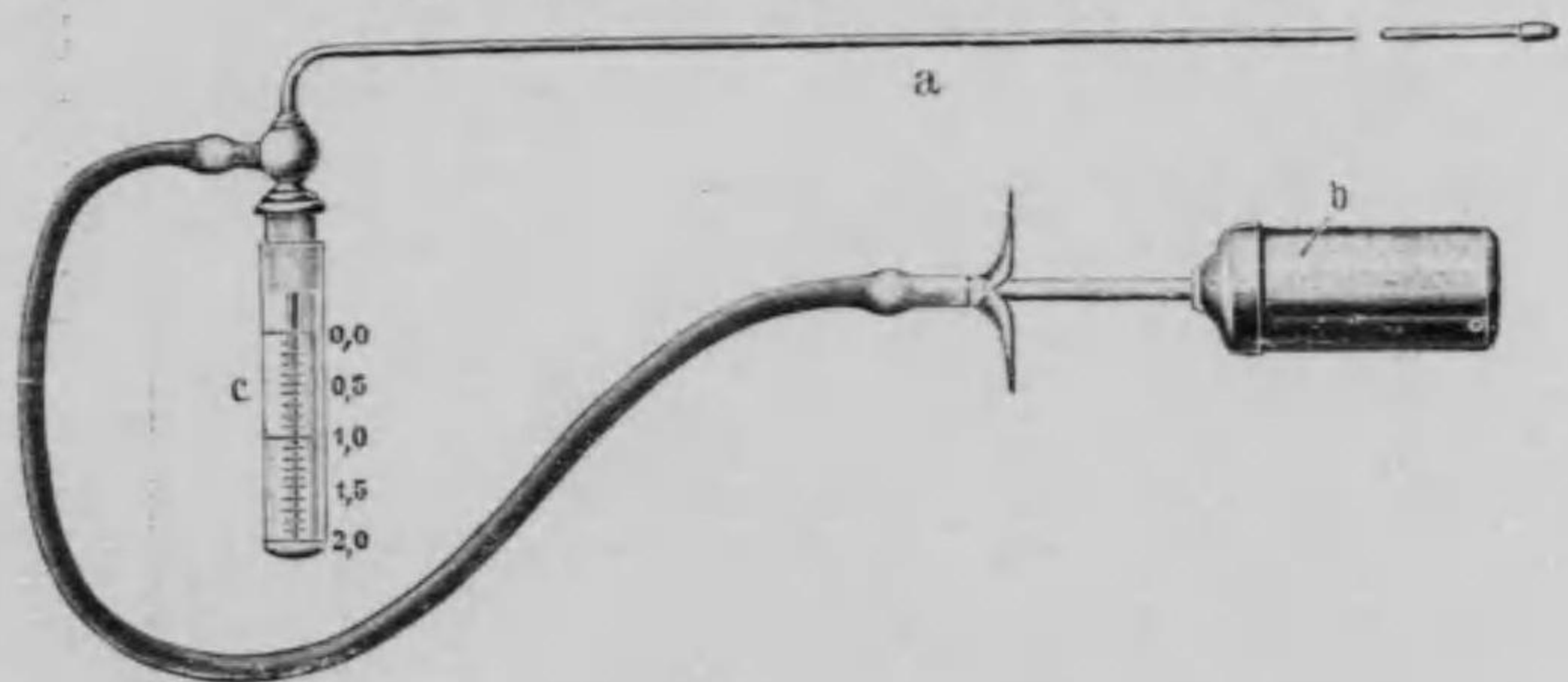
ブリユーニ
ングス氏ノ
改良セル氣
管枝鏡ハ導
管及ビ移動
管ノ二部ヨ
リ成リ一個
ノ管ハ隨意
ニ其長サヲ

變更シ得ベク且ツ特別ノ電燈裝置ヲ導管ノ把柄ニ付シタルモノニシテ
使用ニ便ナリ
以上ノ氣管枝鏡ヲ口腔ヲ經テ挿入スルヲ上氣管及氣管枝鏡検査法ト云
ヒ氣管切開口ヨリスルヲ下検査法ト云フ

上氣管及氣
管枝鏡検査
法

甲 上氣管及氣管枝鏡検査法

圖五十八第
器霧噴内管氣



患者ノ位置 坐位ヲ取ラシムルヲ便トスレ
ドモ全身麻酔ヲ施ストキ及ビ検査時間ノ長
キトキハ仰臥セシメ懸垂頭位ニテ行フ
麻酔 ハ局處麻酔ヲ佳トス即チ二〇%古加
乙濕水(アドレナリン)ヲ加フヲ咽頭壁ヨリ氣
管分岐部ニ至ル迄充分ニ塗布シ若クハ噴霧
シ反射機能ノ消失シタル時ハ
管挿入法 ヲ行フ先ヅ頭部ヲ少シク後方ニ
屈セシメ牽出セシメタル舌背ヲ壓下シツ、
導管ヲ大凡五乃至七仙迷挿入ス、管ノ大小ハ
豫メ患者ノ年齢ニ適當ナルモノヲ撰ビ煮沸
消毒シテ適宜ニ加温シ且ツ外面ニ油ヲ塗布
シテ滑澤ナラシムルヲ要ス
挿入シタル管ノ會厭軟骨先端ニ達スルヤ、把
柄ヲ運用シテ管ヲ會厭軟骨内側ニ入ル、コ

氣管及氣管枝直達検査法

プリューニングス氏上氣管枝鏡應用圖



圖 六 十 八 第

同下氣管枝鏡應用圖



圖 七 十 八 第

ト約二仙迷此際患者ヲシテ舌ノ牽引ヲ止メ且ツ強ク頭部ヲ後屈セシメ
 管ヲ以テ舌根ヲ壓抵スルトキハ明カニ喉頭内ヲ視ルベシ茲ニ於テ吸氣
 ニ際シ聲門ノ開大スルト同時ニ管ヲ深ク進メテ氣管内ニ入ラシム、次デ
 此導管内ニ移動管ヲ裝置シ適宜ノ長サニ伸縮シテ任意ノ位置ニ到達セ
 シメ之ヲ左右氣管枝ニ挿入ス、此時管壁ニアル孔ハ挿入セザル氣管枝側
 ニ向ハシメ呼吸ノ障害ヲ防グベシ
禁忌 高度ノ呼吸困難、大動脈瘤、心臟病、動脈硬化症、腦出血ニ罹リシモノ
 等ハ禁忌スベシ

乙 下氣管及氣管枝鏡検査法

器械其他ノ準備ハ前法ト同シ氣管切開口、氣管後壁、及ビ分岐部等ニ十%
 「コカイン」水(小兒ニハ五%)ヲ塗布シテ充分粘膜炎ヲ麻痺セシメ次デ切開口
 ヨリ氣管鏡ヲ挿入スルナリ
 下検査法ハ上検査法ニ比スレバ其操作甚ダ容易ニシテ時間ヲ要セズ且
 ツ患者ノ苦痛少ナシ故ニ喉頭性呼吸困難ノ劇シキ患者又タ異物ガ久シ

下氣管及氣管
枝鏡検査法

下氣管及氣管枝直達検査法

ク氣管又ハ氣管枝内ニ箱在シ周圍ノ粘膜甚シク腫脹シタル如キモノニ在リテハ上検査法ヨリモ下検査法ヲ安全ナリトス

第四編 一般治療論 Allgemeine Therapie.

第一章 全身療法 Allgemeine Behandlung.

上部氣道ノ疾病ヲ治療スルニ當リ只局部ノ處置ニ重キヲ置キ全身療法ヲ等閑ニ附スルハ充分ノ効果ヲ收ムルノ道ニアラズ必ズ他器官ト上部氣道ノ器質的或ハ官能的關係ヲ精査探求シ兩々相俟ツテ治療ヲ施スヲ要ス

豫防法ハ極メテ緊要ナリ殊ニ加答兒性ノ病症ニアリテ然リトス即チ屢々戶外ニ出デ、外氣ニ慣レシメ、清爽ノ空氣ヲ呼吸シ、或ハ冷水摩擦等ニヨリテ皮膚ヲ強壯ナラシムベシ

又厚薄其ノ度ヲ得タル被服ヲ用ヒ喫煙、飲酒等ヲ節制シ或ハ必要ニ應ジテ全然之ヲ禁ズベシ其他温暖ニ過ギ、又ハ換氣不良ノ室、強キ隙風襲來スル處、室温交換ノ烈シキ場所ニアルベカラズ

時トシテハ尿酸含有飲食物ノ攝取ニヨリテ容易ニ上部氣道ノ加答兒ヲ

誘發シ易キ傾向ヲ有スル人アリ此ノ如キ人ハ糖分又ハ澱粉質ヲ制限シ
野菜ヲ用フルヲ可トス喉頭及氣管ノ疾病ヲ治療スルニ當テハ新鮮清淨
ナル空氣ハ極メテ必要ニシテ輕度ノ喉頭病ハ市街ヲ去テ森林高燥ノ地
又ハ海濱ニ居ヲ移スノミニテ既ニ著シキ効ヲ收ムルコトアリ

第二章 洗滌法 Ausspülungen.

上部氣道ノ疾病ハ多クハ粘液分泌ヲ伴ヒ或ハ膿汁分泌ヲ來スガ故ニ洗
滌ヲ要ス

鼻浴 Nasendouche.

鼻浴ヲ行フニハ通常生理的食鹽水ノ微温液ヲ用
フルモノニシテ最モ簡單ナル方法ハ小ナル茶匙ヲ以
テ前鼻孔ヨリ注意シテ徐々ニ注入シ鼻咽腔ヨリ口腔
ニ排出セシメ或ハ之ヲ嚥下スルモノナリ(但シ膿汁ノ
多量ニ存在スルトキハ通常此ノ方法ヲ用ヒズ且嚥下
スルヲ不可トス)又フレンケル氏シユミット氏等ノ鼻
浴管ヲ使用ス



第八十八圖
フレンケル氏鼻浴管

洗滌法

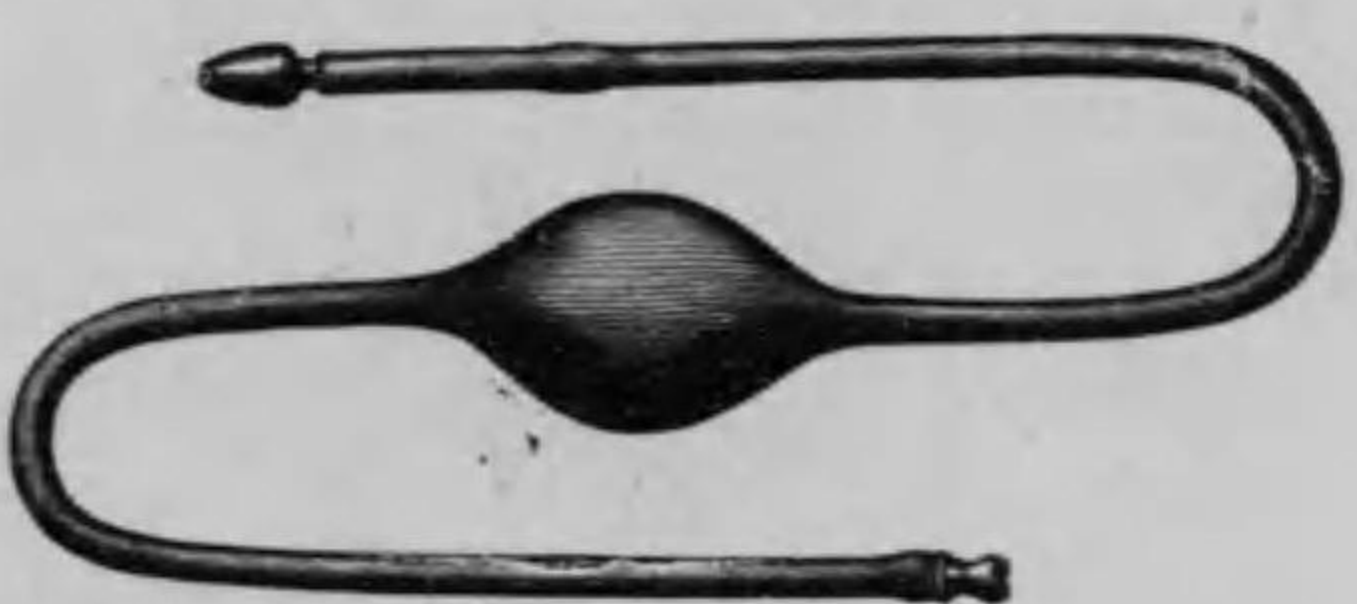
鼻浴

洗鼻

鼻洗滌法 A. der Nasenhöhle.

稍多量ノ液ヲ以テ鼻腔内ヲ洗滌セン
ト欲セバ五十乃至百瓦ノ内容ヲ有スル「ゴム」球内ニ液ヲ容レ鼻孔ニ適合
セル嘴端ヲ附着シ置キテ鼻孔ニ向ハシメ「ゴム」球
ヲ壓シテ液ヲ鼻内ニ注入ス若シ尙ホ多量ノ液ヲ
以テセント欲セバ浣注唧筒ヲ應用スベシ鼻洗滌
ヲ行フニ際シ患者及ビ術者ノ注意スベキコトハ
次ノ數項ニシテ就中第二乃至第七項ハ主トシテ
歐氏管内ニ膿汁又ハ洗液ノ侵入ヲ豫防スルニ必
要ナルコトナリトス

第八十九圖
洗鼻器



要ス

- 1 液ノ温度ヲ適當ナラシム即チ攝氏三十度乃至三十五度位ヲ可トス
- 2 「ゴム」球ヲ壓迫スルニ強劇ナルベカラズ
- 3 洗滌液ハ必ズ他側ノ鼻道ヨリ流出スルヲ
- 4 左右鼻道ノ開通不同ナルトキハ其開通不充分ナル側ヨリ流入シ

洗滌法

含漱

善ク開通セル側ヨリ排出セシムベシ然ルトキハ液ノ流出佳良ナリ

- 5 洗滌時ハ決シテ嚙下運動ヲナスベカラズ
- 6 液ヲ注入スル際ニハ鼻呼吸セザルベシ只口腔ヲ通ジテ安靜ニ呼吸シ此際「ハアー」ナル發音ヲナスヲ可トス
- 7 洗鼻後數分間ハ擗マザルベシ若シ擗ムトキハ一側ノ鼻道ヲ閉ヂテ他側ヨリ噴出セシムベク且ツ決シテ強劇ナルベカラズ
- 8 洗鼻後直チニ寒冷ノ外氣ニ觸レザルヲ宜シトス

含漱 Gurgeln 咽頭腔ニ於ケル膿汁又ハ粘液ヲ排除シ或ハ藥物含有ノ液體ヲ以テ病變部ニ藥効ヲ作用セシメンガ爲メニ行フ方法ニシテ其法先ヅ藥液ヲ口内ニ含ミタル後チ頭部ヲ後屈シテ後下方ニ流下セシメ食道上部ニ達スルニ至テ吐出ス此ノ如クスルコト五六回乃至十回ニ及ブ而シテ通常使用スル藥品ハ目的ニ因リテ異ナルモノナリ單ニ洗滌ノ爲メニハ清淨ノ微温湯ヲ用ヒ或ハ稀薄ノ硼酸水、鹽剝水、揚酸水ノ如キ藥物ヲ含有スルモノヲ用フベシ又之ニ薄荷水ヲ加味シテ清涼ナラシム其他

噴霧法

第九十圖 噴霧器



第三章 噴霧法 Spray

液狀藥物又ハ溶解性ノ藥品ハ噴霧裝置ヲ應用スルトキハ上部氣道ノ全

腐敗性疾病ニ向ツテハ一萬倍ノ過
滿俺酸加里液等ヲ用ヒ或ハ分泌物
ノ乾燥凝着シタルモノニハ亞爾加
里劑殊ニ重曹食鹽水等ヲ稱用ス其
他左ノ如キ處方アリ

- 1 チモール 〇、二五
安息香酸 三、〇
有加利丁幾 三、〇
蒸溜水 七五〇、〇
- 2 ザロールメント油 各 一、〇
再溜酒精 九四、〇
右數滴ヲ「コップ」一杯ノ水ニ混シテ用フ
(キアリー氏)

部ニ平等ニ作用セシムルコトヲ得ルモノニシテ噴霧器ハ各部分ニ應ジテ之ニ適合セル嘴端ヲ付スベシ

吸入法

第四章 吸入法 Inhalation.

吸入法ニ種々アリ其單筒ナルハ種々ノ藥劑ヲ熱湯ニ注加シ紙製漏斗ニヨリテ嗅引シ又ハ藥劑ヲ吸收スベキ海綿ヲ有スルクルシュマン氏假面ヲ用ヒテ一日數回吸入セシムルモアリ稍ヤ複雑ナル方法ハ蒸汽噴出裝置(即チ吸入器)ニヨリテ水蒸氣ト共ニ藥劑ヲ噴霧セシメテ吸入スルモノトス一般ニ用ヒラル、藥劑ハ左ノ如シ

1. 天然鑛泉
2. 收斂藥(明礬、單寧、硫酸亞鉛)
3. 消毒藥(鹽剝、硼酸、石炭酸)
4. 麻醉藥(臭剝、阿片、丁幾、古加乙涅)
5. 解凝藥(食鹽、重曹、硼砂)等ナリ

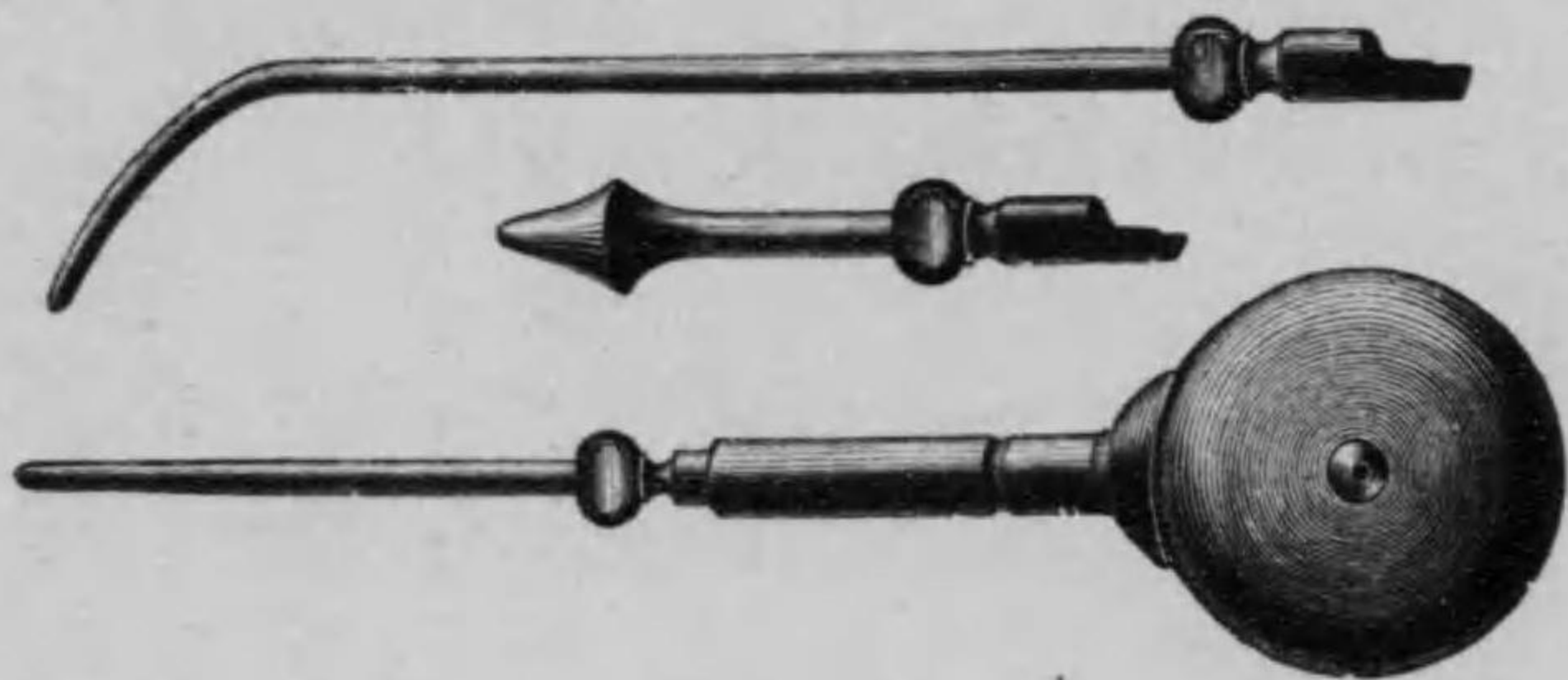
粉末藥劑應用法

第五章 粉末藥劑ノ應用 Anwendung von

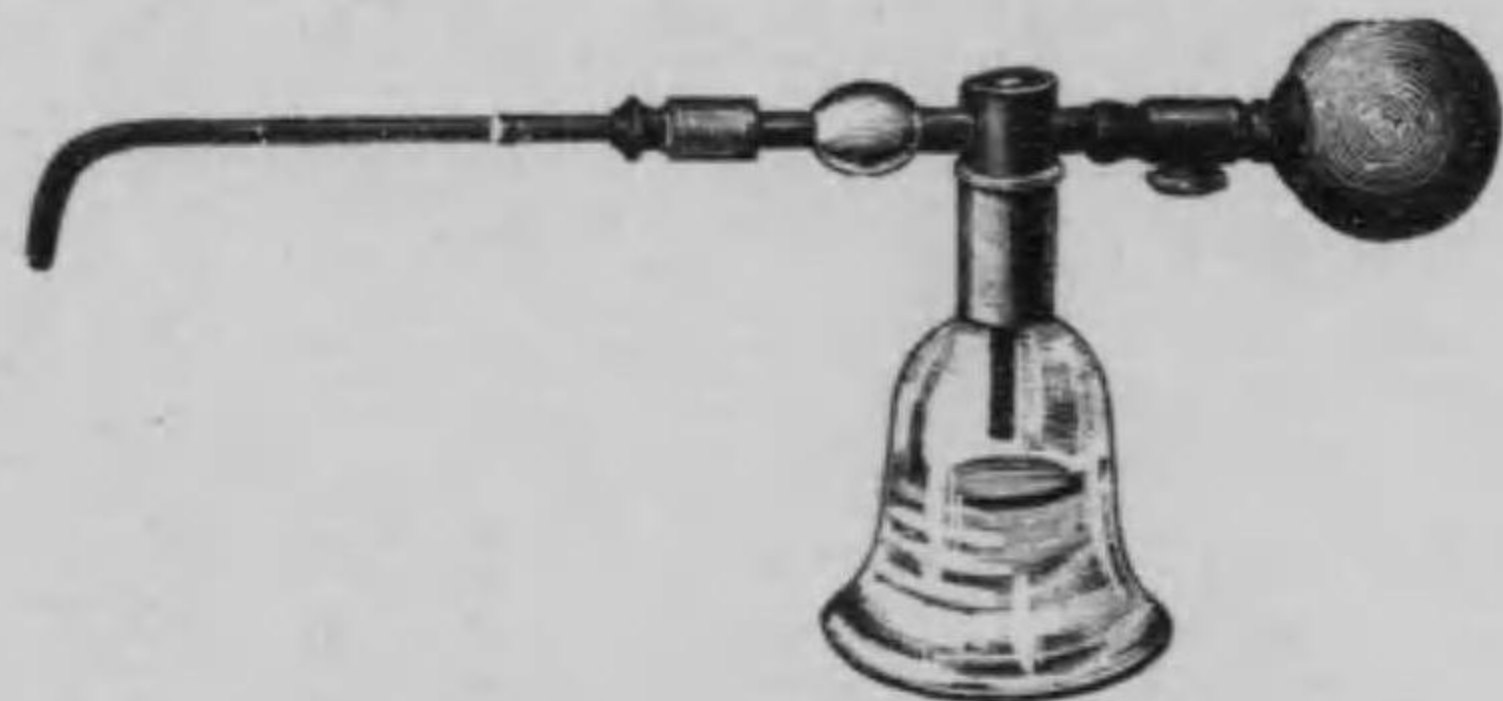
pulverförmigen Medicamenten.

粉末形藥劑ヲ應用セント欲セバ吹粉器第九十一圖乃至九十三圖ヲ用フ、

第九十一圖
ルエツ氏吹粉器



第九十二圖
フレッケン氏吹粉器



第九十三圖
カピスル氏吹粉器



吹粉器 ハルーツエ、ジュミット、ハイマン等諸氏ノ改造シタルモノハ最モ
 適當ナリ 通常應用セラルル藥劑ハ次ノ如シ
 麻醉藥 莫爾比涅、古加乙涅、オイカイン(一回0.005—0.002)澱粉0.2
 —0.3(オルトフォルム(純粹)又ハ、アネステジン)等
 消毒藥 硼酸(純又ハ澱粉等分)沃度兒、デルマトール、アリストール、アイ
 ロール、ノゾフェン等ノ純又ハ護膜末等分ノモノ
 收斂藥

- | | | | |
|---------------|----------|--------------|----------|
| 1 硝酸銀 | 0.05—0.2 | 3 「ソツオヨドル」亞鉛 | 1.0 |
| 滑石 | 1.0—0 | 澱粉 | 1.0—2.0 |
| 2 「ソツオヨドル」那篤倫 | 1.0 | 4 明礬 | |
| 澱粉 | 2.0 | 單寧 | 純又ハ澱粉ヲ混ズ |

第六章 塗布法 Pinselungen.

藥液ヲ塗布スルニハ鼻腔、鼻咽腔、喉頭等ノ各所ニ適應セル大小形狀ヲ有
 スル捲綿子ニ消毒綿花ヲ纏絡シ之レニ藥液ヲ浸漬シタルモノヲ以テ直
 接患部ニ塗布スルナリ

塗布法

收斂藥

收斂藥

- | | |
|-------|-----------|
| 二—一〇% | 硝酸銀液 |
| 五—二〇% | 單寧グリセリン |
| 二—三% | 硫酸亞鉛液 |
| 一—五% | 過クロール鐵液 |
| 一〇% | 明礬液 |
| 五—一〇% | プロクターゴール液 |

制腐藥

制腐藥

- | | |
|----------|------|
| 二—五% | 石炭酸液 |
| 二—三% | 硼酸水 |
| 〇、一—〇、二% | 昇汞水 |

解凝藥

解凝藥

- | | |
|----------------|-----|
| 〇、六—一% | 食鹽水 |
| 沃度 佩里設林 | |
| 沃度 〇、二—〇、四 | |
| 沃加 〇、五—一、〇 | |
| リスリン 二〇、〇—四〇、〇 | |
- (「メンタ」油又ハ石炭酸ヲ付加スルモ佳ナリ)

塗布法

局處麻醉及
鎮痙藥

局處麻醉及鎮痙藥

二%—一〇% 古加乙混水

(手術ニハ一〇%—二〇%ヲ用フ)

又安知必林ト配合スルモ佳トス

(安知必林二、〇古加乙混一、〇溜水一〇、〇)

〇、五—一〇、〇% アコイン

一〇、〇—五〇% 薄荷腦油

一〇、—二〇、〇% オイカイン液

五—一〇% 臭剝液

五—一〇、〇% 阿片丁幾

〇、二—〇、五水一〇、〇 鹽莫水

當今血管收縮藥トシテ尤モ稱用セラル、ハ「アドレナリン」ニシテ局部ヲ無血ナラシメ手術ヲ行フニ必要ナリ但シ局處麻醉作用ハ古加乙混ニ及バザルヲ以テ二種ヲ配合セバ一層便利ナリトス

腐蝕藥

第七章 腐蝕藥 Chemische Aetznittel.

腐蝕藥ハ鼻腔及ビ咽頭ニ應用スルコト多シ

「ラ・イ・ビ・ス」使用ニ當リ其ノ一片ニ熱ヲ與ヘテ溶解セシメ銀製探子ノ尖端ヲ其中ニ刺入シ直チニ引出シテ冷却セシメ探子ノ尖端ニ適宜ノ大サヲ有スル「ラ・イ・ビ・ス」球ヲ形成セシムベシ

硝酸銀 二—二〇%溶液ヲ造リ綿花ニ浸漬シテ用フ

三・クロール・醋酸 融解シ易キモノナルガ故ニ捲綿子ニ綿花ヲ纏絡シテ

之レニ其小結晶ノ一ツヲ附着セシメ綿花ニ浸漬シタルモノヲ以テ腐蝕

ス「ラ・イ・ビ・ス」ヨリハ腐蝕力強シ

「クローム酸」前二者ヨリ一層腐蝕作用強烈ナリ本品ハ溶液及ビ固形體

トシテ應用スルモノニシテ溶液ハ十%乃至五〇%トシテ用ヒ結晶ノモ

ノハ其一小片ヲ探子ノ尖端ニ附着セシメタル後チ之ヲ「アルコール」燈火

上ニ持來スベシ「クローム酸」溶液ノ再ビ冷却スルトキハ「ラ・イ・ビ・ス」ト同ジ

ク探子ノ尖端ハ「クローム酸」ヲ以テ被蓋セララル、モノナリ

乳酸 純若シクハ二十%乃至五十%ノモノヲ用フ主トシテ咽喉ノ結核

ニ應用ス

以上ノ藥物ヲ以テ腐蝕スルニハ豫メ五—一〇%古加乙混溶液ヲ塗布シ

腐蝕藥

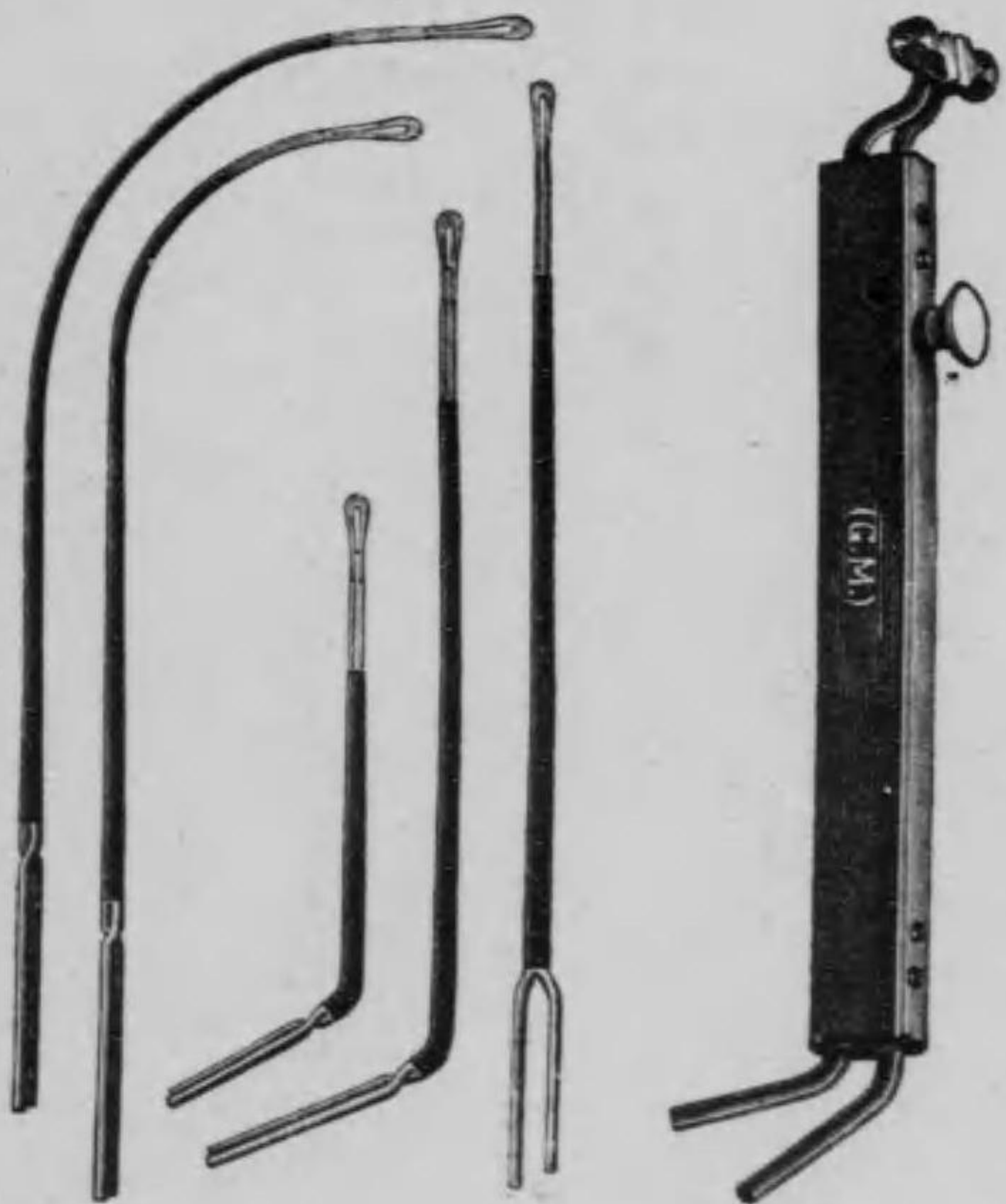
置クベシ又腐蝕後亞爾加里液ヲ塗布シテ中和セシムルヲ佳トス但シ三「クロール」醋酸ハ中和セシムルニ及バザルモノトス

第八章 電氣燒灼法 Galvanokautik.

電氣燒灼法

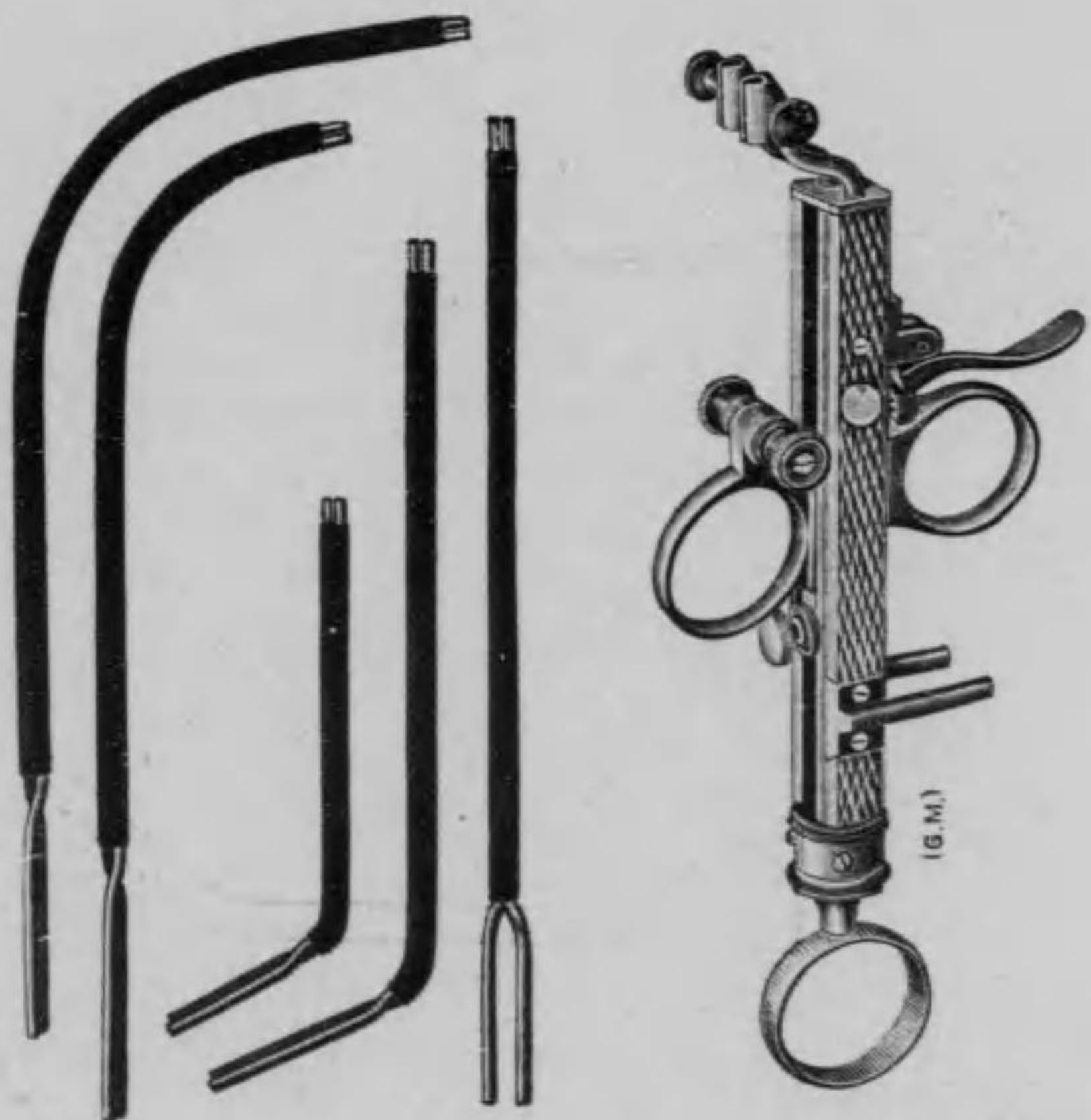
電氣燒灼法ハ藥物腐蝕ヨリモ強烈ナル作用ヲ粘膜ニ及ボスモノニシテ使用スル部分及ビ其方法ニ從ヒ種々ノ形狀ヲ呈セル白金ヨリ成ル燒灼子ヲ以テ行フモノ也電原トシテハ燒灼用藥液内沈入電池最モ簡便ナリ其他蓄電裝置又ハ發電所ヨリ送ル所ノ電流ヲ一定ノ調節器ニ聯

圖四十九第 電氣燒灼子及柄



吸引療法

圖五十九第 熱保管及柄



絡シテ用フルヲ得又白金線係蹄ニ電流ヲ通ジテ用フルコトアリ之ヲ熱保蹄ト云ヒ出血性腫瘍等ヲ灼斷スルニ缺ク可カラザルモノトス

第九章

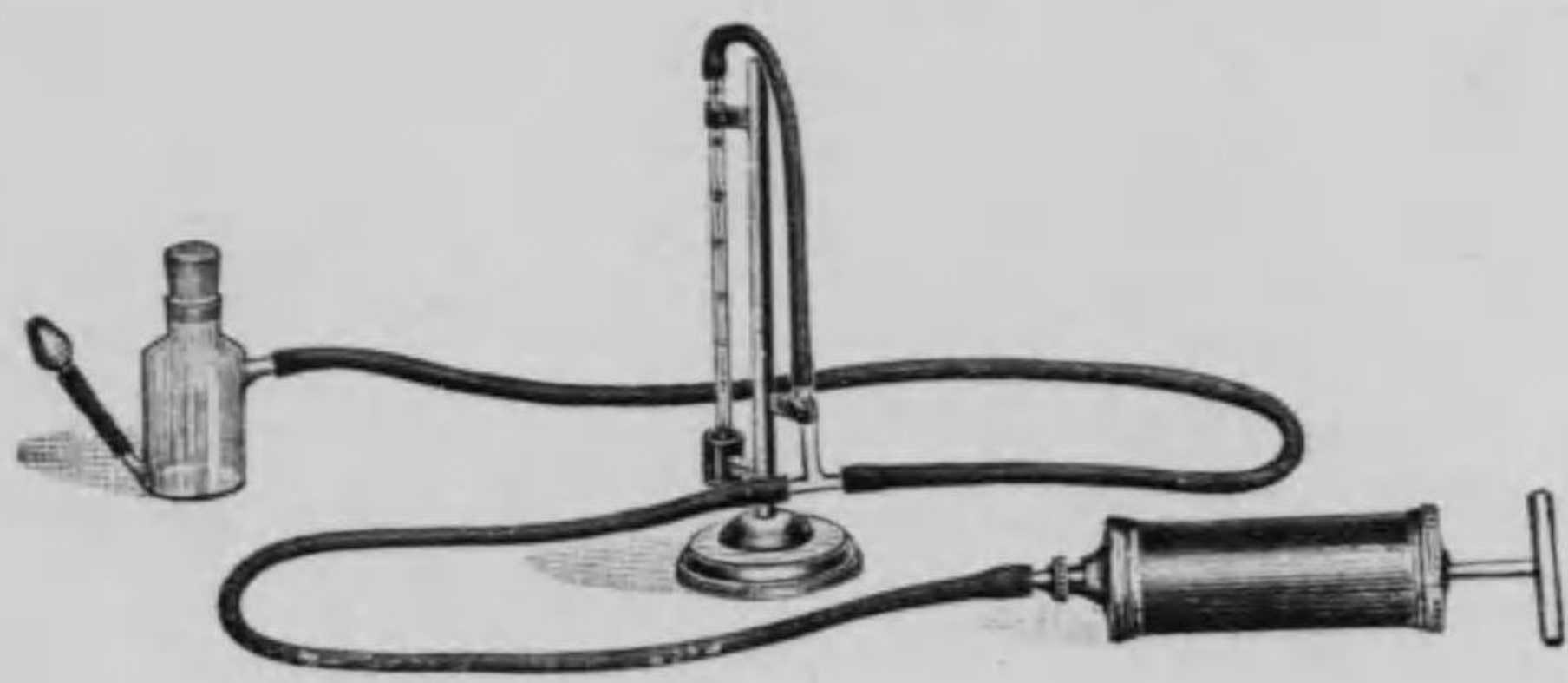
吸引療法

Saugtherapie

鼻腔及副鼻腔ノ疾病ニ應用セラル、モノニシテ裝置ハ簡單ナル「ポンプ」ト鼻口ニ適合スベキ嘴端ヨリ成ル、尙ホ陰壓ヲ測定スベキ「マノメーター」ヲ連結スルトキハ安全ナリ、副鼻腔滯膿症ニ用ルトキハ細微ノ腔窩内ニ

電氣燒灼法 吸引療法

第九十六圖
吸引裝置



第九十七圖
扁桃腺吸引管



存在スル膿汁ヲ吸出スル
コトヲ得ルモノニシテ一
日一回若クハ二三日毎ニ
一回ヅ、數日間持續使用
スルトキハ著効ヲ奏スル
コトアリ但シ上顎竇滯膿
症ニハ効ヲ見ルコト少ナ
シ又慢性肥厚性鼻炎ニ用
ヒ鼻閉塞、頭重、及ビ頭痛ノ
輕快若クハ消失スルコト
稀レナラズ
又吸引裝置ヲ應用シテ膿
汁分泌部ヲ確認スルニヨ
リ滯膿ノ部位ヲ診斷スル
ヲ得ベシ

鼻咽喉氣管病學各論

第一編 鼻腔ノ疾病 Krankheiten der Nasenhöhle.

第一章 鼻粘膜炎症 Entzündungen der

Nasenschleimhaut.

急性加答兒性鼻炎又鼻感冒 Rhinitis catarrhalis

acuta s. Coryza acuta s. Schnupfen.

鼻粘膜炎症

鼻感冒

原因 最モ多キ原因ハ外氣溫度ノ劇變、冷濕、強劇ナル光線等ニシテ頭
部、頸部、項部、足脚ノ冷却等モ亦與ツテカアリ又塵埃多キ空氣、植物ノ花粉
格魯兒瓦斯、安母尼亞瓦斯或ハ熱蒸汽等ノ嗅引等ノ如キ化學的、器械的刺
戟ニ由リテ誘發セラル且ツ急性傳染病ニ續發スルコト頗ル多ク殊ニ、イ
ンフルエンザニ於テ多シトス又麻疹、室扶斯、猩紅熱等ノ經過中ニモ來ル
又近隣諸臟器ノ疾病ニ續發シ或ハ沃度劑、安知必林等ノ内服ニヨリテ發

急性加答兒性鼻炎

スルコト少ナカラズ
 其他神經衰弱ヒステリイ等ノ患者ハ神經性鼻炎ヲ起スコトアリ
 フレンケル氏ニ據レバ本症ハ散在性流行性ニ來ルコトアリ時トシテハ
 一家數人ノ同病患者ヲ出スコト稀ナラズ
 近來特殊細菌ノ關係ヲ説クモノアリテ一種ノ小有機體ヲ發見セリト云
 ヒ或ハ肺炎菌ト同一ノモノヲ見タリト云フモ未ダ一定ノ確證アルニア
 ラズ要スルニ鼻感冒ハ恐ラクム微機生體ニ因リテ起ル一種ノ傳染性疾
 患ナルベシ

病理解剖

充血、圓形細胞浸潤、次デ浮腫狀浸潤、上皮細胞剝離及ビ變
 性、血球滲漏、粘液腺分泌亢盛等ヲ來ス

症候及經過

鼻感冒症狀ハ個人ノ特性ニ從ツテ一様ナラズト雖モ
 最初數回ノ強劇ナル噴嚏ヲ以テ起ルコト多シ概ネ數時間又ハ數日前ヨ
 リ全身違和、倦怠、頭重、鼻咽腔内癢痒及ビ輕微ノ惡寒等アリ次デ鼻腔内灼
 熱、乾燥、癢痒ヲ感ズ又噴嚏頻發、鼻閉塞、分泌增多ヲ來ス分泌物ハ初メ水樣
 稀薄ニシテ漸次粘液膿性トナリ遂ニ膿性ニ變ジ一—二週ノ後チニ至リ

テ消退ス鼻閉塞ハ輕度ナルアリ強度ナルアリ多クハ横臥ニ際シ其下側
 ハ著シク閉塞スルモノニシテ鼻呼吸爲メニ障害セラレ閉鎖性鼻聲ヲ來
 シ嗅覺及ビ味覺ハ鈍麻シ若クハ脱失ス熱ハ通常輕度ニシテ合併症ナキ
 トキハ無熱ノコトアリ

初生兒急性鼻感冒ハ其ノ症狀甚ダ劇烈ニシテ時トシテハ不穩ノ狀ヲ呈
 ス何トナレバ初生兒ハ口呼吸ヲ以テ鼻呼吸ニ代フルコトヲ知ラズ專ラ
 自然ノ呼吸道タル鼻腔ヨリ呼吸ヲ營ムモノナルガ故ニ一朝鼻閉塞顯著
 トナルトキハ呼吸困難ヲ來シ安眠ヲ妨ゲラレ又哺乳不充分ナルガ爲メ
 衰弱ニ陥リ危險ヲ來スコトアリ

合併症及續發症

管枝炎肺炎等ナリ

眼病及ビ耳病最モ多シ其他副鼻腔、鼻咽腔、喉頭氣

診斷

小兒ニ於テハ麻疹ノ初期ニ現ハル、鼻加答兒又ハ哺乳兒ノ遺
 傳梅毒ニ因スル加答兒ト單純ノ鼻感冒トノ判別ハ決シテ容易ナラズ又
 單純ノ鼻感冒ハ神經性鼻炎ニ於ケル粘膜炎ノ充血狀態ニ酷似スルモノナ
 レドモ神經性鼻炎ハ直接ノ原因及ビ前驅症ヲ認メズシテ急劇ニ發シ多

量ノ漿液性鼻汁流出シ及數分時ノ後チ俄カニ停止スルコトアリ且ツ分泌物膿性ニ變ゼザルトコカイン塗布ヲ行フニ粘膜ノ貧血及收縮ノ一層顯著ナル等ヲ以テ鑑別スルヲ得ベシ

豫後 一般ニ佳良ナリ合併症及ビ續發症ヲ起ストキハ時トシテ不良ナルコトナキニ非ズ殊ニ哺乳兒ニ在リテハ多大ノ注意ヲ要ス

療法 豫防ヲ第一トス發病ノ初期ニハ氣温ノ急劇變換ヲ避ケ飲酒喫煙ヲ廢シ塵埃中ニ作業スルモノ又ハ化學的職業ニ従事スルモノハ一時之レヲ中止スルヲ可トス

頓挫法トシテ最モ效力アルハ身體ノ温保及ビ發汗法ナリ種々ノ熱飲料ヲ服用セシメ其他安知必林「アスピリン」フエナセチン「撒曹」ザルピリン等ノ解熱藥ヲ投ズ

局處療法ハ揮發性流動性又ハ粉性藥劑ノ嗅引吹入塗布及ビ噴霧等ナリ

處方

1 石炭酸
苛性安母尼亞液
酒精

各 五、〇
二〇、〇

開水

右五十滴ヲ手巾又ハ海綿ニ浸シ毎二時數分間

一五、〇

嗅引セシム

2 石炭酸

鹽酸古加乙混

精製食鹽

蒸餾水

右鼻内噴霧料

古加乙混

薄荷腦

乳糖

右研和一日三—四回鼻内吹入

4 古加乙混

レゾルチン溶液 (〇、一)

右一日三—五—十五滴棉花ニ浸漬シ鼻内挿

入

「ビスミット」

「アラビア」護膜

鹽酸「モルヒネ」

右鼻内吹入料(テルリール氏散)

薄荷腦

薑渣茄末

硼酸

滑石

右混和シ少許ヲ取り一日數回鼻内吹入

一〇、〇

七五、〇

二、〇

〇、〇三

〇、一〇、二

各 〇、五

一〇、〇

膿性分泌持續スルモノニハ二—五%硝酸銀ヲ塗布シ或ハ硝酸銀末一、〇—二、〇ヲ混和シ其少許ヲ鼻内ニ吹入シ後微温食鹽水ニテ洗鼻ヲ施ス

急性化膿性鼻炎(膿漏性鼻炎)

acutas. Rhinitis blennorrhoeica.

Rhinitis purulenta

急性化膿性鼻炎

急性化膿性鼻炎

原因 急性傳染病就中丹毒、猩紅熱、痘瘡等ヨリ起リ或ハ淋毒ノ傳染ニ由テ來ルモノニシテ小兒ニ多シ

症候 高度ノ粘膜腫脹、潮紅ヲ來シ分泌物ハ初期ヨリ純膿性ニシテ臭氣ヲ帶ビ時トシテ血液ヲ混ズルコトアリ又全身症狀著明ナリ

療法 二%硼酸水又ハ食鹽水ヲ以テ鼻腔ヲ洗滌シテ清淨ナラシメ後チ硼酸沃度兒、硝酸銀末等ノ吹入ヲ行フ

處方

1 「タンニエゲン」
硫酸「キニーネ」

三〇
〇、一

撒里矢兒酸
右吹入

〇、三

慢性肥厚性鼻

慢性肥厚性鼻炎 又 增殖性鼻炎 Rhinitis chronica

hypertrophicans s. hyperplastica.

原因 急性鼻炎ノ處置ヲ誤リ或ハ頻々再發シテ遂ニ本症ヲ發スルモノ多シ而シテ腺病質、貧血、痛風等アルモノニ來リ易ク且ツ本症ニ罹ルモノ壯年者ニ多ク又男子ハ女子ヨリ多シ直接原因トシテハ濕潤ノ氣候、氣

自覺症候

温ノ變換劇シク且ツ頻繁ナルコト、坐業過温ノ室、換氣不良ノ住居、厚薄不適當ナル被服、煙草酒類ノ過用、消化不良、循環器障害等ナリ又近隣諸臟器ノ疾病ハ本症ヲ誘發シ易キモノニシテ殊ニ副鼻腔、蓄膿症、鼻咽腔腺肥大症、慢性咽喉炎、扁桃腺炎等ヲ患フルモノニ來ルコト多シ

病理解剖 鼻粘膜ノ上皮細胞肥厚増殖シ時トシテハ其ノ表面剝離スルコトアリ主要ナル變化ハ固有層ニシテ即チ上皮層下ニ於テ通常腺組織ノ著シク増加スルヲ見ルベシ又腺腔及ビ其排泄管并ニ深部ニ位セル血管著シク擴張シ殊ニ海綿體ニ於テ顯著ニシテ其ノ壁肥厚ス且ツ隨所新生結締織ノ索狀ヲ呈セルモノヲ見ル

症候 ヲ自覺症候及他覺症候ニ分ツ

A 自覺症候

1 **鼻閉塞** 多クハ間歇性ニシテ步行、入浴後等ハ通氣佳良トナルモノナリ概シテ晝間ヨリモ夜間ニ鼻呼吸ノ障害セララル、モノ多シ又兩側同時ニ來ルコトアレドモ通常左右交代性ニシテ孰レカ一

慢性肥厚性鼻炎

他覺症候

圖八十九第
(查檢鼻前)炎鼻性厚肥



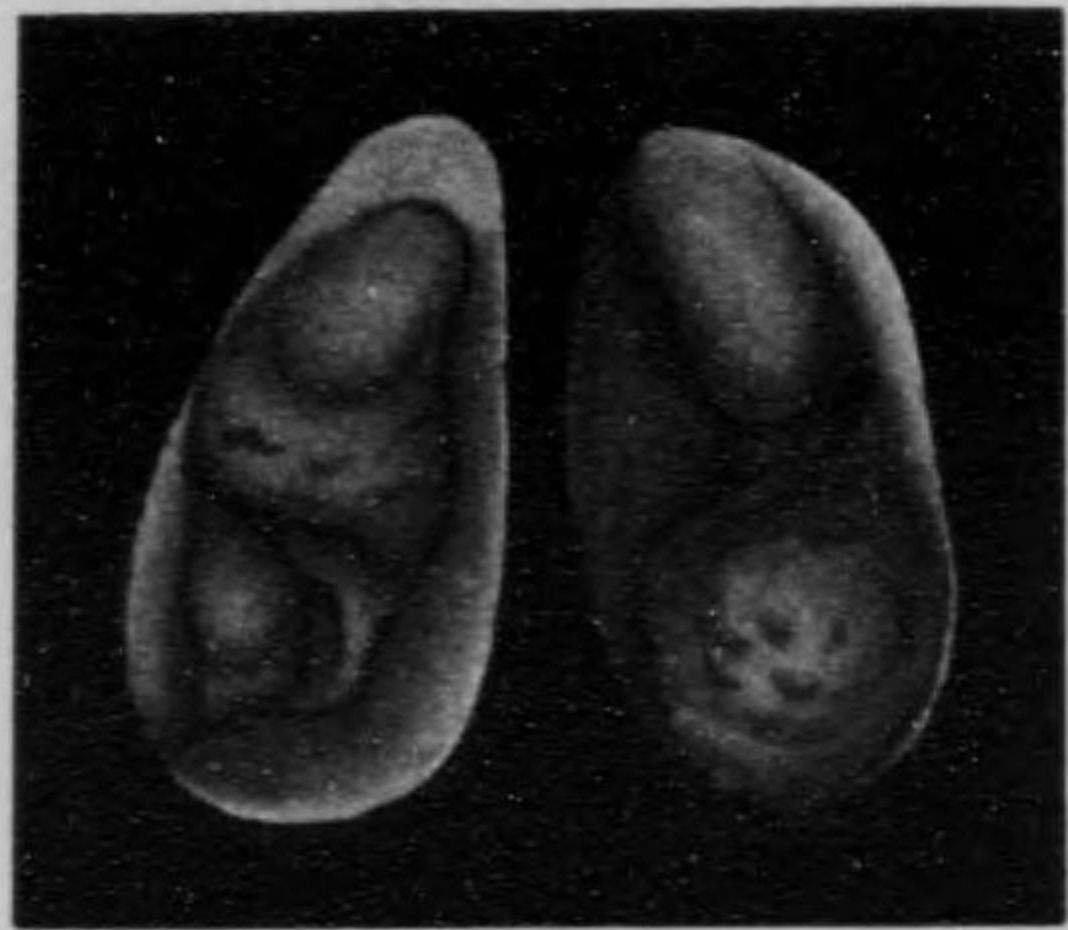
- 2 側ノ輕微ナルカ或ハ全然快通スルコト少ナカラズ
- 2 鼻聲 鼻腔狹窄又ハ閉塞ニ伴フモノニシテ所謂閉塞性鼻聲ナリ
- 3 嗅覺異常 一時性ナルアリ持續性ナルアリ吸氣ノ進入障害ニ因リテ起リ或ハ嗅神經末梢ノ變常ニ由リテ嗅覺鈍麻若シクハ全脫失ヲ來タスモノニシテ嗅覺過敏又ハ嗅覺變常ヲ來スハ稀ナリ
- 4 分泌變常 通常分泌亢盛スルモノニシテ稀レニハ分泌却テ減少シ乾燥ヲ訴フルモノアリ
- 5 衄血 屢々見ル處ナリ
- 6 神經症狀 頭重、頭痛、眩暈、倦怠、記憶乏弱、不眠、咽喉絞扼感、肩胛部拘攣、喘息等ヲ起ス

B 他覺症候

1 粘膜炎發赤腫脹 ハ其ノ主要ナルモノニシテ脈管運動神經性鼻炎及ビ單純慢性加答兒性鼻炎ニ於ケルガ如ク赤色著シカラズ



1



2



3



4

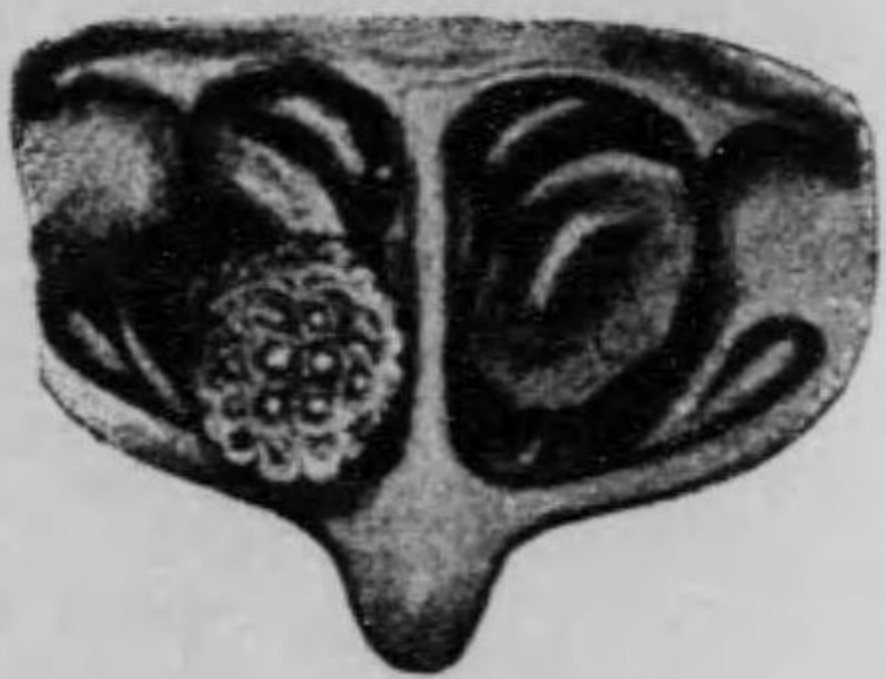
第六着色圖

(グリユーンワルド氏ニ據ル)

1. 右多發性粘液茸
左大ナル單發性粘液茸
2. 右中甲介前端肥厚膨大
左下甲介前端肥厚膨大
3. 右中甲介著シク外側壁ヨリ隔離シ其間ニ前額竇排泄
口ヲ見ル
4. 左鼻道擴大シ中甲介骨小ニシテ蝴蝶竇口ヲ見ル

圖九十九第

下ルタ見テリヨニ査檢鼻後
ス示テ厚肥伏吻乳端後介甲



ト雖モ肥厚性鼻炎ニアリテモ稍ヤ顯著
ノ發赤ヲ來スコトアリ然レドモ時トシ
テハ却テ灰白色、淡紅色ナルアリ腫脹部
位ハ下甲介ニ最モ多ク中甲介及ビ鼻中
隔之レニ次グ甲介粘膜ノ肥厚ハ各部一
様ナルアリ又前後兩端ニ著シキアリ且
ツ粘膜ノ表面ハ平滑ナルモノ多シト雖モ時トシテハ凹凸不平ニ
シテ恰モ覆盆子狀ヲ呈スルモノアリ又分葉狀ヲ呈スルモノアリ
此ノ如キハ特ニ下甲介後端ニ於テ屢々見ル處ナリ

- 2 甲介肥大 往々骨胞腫ヲ發生シ又中隔彎曲、棘狀突起等ヲ併有ス
- 3 分泌物 稀レニハ稀薄水樣液ナルコトアリト雖モ多クハ粘液性
或ハ粘液膿性ニシテ白色黄色若クハ綠色ヲ帶ブ膿性ナルハ多ク
ハ副鼻腔ノ滯膿症ヲ合併スルモノナリ

合併症

慢性咽頭加答兒、喉頭加答兒、副鼻腔疾患、中耳炎、外鼻齶血等ナ

慢性肥厚性鼻炎

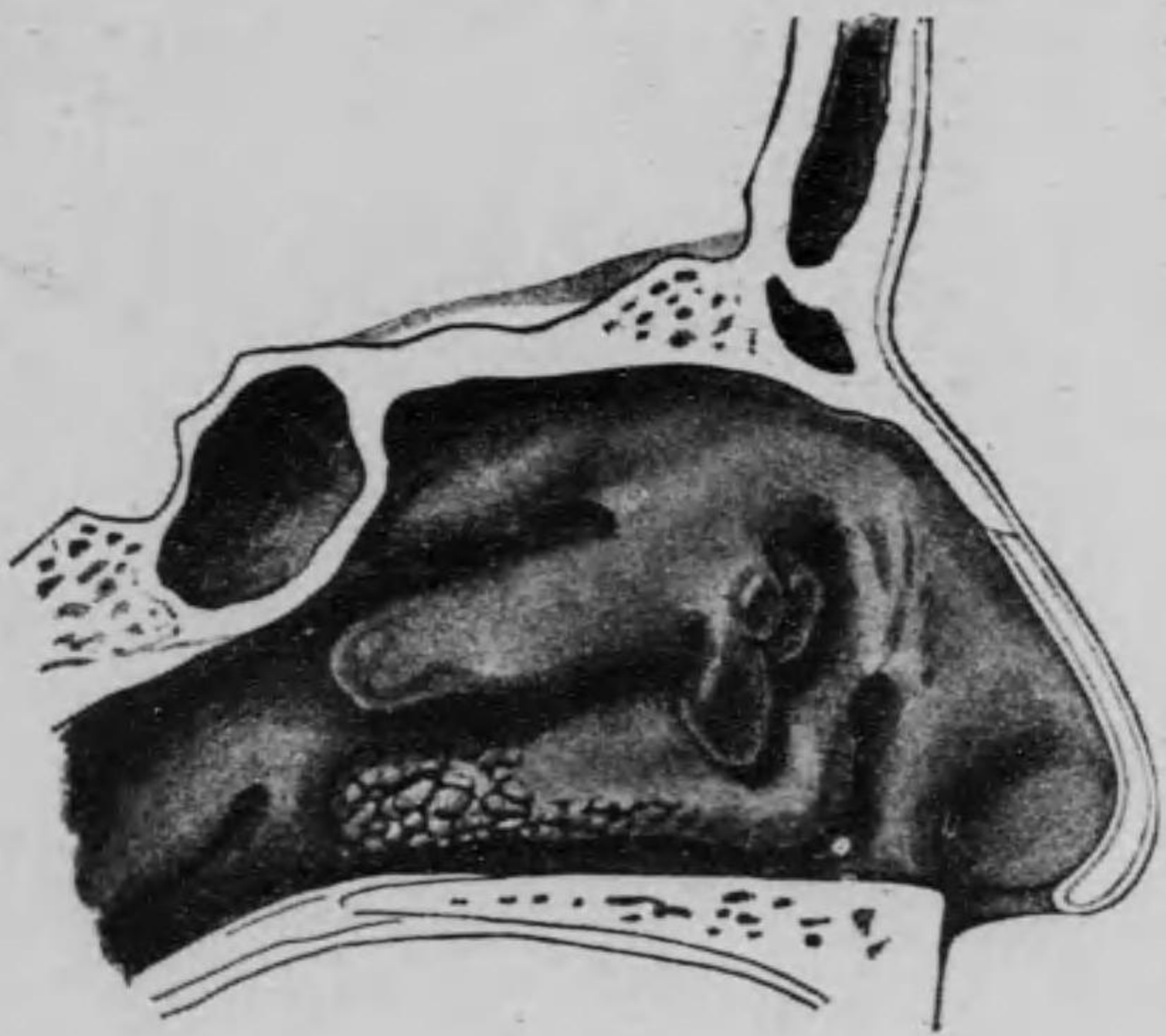
診断

神經性鼻炎、單純慢性加答兒性鼻炎及ビ鼻茸等ト鑑別ヲ要スル
「アツ然レドモ前後検査法ニヨリテ粘膜ノ腫脹及ビ色澤ヲ熟視シ探子
ヲ用ヒテ觸診ヲ行ヒ又古加乙涅アドレナリン塗布等ヲ施シテ檢スルト

キハ大抵誤ルコトナシ
豫後 一般ニ佳良ナ
リ然レモ種々ノ續發性
反射的神經症狀等ハ頗
ル頑固ナルモノアリ

療法 原因ヲ去ルベ
シ又體質不良ノモノニ
ハ全身療法ヲ行ヒ職業
ニヨリテハ之レヲ轉ズ
ルノ止ムヲ得ザルコト
アリ

局處療法ハ腫脹肥厚ノ



圖百第
中及・厚肥状吻乳端後介甲下・「ブー」ホ、端前介甲中
ス示ヲ大肥様ブー「ホ」端後介甲

無血的療法

清淨法

吹入藥

程度及ビ狀態ニヨリテ異ナリ

A 輕度ノ粘膜肥厚ニシテ古加乙涅アドレナリン溶液ヲ塗布シテ收縮
シ得ベキ程度ノモノニアリテハ左ノ如キ種々ノ療法ヲ行フ

- 1 鼻内清淨法 鼻内ニ分泌物ノ滯積ナカラシムルヲ要ス其目的ニ
ハ弱亞爾加里溶液ヲ以テ噴霧法又ハ洗鼻ヲ施スモノニシテ通常
重曹水或ハ食鹽水ヲ用フベシ
- 2 吹入藥 洗鼻又ハ噴霧等ノ清淨法ヲ行フタル後チ左ノ如キ防腐
性及ビ收斂性ノ藥品ヲ用フ

處方

- | | |
|---|---|
| 1 硝酸銀
陶土
右極細末トナシ鼻内ニ吹入ス
一〇、〇 | 3 沃度兒
硼酸末
右吹入料
六、〇 |
| 2 薄荷腦
硼酸那篤窩膜
乳糖
右研和吹入料
〇、一〇、二
五、〇
五、〇 | 4 單寧酸
沃度兒
硼酸
右研和吹入料
〇、一
五、〇
五、〇 |

塗布藥

3 塗布藥 藥液又ハ軟膏ノ塗布ヲ行フモ可ナリ
處方

- | | | | |
|------------------|--------------|--------------|---------|
| 1 硝蒼、亞鉛花
ワセリン | 各二、〇
三〇、〇 | 千倍「アドレナリン」 | 一、〇 |
| 右爲軟膏塗布 | | 3 古加乙涅溶液 | 二一五、% |
| 2 二%古加乙涅水 | 一〇、〇 | 4 「プロタルゴール液」 | 二一五、% |
| | | 5 「チオノール」液 | 二一五—一〇% |

按摩法

4 按摩法 細キ捲綿子ニ綿ヲ捲付シ1/5—1/2%メントール、パラフキ
ン溶液ヲ浸シ肥厚セル甲介粘膜炎ヲ頻回摩擦スルナリ

腐蝕法

5 腐蝕法 稍々頑固ナルモノニ向ツテハ硝酸銀、三、クロール醋酸、格
魯護酸等ノ實質腐蝕法ヲ行ヒ効ヲ奏スルコトアレドモ完全ノ治
癒ヲ求メ難シ

鬱血法

6 鬱血法 モ亦輕度ノモノニ用ヒテ効アリ殊ニ頭痛頭重等ニ著効
ヲ奏スルコトアリ

手術的療法

B 本症ハ通常粘膜炎増殖肥厚、甲介肥大、骨胞腫形成等ヲ來スモノナルガ
故ニ以上ノ如キ治療法ニヨリテ奏効セザルモノ多シ然ルトキハ手術

電氣燒灼法

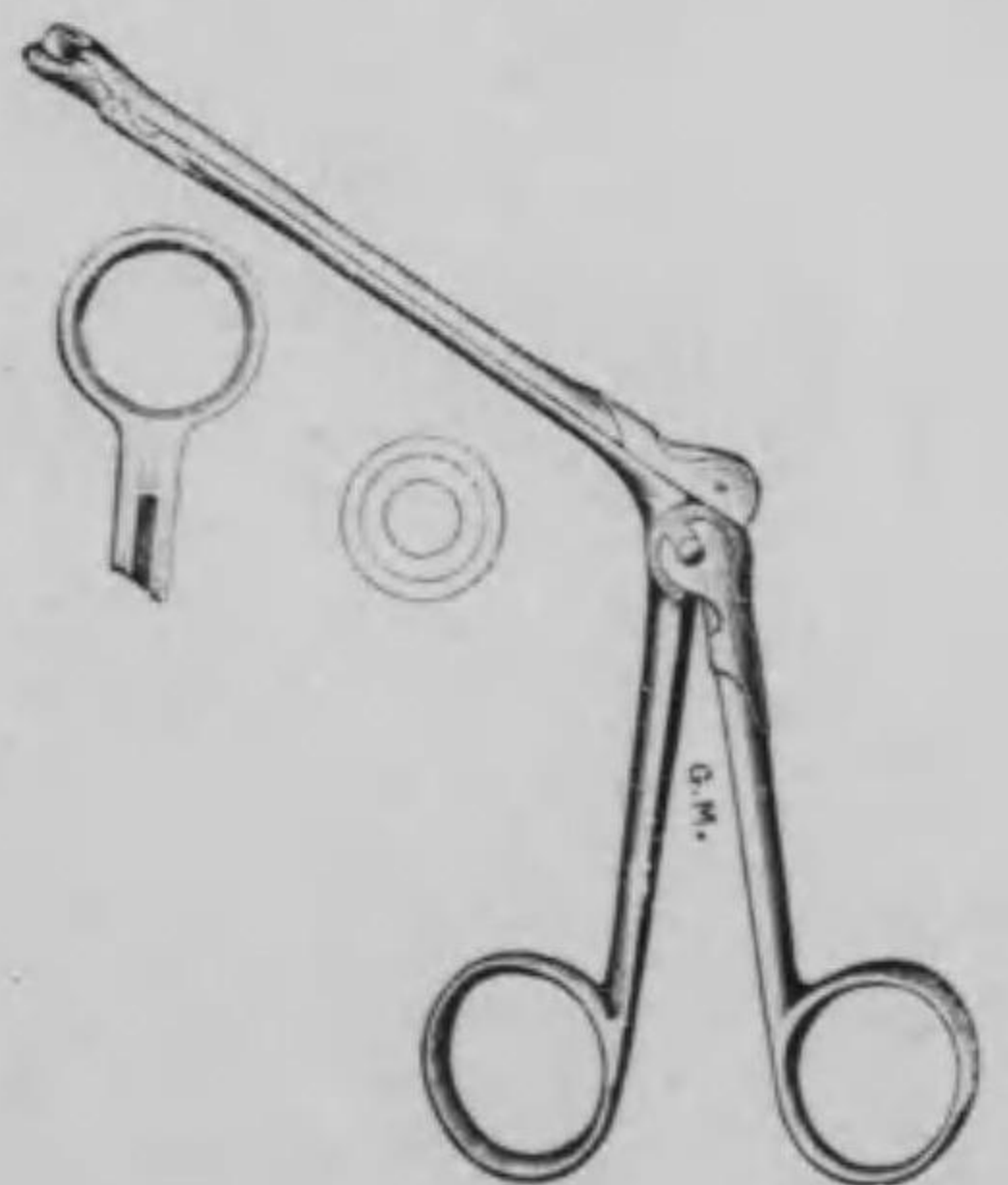
的療法ヲ行フベシ今手術的療法ヲ大別シテ電氣燒灼法、絞斷法、及ビ切
除法、鉗除法トス

1 電氣燒灼法 最モ完全ナル方法トシテ近來ニ至ル迄應用セラレ
タルモノニシテ一〇—二〇%古加乙涅ノ局處麻醉ヲ施シタル後チ
白金燒灼子ヲ以テ粘膜炎ヲ燒灼シ或ハ尖銳ナル白金針ヲ粘膜炎ニ刺
入シテ電氣ヲ通ジ内部ヨリ瘢痕收縮ヲ營マシムルモノナリ又粘膜炎
肥厚膨大セルモノハ電氣ヲ通ズルヲ得ベキ白金係蹄ヲ以テ其部ヲ

圖一百第
(曲彎下上)子鉗氏マトルハ



圖二百第
子鉗氏マトルハ



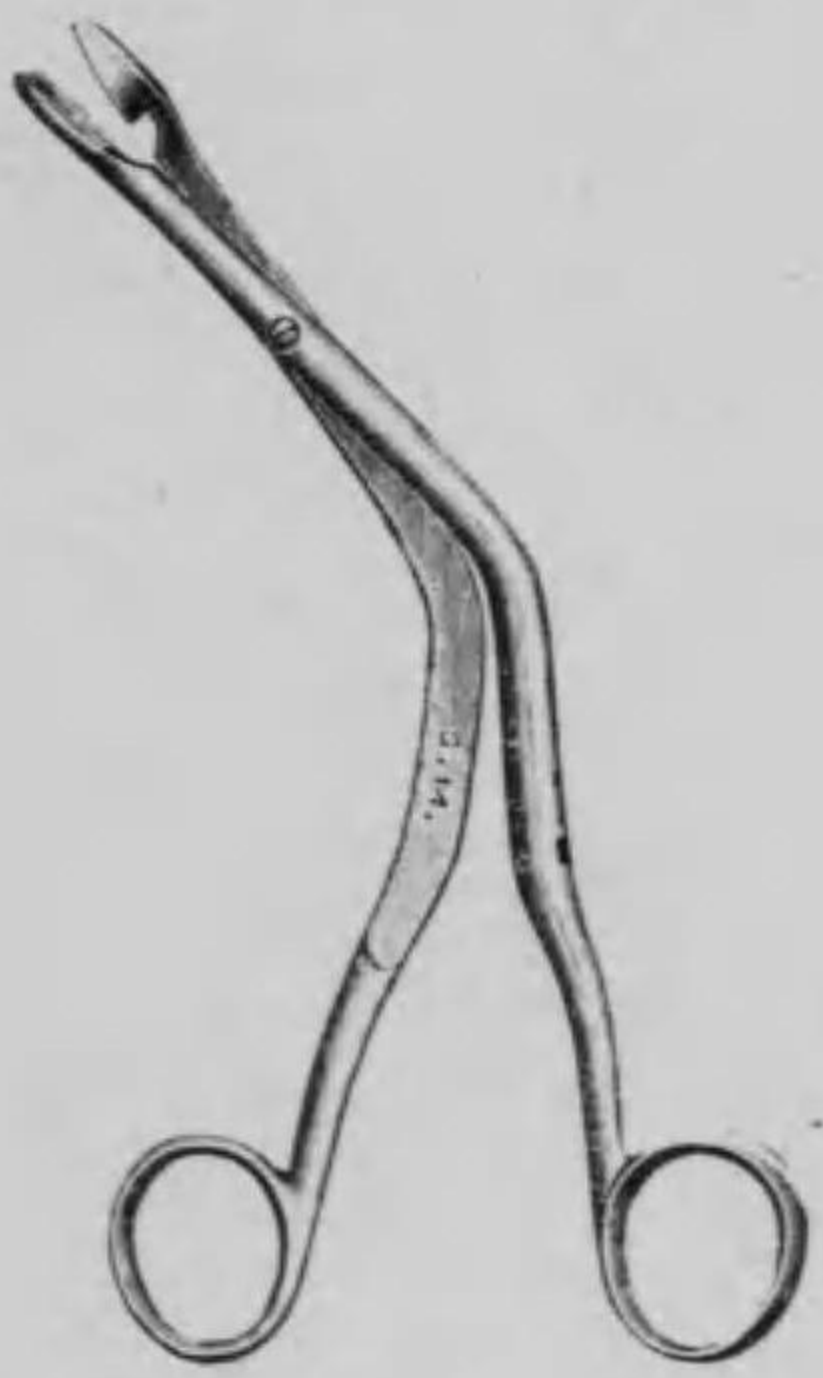
寒係蹄絞斷法

灼斷スルヲ佳トス然レドモ此等ノ方法ハ腫脹セル粘膜炎ヲ除クノ目的ニ副フト雖モ甲介肥大骨胞腫形成等ノ伴フモノニ向ツテハ存外効驗少ク徒ラニ患者ヲシテ數回ノ手術ニ苦シマシムルニ終ルヲ遺憾トス

2 寒係蹄絞斷法

クラウゼ氏係蹄ハルトマン氏係蹄等ヲ以テ甲介前後兩端ニ限局セル「ボリープ」様肥厚部ヲ絞斷スルモノナリ

フナズ氏鉗子



圖三百第

ベックマン氏甲介剪



圖四百第

剪介甲下氏ンマクツベ

鉗除法及剪除法

3 鉗除法及剪除法 燒灼法ニ於ケルガ如ク充分局處麻酔ヲ施シタル後チクリーグ氏グリユーンワルド氏ハルトマン氏等ノ鉗子其他種々ノ改造セラレタル鉗子ヲ以テ甲介ノ一部分ヲ粘膜炎ト共ニ鉗除シ或ハハイマン氏鉗又ハベックマン氏鉗ヲ以テ剪除スベシ若シ後端ニ於ケル茸腫狀肥厚部ヲ殘留シタルトキハ前項ニ述ベタル係蹄ヲ以テ絞斷スルヲ可トス

甲介切除術ヲ施スニ當リ最モ顧慮ヲ要スベキハ切除ノ程度如何ニアリ切除微小ニ過グレバ効ナク再三反復シテ行ハザルベカラズト雖モ尙ホ治療ヲ施スノ餘地ヲ存ス之ニ反シ過度ノ切除後ニ於ケル害ハ其比ニ非ズ吾人ハ屢々甲介全部ヲ失ヒ鼻内ハ勿論咽喉ニ至ル迄粘膜炎乾燥シ分泌物ハ結痂シ加之鼻腔内吸氣時疼痛ヲ感ズル等終生拭フベカラザル不快ヲ遺シテ絶ヘズ鼻ノ治療ヲ乞フ患者ニ遭遇スルコトアリ又甲介ノ附着部ヨリ切除スルトキハ骨管内ヲ走ル動脈ヲ共ニ切除シ甚シキ後出血ヲ來スコトアリ

後療法

燒灼後ハ局部ニ「ヨドール」「デルマトール」「硼酸」等ヲ撒布シ或ハ

單ニ殺菌綿花ヲ以テ輕ク鼻孔ヲ栓塞ス
 切除後ハ殺菌ガーゼ片ヲ以テ密ニ栓塞シ翌日ヨリ三日目ニ第一回交換
 ヲ行ヒ爾來毎日一回交換シ一週間位ニシテ止血シ開放スルヲ得ベシ又
 切除後開放シテ栓塞セザルコトアリ或ハ斷面ヲ燒灼シテ栓塞ニ代フル
 モノアリ栓塞法ハ稍ヤ完全ニ止血シ得ベシト雖モ交換時ニ疼痛及出血
 アリ開放療法ハ疼痛ナケレドモ安靜ヲ缺クトキハ出血シ易ク入院患者
 ニ非ザレバ施行シ難シ宜シク其場合ニ應ジテ撰擇應用スベシ

單純削瘦性鼻炎

單純削瘦性鼻炎 Rhinitis atrophicans simplex.

此症ノ本性ニ就テハ或ハ「オツエナ」ノ前階級ナリトシ或ハ「オツエナ」ノ治
 癒シテ惡臭ヲ放タザルモノトシ或ハ肥厚性鼻炎ノ續發症ナリトシ未ダ
 確固タル定説ナシサレバ單純性ト有臭性ノ間ニ劃然タル區別ヲナシ得
 ベキカ疑問ナルノミナラズ且ツ實際ニ於テ難事ナリ只茲ニ注目スベキ
 ハザイフェルト氏ノ所見ニシテ即チ單純削瘦性鼻炎ニ於テハ上皮變性ヲ
 來サズ假令之アルモ「オツエナ」ニ於ケルガ如ク廣大ナラズ且ツ其ノ領域

狹少ナリト云フコナリ

症候 鼻腔ハ異常ニ擴大シ分泌物ハ過多ナラズ屢々變性シ、白色帶黃
 色或ハ帶綠黃色ニシテ鼻底若シクハ咽頭天蓋ニ附着ス粘膜ハ著シク蒼
 白色ニシテ菲薄トナリ消息子ヲ觸ルレバ容易ニ出血ス而シテ患者ハ嗅
 覺障害、鼻内乾燥、頭痛等ヲ自覺ス

診斷 分泌物痲塊ヲ結バザルト惡臭ナキヲ以テ「オツエナ」ト鑑別スベ
 シ

療法 洗鼻、按摩、沃度、グリセリン塗布等ヲ行フベシ

有臭削瘦性鼻炎 又眞正臭鼻 Rhinitis

atrophicans fötida s. Ozaena genuina.

「オツエナ」トハ希臘語ノ「私ガ惡ク嗅グ」ナル意義ニシテ本症ハ其名ノ如ク
 惡臭鼻ヲ衝クガ如キ特殊ノ鼻疾患ナリ往時其症候ノ一部ナル惡臭「オツ
 エナ」ト云ヒル語ヲ以テ本症ノ名稱トナセシガ現今ニアリテハ之ヲ病理
 解剖學上ノ知見ニヨリテ有臭削瘦性鼻炎ト名ヅクルニ至レリ

オツエナ

單純削瘦性鼻炎—有臭削瘦性鼻炎

原因及本性

1 病竈説

往時本症ハ種々ノ潰瘍性或ハ壞疽性鼻病、副鼻腔滯膿症
其外或ル一定ノ病竈アリテ發スルモノナリト説キタルモノアリ
シガ近來ハ化學的試験、細菌的研究等ノ進歩ニ伴ヒ或ハ

2 細菌説

ヲ唱道スルモノアリ、レーウエンベルヒ氏ノコツコバチ
ルスオツエナ、Kocchothrix ozonae アーベル氏ノオツエナ菌 Bacillus
ozonae ihel. 説等之レナリ又

3 脂肪酸遊離説

ヲ唱フルクラウゼ氏等アリ、先天梅毒説 ゲルベル
氏 遺傳説、又ハ單純鼻加答兒、肥厚性鼻炎ニ基因スルヲ説ク續發説
アリテ諸説紛々タレドモ最モ信ヲ置カル、ハ一種ノ小有機體之
レガ原因ナルベシト云フ説ナリ但シ其小有機體ノ本體ニ至リテ
ハ未ダ確定スルニ至ラズ

病理解剖

粘膜ハ初メ高度ノ圓形細胞浸潤アリ末期ニハ纖維様結
締織ノ新生増殖スルニ伴ヒ腺及ビ血管ト共ニ消失ス上皮ハ多クハ重層
扁平又ハ磚狀上皮ニ變化シ最上層ハ角化ス骨質モ亦萎縮シ骨縁ニ於テ

ハ破骨細胞ト共ニ多數ノハウジツブ氏窩ヲ有シ造骨細胞ハ闕如シ若シク
ハ僅少トナリ腺細胞ハ脂肪變性ヲナス分泌物中ニハ無數ノ細菌ヲ含有
スレドモ偶然侵入シテ發育セルモノ多シ只アーベル氏 レーウエンベル
ヒ 氏菌ハ注意スベシ然レドモ是亦果シテ真正ノ原因菌ナリヤ否ヤハ未
ダ確實ナラズ

症候

鼻^〇腔^〇異^〇常^〇廣^〇潤^〇分^〇泌^〇物^〇、結^〇痂^〇及^〇一^〇種^〇名^〇狀^〇シ^〇難^〇キ^〇鼻^〇ヲ^〇衝^〇ク^〇ガ^〇如^〇キ

惡^〇臭^〇ハ本症ノ主徵候ニシテ鼻鏡ヲ挿入シ鼻腔内ヲ檢スルトキハ鼻壁ハ
粘稠膏膩様綠黄色或ハ汚穢灰白色、黑色、褐色等ノ痂皮又ハ殼皮或ハ團塊
ヲ以テ被ハル通常下組織ト密着シ或ハ相互間ニ粘液性、稀薄又ハ濃厚ノ
黄綠色膿層ヲ有シ厭フベキ惡臭アリ人之ヲ床蟲ヲ潰シタルガ如シト云
ヒ或ハ硫化水素ニ似タリトシ或ハ乾酪ノ腐敗シタルニ比シタリ輕度ノ
モノハ患者ニ接近シテ始メテ之レヲ知ルニ過ギザレドモ高度ノモノニ
アリテハ遠隔ノ場處ニ於テ之レヲ嗅グヲ得ベク永ク同室内ニ對談スル
トキハ嘔氣ヲ催起スルニ至ルモノアリ
痂皮ヲ去リテ鼻腔内部ヲ窺フトキハ粘膜面ハ潰瘍ヲ呈セザルモ全般ニ

自覺症候

削瘦シテ菲薄ナルコト雁皮紙ノ如ク處々出血ヲ見ルコトアリ、粘膜ト共ニ各甲介骨並ニ鼻中隔モ著シク削瘦シ粘膜ト骨質ノ接着強固ニシテ移動シ難シ下甲介ハ殊ニ甚シク侵サル、モノニシテ殆ンド痕跡ヲ止メザルコトアリ鼻腔ハ異常ニ廣潤ニシテ前鼻検査法ニヨリテ鼻腔ノ後壁、歐氏管咽頭口歐氏管隆起及ビ發音時ニハ軟口蓋ノ上下運動ヲ窺ヒ見ルヲ得ベシ且ツ上顎竇入口部、上甲介、蝴蝶竇ヲ望ムベシ

外鼻ハ往々扁平ニシテ廣潤、鼻孔稍ヤ仰上スルモノアリ

●自覺症候ハ結痂ニヨル鼻閉塞、痂皮ヲ除去スレバ閉塞去ル、嗅覺脫失、頭痛、頭部壓重、眩暈、咽頭乾燥感或ハ消化不良等ナリ

合併症 乾性咽頭及ビ喉頭炎、副鼻腔化膿症、中耳炎等ナリ

診斷 前述ノ主徵候ニ注意スレバ通常容易ナリ又アーベル氏菌ノ検査モ多少ノ價値アリ、其他鑑別上必要ナルハゴツトスタイン氏栓塞法ナリ眞正臭鼻ニシテ合併症ナキトキハ栓塞法ニ依テ結痂ヲ悉ク排除スレバ暫時其ノ惡臭ヲ脫失セシムルヲ得ベシト雖モ副鼻腔滲膿症、梅毒性、結核性等ノ骨壞疽アルトキハ惡臭依然タリ

近時ムツク氏ハ分泌液中「ロダン」ノ著シク缺如スルヲ診斷上有効ナリト云ヘリ

豫後 稍々不良ナリ削瘦、萎縮ハ治癒シ難シ只結痂、惡臭及ビ其他ノ自覺症ハ輕減シ若シクハ驅除シ得ベシ

療法 鼻洗滌法及ビゴツトスタイン氏栓塞ヲ或ハ併用シ或ハ一法ヲ應用ス鼻洗滌ヲ行フニ用フル藥液ハ極メテ多シ最モ稱用セラル、ハ次ノ如シ

- 一%炭酸那篤留誤水
- 一%重炭酸那篤留誤水
- 一%食鹽水
- 一%クロール加里水

- 三%硼酸水
- 〇、一%過錳酸加里水
- 〇、一%サリチル酸水

ゴツトスタイン氏栓塞法

第百五十五圖



ゴツトスタイン氏栓塞法 ハ螺旋狀小杆ニ指頭大ノ綿花ヲ纏絡シタルモノヲ鼻腔内ニ挿入シテ小杆ヲ除キ十五分間乃至三十分間ヲ經テ綿ヲ拔去ス然ルトキハ痂皮ハ綿花ニ附着シテ大部分除去セラルベク尙ホ殘存セル一部分ハ鑷

有臭削瘦性鼻炎

子又ハ鉗子ヲ以テ除クベシ
 以上ノ諸方法ニヨリテ痂皮ヲ去リ鼻腔内ヲ清淨ニナシタル後チ種々ノ
 藥物ヲ撒布シ又ハ塗布ス

處方

- | | | | | | |
|---|-------------|-------|---|-------------------|-------|
| 1 | ソッオヨドル亞鉛 | 一、〇 | 5 | 一〇—二〇%「メントール」阿列布油 | 五、〇 |
| | 古加乙混 | 〇、二 | 6 | 「イヒチオイル」 | 一〇〇、〇 |
| | 華攝林刺納林 | 各五、〇 | | 「クレオリン」 | 一〇〇、〇 |
| | 右爲軟膏「タンボン」用 | | 7 | 石炭酸 | 一、〇 |
| 2 | 甘朮 | 一、〇 | | 重曹 | 一、〇 |
| | 砂糖 | 一—二、〇 | | 偏里設林 | 二、〇 |
| | 右吹入料 | | | 硼砂 | 一、〇 |
| 3 | 沃度兒 | 一、〇 | | 水 | 二〇、〇 |
| | 硼酸 | 一、〇 | 8 | メントール | 〇、二五 |
| | ワセリン | 各五、〇 | | 硼酸 | 一、五 |
| | 右爲軟膏「タンボン」用 | | | 華攝林 | 三〇、〇 |
| 4 | ベリウバルサム | 各等分 | | 右鼻腔内「タンボン」用 | |
| | グリセリン | | | | |

近來ニ至リ四十五度乃至六十度ノ溶融點ヲ有スル固形「バラフィン」ノ粘

全身療法

膜下注射及ビ實扶埤里血清注射「デオニン」溶液塗布、鼻内按摩法、又ハ鬱血療法等ノ効アルヲ報告スルモノアリ試用スベキ方法ナランカ
 以上局處療法ノ外鐵、砒石沃度、規那等ヲ體質、病狀ニ應ジテ内服セシムルノ必要ナルハ言ヲ俟タズ

乾性前鼻炎

乾性前鼻炎

Rhinitis sicca anterior.

ジーベンマン氏ノ命名シタル鼻中隔前下部ニ於ケル限局性疾患ナリ

原因 理化學的刺戟ニ因ル、即チ塵埃附着シ或ハ前庭部ニ濕疹等アルトキハ緊張及ビ癢痒ノ感ヲ有シ患者ハ無意識ニ不絶指頭ヲ挿入シテ此部ヲ刺戟スルノ習癖ヲ來シ一層増悪セシムルガ爲メナリ又個人ノ體質ニモ關係アルガ如シ

病理解剖

圓柱上皮ハ重層扁平上皮細胞ニ變ジ時トシテハ角質變性ヲナス、粘膜ノ基質ハ圓形細胞浸潤ヲ來シ往々色素ニ富ミ或ハ硝子様變性ヲナセル細胞ヲ見ル

症候

鼻中隔前部ノ粘膜面ニ損傷アリテ黄色或ハ青黄色ノ結痂ヲ附

着シ之ヲ剝離スレバ少シク出血ス此部ハ漸次菲薄トナリ遂ニ鼻中隔軟骨ノ萎縮又ハ穿孔ヲ招來スルニ至ル

患者ハ其局部ニ於テ乾燥、癢痒ノ感ヲ有シ指頭ヲ以テ搔爬スルガ爲メニ出血シ或ハ指頭不潔ニシテ丹毒、梅毒、結核ノ感染及ビ化膿ノ媒介トナル

豫後 概シテ良ナレドモ再發シ易シ、而シテ古キモノハ不良ナリ

療法 刺戟ヲ避ケ緩和ノ軟膏例之バ亞鉛華軟膏、亞鉛華蒼鉛軟膏、ウキルソン氏軟膏等(耳翼及鼻前庭濕疹ノ條下ヲ參照スベシ)ヲ塗布ス予ハ初期ノモノニハ二—五%硝酸銀水ヲ塗布シテ効アルヲ認ム

實扶埤里性鼻炎

實扶埤里性鼻炎 Rhinitis diphtherica.

特發スルコト稀ニ多クハ咽頭及ビ喉頭實扶的里ヨリ續發スルモノナリ然レドモ大人ニ於テ鼻粘膜損傷、潰瘍等ノ存在スルトキハ特發スルコトナキニ非ズ又小兒ニ於テハ鼻感冒ノ状態ヲ以テ數日ヲ經過シ後チ咽頭及喉頭ニ變化ヲ起スニ至ツテ始メテ異キノ鼻症狀ハ實扶的里ノ特發シタルモノナリシヲ知ルコトアリ

症候

輕度ノモノハ發熱ナク僅ニ鼻加答兒ヲ起シ次デ偽膜ヲ生ジ爲メニ閉塞ヲ來ス稍ヤ劇烈ナルモノハ惡寒發熱、倦怠、頭痛等ノ全身症狀ヲ起シ且ツ鼻閉塞甚シク鼻膿漏及ビ出血アリ鼻粘膜ハ浮腫、腫脹ヲ呈シ汚穢灰白色ノ偽膜ヲ以テ被ハル細菌検査上リヨフレル氏桿菌ヲ認ム

豫後

早期ニ診定シ適當ノ治療ヲ加フレバ大抵佳良ナレドモ初生兒又ハ小兒ニ特發シ初メ單純ノ感冒ト診定セラレ鼻咽腔、咽喉ニ蔓延スルニ及ンデ始メテ發見セラレタルモノハ毒素ノ蔓延ニ因リテ心臟麻痺ヲ招來シ易ク豫後往々不良ナリ

療法

血清療法ノ外、實艾答利斯、カンフル、赤酒等ノ如キ興奮劑ヲ與ヘ局處ハ鼻腔内ヲ清拭シ種々ノ防腐殺菌的藥物ヲ粉末トシテ吹入シ或ハ軟膏トシテ塗布シ兼テ古加乙涅、アドレナリン等ノ噴霧及塗布ヲ行ヒ粘膜腫脹ノ消退ヲ圖ルベシ

處方

1 沃度兒
ワゼリン

100.0
50.0

2 右塗布料
石炭酸

1.0

實扶埤里性鼻炎

纖維性鼻炎

コカイン
蒸溜水

二〇〇
|
一〇〇〇

右噴霧又は塗布料

纖維性鼻炎

Rhinitis fibrinosa s. Rh.

Pseudomembranacea s. Rh. crouposa.

本症ハ鼻粘膜ニ厚キ白色若シクハ黄白色ノ偽膜ヲ發生スルモノニシテ一見實扶的里ニ似タリ

原因 鼻粘膜損傷手術殊ニ電氣燒灼後人工的纖維性鼻炎ニ來ルコトアリテ「ストレプトコック」等ヲ檢出スベシ又原發性ニハ肺炎球菌假性實扶的里菌及種々ノ醗膿「コック」ニヨリテ發起スルモノナリ又初生兒纖維性鼻炎ト稱スルモノアリテ哺乳期ノ六―八週ノ間ニ來ル通常母ノ產褥時ニ於ケル傳染ニ歸スベキモノニシテ多クハ「ストレプトコック」ヲ發見ス然レドモ亦本症ハ實扶的里ニ外ナラズト説クバギンスキー、スタンム等ノ諸氏アリ

症候

初メ輕熱アリ、急性鼻感冒ノ状態ヲ呈シ同時ニ咽頭炎ヲ伴フコ

ト多シ哺乳兒又ハ幼少ノモノハ三十九度内外ノ熱ヲ發スルコトアリ且ツ鼻閉塞ノ爲メ呼吸不利、營養障害ヲ誘發シ危險ニ陥ルコトアリ、鼻内ハ限局性又ハ瀰蔓性黄白色ノ偽膜アリテ潮紅セル粘膜ニ附着シ之ヲ剝離スレバ出血シ且ツ容易ニ再生ス

診斷

リヨフレル氏菌ノ有無及ビ偽膜ノ喉頭ニ蔓延スルコトノ有無竝ニ經過ノ遲速ニヨリテ實扶的里ト判別スベシ

豫後

通常佳良、初生兒ニハ往々危險ナルコトアリ

療法

實扶的里性鼻炎ニ略々同ジ

乾酪性鼻炎

乾酪性鼻炎

Rhinitis caseosa.

稀ニ來ル鼻粘膜ノ炎症ニシテ固有ノ形態ヲ有ス即チ上皮ノ剝離變性ニヨリテ乾酪様ノ劇シキ惡臭ヲ有スル分泌物ヲ排泄ス屢々副鼻腔ノ化膿、ホリープ、骨疽、骨瘍等ニヨリテ發スルモノナリ

蜂窠纖維性鼻炎

Rhinitis phlegmonosa.

蜂窩纖維性鼻炎

纖維性鼻炎―乾酪性鼻炎―蜂窠纖維性鼻炎

外傷、異物、急性傳染病、潰瘍或ハ不明ノ原因ニヨリテ發ス鼻粘膜腫脹劇痛アリ鼻閉塞著シク往々膿瘍ヲ形成ス膿瘍ハ好ンデ鼻中隔前端ノ軟骨ト軟骨膜ノ間ニ生ジ表面鮮紅色ニシテ緊張及ビ波動アリ小切開ヲ加フレバ容易ニ治癒ス

丹毒性鼻炎 Rhinitis corysipelatoza.

鼻入口ノ輝裂ヨリ感染シ或ハ鼻内手術ニ因リテ來ルコトアリ鼻粘膜高度ノ腫脹潮紅鼻閉塞分泌亢盛等ヲ來ス

第二章 傳染性新生物 Infectiöse Neubildungen.

鼻梅毒 Syphilis cavi nasi.

鼻ハ呼吸器中梅毒ニ罹ルコト最モ多シ而シテ第一期ニ來ルハ稀ニシテ多クハ續發性トシテ現ハル、モノナリ

第一期梅毒 稀レニハ手指、手巾及ビ器械ノ媒介ニヨリテ生ジ又生殖器ト直接接觸ニヨリテ發スルコトアリ

丹毒性鼻炎

鼻梅毒

一期梅毒

外鼻ノ硬性下疳ハ多クハ鼻入口部ニ發シ淺表性潰瘍ヲ造リ邊緣腫起硬結シ底面平坦ナルアリ凸隆スルモノアリ或ハ痂皮ヲ以テ被ハル粘膜硬性下疳ハ殊ニ鼻中隔前端ニ來リ主トシテ扁平菌狀贅生ヲ呈シ動モスレバ悪性新生物ト誤診セラル、コトアリ其色赤色ニシテ軟骨様硬度ヲ有シ膿ヲ以テ被ハレ出血シ易シ通常頸縁ニ於ケル淋巴腺腫脹シ無痛性ナリ患者ハ鼻閉塞并ニ頭部及下眼窩部ノ放散性疼痛ヲ訴フ後鼻下疳ハ銳緣ノ潰瘍ヲ呈シ黄色豚脂様苔ヲ以テ被ハレ出血シ易ク嚙下痛及頭痛ヲ訴フ

二期梅毒

第二期梅毒

主トシテ皮膚及ビ粘膜ヲ犯シ軟骨及骨ニ來ルハ稀レナリ若シ來ルコトアルモ間接性ニシテ皮膚及粘膜ノ病變部ヨリ續發ス鼻粘膜二期梅毒ハ紅斑 Erythem 及ビ丘疹 Papel ノ二種ノ形態ヲ以テ現ハル

紅斑

1 紅斑 Erythem

暗紅色圓形斑或ハ境界判然タル廣キ潮紅ヲ呈シ單純鼻加答兒ト鑑別容易ナラズ只梅毒性ノモノハ多クハ前端ニ限局シ劇烈ナル症狀ナキモ持續スルコト永ク且ツ分泌物ノ前者ヨリ稍ヤ少ナキ等ヲ以テ察スベシ

鼻梅毒

丘疹

2 丘疹 Papul 多クハ外鼻孔ニ時トシテハ鼻翼及前庭部ニ蔓延セル帽針頭大乃至扁豆大ノ隆起セル斑點ヲ生ジ赤褐色ヲ呈シ又屢々鼻孔ニ裂創ヲ生ジ結痂ヲ以テ被ハル剥離スルトキハ淺キ潰瘍ヲ生ジ出血アリ粘膜ニ來ルハ稀レニシテ鼻底及中隔前端ニ好發シ往々鼻腔ヲ狹隘ナラシメ時トシテ表在性潰瘍ヲ生ズ

三期梅毒

第三期梅毒

年稀レニハ八年乃至十四年ニ發來ス

本症ノ病的變化ハ軟部ノ梅毒性浸潤及ビ鼻骨格ノ破壊ナリ

梅毒浸潤

赤褐色ニシテ早晚破壊シテ潰瘍ヲ形成ス
梅毒性浸潤 或ハ限局性腫瘍狀ニ膨起シ(ゴム腫)或ハ潮濕性ニ發ス

鼻骨格梅毒

鼻骨格梅毒 ハ原發性及續發性ノ二種トス

1

原發性鼻骨格梅毒

尙二種ニ分ツ即チ甲ハ先ヅ骨ヲ侵シ續テ骨膜ニ蔓延スルモノニシテ乙ハ先ヅ骨膜ヲ侵シ續テ骨ニ波及スルモノナリ

2

續發性鼻骨格梅毒

ハ皮膚或ハ粘膜ノ浸潤ヲ來シ遂ニ破壊シテ

鞍鼻

骨格ニ及ブモノニシテ通常壞疽及腐骨ニ終ル

發生部ハ骨性鼻中隔次デ鼻底及ビ鼻天蓋ハ好發地點トス鼻腔ヲ檢スルニ粘膜ハ強度ノ腫起潮紅ヲ有シ稀薄膿樣或ハ血液膿樣(組織破片ヲ混ズ)ノ惡臭性分泌物ヲ以テ充タサル之ヲ清拭スルニ黃色豚脂樣底面峻嶮ナル硬固ノ邊縁ヲ有セル潰瘍ヲ認ムベク探子ヲ以テ深部ニ粗糙ノ骨面ヲ觸ルベシ病勢進行シタルモノハ鼻骨崩壞シ鼻中隔缺損シテ外鼻ノ畸形所謂鞍鼻ヲ呈ス又鼻底ノ疾患ハ口蓋ノ闕損ヲ來シ開放性鼻聲トナル

初生兒遺傳梅毒

初生兒遺傳梅毒

ハ子宮内ニ於テ或ハ分娩後四週内外ニシテ發スルモノニシテ多クハ下甲介ニ來リ鼻咽腔ハ通常之ニ與カラザルモノトス初期ハ粘膜ノ充血腫脹ヲ來シ二三週ノ後チ分泌期ニ移行シ多量ノ膿汁ヲ洩シ血液ヲ混ズルコトアリ續テ潰瘍ヲ形成ス故ニ初生兒或ハ生後二三週後ノ乳兒ニ在リテ鼻腔内或ハ鼻孔ニ血性痂皮ヲ附着スルトキハ遺傳梅毒ヲ疑フベキモノニシテ宜シクホツホジングル氏ノ三症候鼻炎蠟樣蒼白脾腫ニ就テ檢索ヲ企ツベキモノトス

經過

適當ノ治療ヲ加ヘザレバ漸進シテ停止スル處ヲ知ラズ初期ニ

加療スレバ病機ヲ停止シ又全癒セシムルヲ得ベシ
診断 硬性下疳ハ悪性腫瘍ト誤診シ易シ又三期症ノ實地上鑑別ヲ要
スベキハ結核ナリ

結核トノ鑑別

鼻梅毒

- 一、患部ノ周圍粘膜炎高度ノ潮紅腫脹ヲ呈ス
- 二、好發部ハ骨部ナリ
- 三、梅毒性骨壞疽ハ惡臭著シ
- 四、頭痛(夜間増悪)及ビ三叉神經痛ヲ有ス
- 五、沃加内服ニヨリテ症状減退ス

鼻結核

- 一、然ラズ却テ貧血ヲ呈スルコト多シ
- 二、軟骨部ナリ
- 三、臭氣少ナシ
- 四、鉄如ス
- 五、奏効セズ

其他組織検査及ビ分泌物中ノ結核菌検査ヲ施シ或ハワツセルマン氏反應ヲ檢シ加フルニ他部ノ症状ヲ觀察スルトキハ通常誤ルコト少ナシ

療法 全身驅梅毒療法ト局部ノ處置ヲ行フベシ從來全身驅梅毒法トシテ使用セラル、藥劑ノ種類及ビ其ノ使用ハ極メテ多種多様ナレドモ要スルニ水銀劑ト沃度劑ノ二ニシテ悉ク此二種ノ製劑ニ過ギザリシガ近時エールリヒ秦ノ二氏ニヨリテ完成セラレタル「サルゾルサン」(六百六號)ハ治績較著ニシテ世ニ賞讃セラル、ニ至レリ

第一期梅毒療法 第一期ニ於テハ局處療法ニテ足ルモノニシテ瘡

面ヲ清潔ニシテ屢々甘汞ヲ撒布スベシ

第二期梅毒療法 第一期ニ於ケルガ如ク局處ヲ清潔ニシ潰瘍アル

トキハ甘汞ヲ撒布スベク全身驅梅毒療法ハ此期ニ於テハ水銀劑及ビ「サルゾルサン」ヲ賞用スベシ

水銀劑

一、水銀劑 ハ塗擦、内服及ビ注射ノ諸方法アリ内服ニハ止ムヲ得ザ

ル場合ニ丸藥トシテ用ウルコトアレドモ稀ナリ

イ 灰白軟膏塗擦法 ハ從來最モ賞用セラレタル方法ニシテ一回二〇乃至五〇ヲ二十分乃至三十分間皮膚ノ柔カキ毛髮ナキ部分ヲ撰ミ日々交ル々々ニ行フベシ

ロ 水銀劑注射法 ハ塗擦法ニ比スレバ簡單ニシテ且ツ奏効確實ナルガ故ニ近時ハ多ク此レヲ使用スルニ至レリ充分消毒ヲナシテブラワツツ注射器ヲ以テ患者ノ臀部筋肉内ニ深く注射スベシ

昇汞

〇・一

食鹽

一・〇

蒸餾水 一〇〇

右注射用

隔日ニ一筒ツ、約三十回乃至四十回ヲ持續ス注射後ハ人ニヨリテ往々疼痛ノ劇シキコトアリテ爲メニ醫師患者共ニ注射療法ヲ躊躇スルコトアルヲ缺點トス然レドモ通常注射ノ回数ヲ重スルニ從ヒ疼痛輕減シ或ハ全クナキニ至ルコト多シ、又次ノ處方ヲ用フルトキハ殆ンド或ハ全ク無痛ニシテ而モ其奏効他ノ汞劑ニ讓ラズ

第一液 二%青酸々化汞(二%硼酸溶液)

第二液 一%アコイン溶液(二%硼酸溶液)

右使用ニ臨ミ各半筒ツ、ヲ混ジ臂筋内ニ注射ス

其他可溶性ノ撒里矢兒酸砒酸水銀ヲ用ユ、注射後疼痛ナク又砒素ノ作用ヲ有ス

又不溶解性水銀劑トシテ稱用セラル、ハ左ノ如シ

撒里矢兒酸水銀 一〇

水性バラフキン 一〇〇

右混和シ注射料

水銀劑使用ニ當リテハ其内服ナルト塗擦或ハ注射法ナルトヲ論ゼズ共ニ汞毒性口内炎ヲ起シ易キガ故ニ常ニ五%鹽剝水ヲ以テ合液シ口内ノ清潔ヲ怠ルベカラズ

二)サルヅルサン(六六六號)注射法 中性或ハ亞爾加里性溶液トナ

シテ皮下、筋肉内又ハ靜脈内ニ注射ス(皮下若クハ筋肉内ニ注射スルトキハ種々ノ不快ナル局所副作用ヲ貽スガ故ニ輒近毎ニ靜脈内注入ヲ施行ス又近來ハ、ネオサルヅルサンヲ用ユルニ至レリ)用量ハ一回〇、四乃至〇、六ヲ適當トス

第三期梅毒療法 沃度加里ハ主要ノ藥品ニシテ一日〇、五ヨリ始メ

漸次増量シテ五―六、〇ニ至ル、沃度加里内服ヲ持續スルトキハ消化障害ヲ來シ易シ、又沃度那篤留謨ヲ代用ス

「ヨヂピン」ハ沃度ト胡麻油ノ化合物ニシテ沃度劑内服ニ堪ヘザル患者ニ注射スルヲ得ベシ

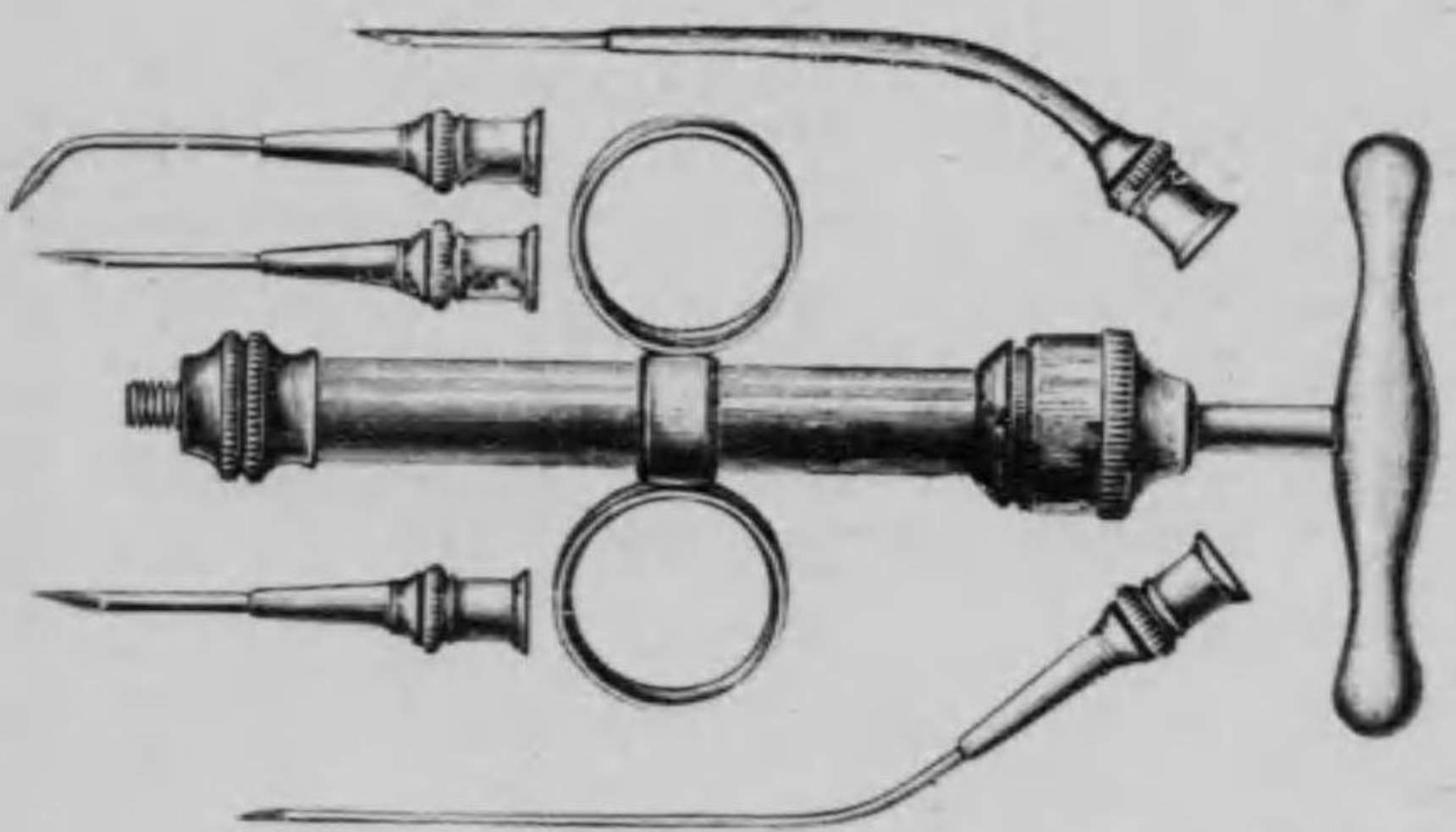
第三期ニ於テモ亦「ザルヅルサン」注射ハ著効アリ

沃度加里

パラフキン
注射法

局部ニ向ツテハ可成の清潔ナラシメ沃度兒撒布沃度液(ルゴール液)塗布
等ヲ施シ、癒着、缺損、鞍鼻等ヲ遺シタルトキハ成形術ヲ施スベシ
パラフキン注射法 「パラフキン」ハ流動若クハ固形ノ兩種トモニ
用ユルヲ得レドモ固形ノモノハ血栓、轉
移等ヲ起サズ且ツ反應現象ノ輕度ナル
等ノ利アルヲ以テ現今ハ殆ンド毎ニ固
形「パラフキン」ヲ注射ス
術式左ノ如シ

圖 六 百 第
器 射 注 キ フ ラ パ



1 刺針穿通部位 ハ鼻尖端若クハ鼻
根ヨリス

2 消毒及器械 法ノ如ク局部及ビ術
者ノ消毒ヲ行ヒ、器械ハ煮沸シテ乾
燥セシム殊ニ注射筒内ニ水滴ノ殘
留セザル様注意スベシ
「パラフキン」ハ溶解點攝氏五十度内

外ノモノヲ用ヒ一旦溶解セシメタル液ヲ注射器ノ圓筒内ニ容ル

3 局所麻酔 鼻根ニ於テ一%古加乙涅液〇、二ヲ皮下ニ注入シ、約五六
分時ヲ經テ豫備針ヲ筋膜下ニ刺入シ鼻尖ニ達セシム、次デ針ヲ拔出
シ其刺孔ヨリ剝離子ヲ挿入シテ適宜ニ擴張セシメ、パラフキンノ充
填ニ適合スル空洞ヲ造ル

4 注射法 注射針ヲ穿刺孔ヨリ挿入シ先ヅ鼻尖ニ達シ注射器ノ螺旋
ヲ右方ニ二三回廻旋シテ「パラフキン」ヲ少シツ、搾出シ後チ針ヲ僅
カニ後退セシメ再ビ搾出シ左示指ノ二指ヲ以テ適宜ニ鼻形ヲ矯整
シツ、漸々針ヲ後退セシム

5 後處置 注射針ヲ拔去スルトキハ創口ヨリ少シク出血ス直チニ消
毒綿紗ヲ以テ拭ヒ僅カニ壓迫スレバ止血ス次テ、沃度防護「コロヂウ
ム」ヲ滴下シテ創口ヲ固封ス、

鼻結核 Tuberculosis nasi.

鼻結核ハ鼻梅毒ニ比スレバ少ナシ然レドモ往時世人ノ信ジタルガ如ク

鼻結核

鼻結核

他覺症候

自覺症候

稀ナラズ而シテ原發性ノモノハ少ナク多クハ續發性ナリ

症候 腫瘍狀、結核腫及ビ潰瘍狀ノ二種ニ區別ス結核腫ハ中隔前端軟骨部ニ生ズルコト多ク顆粒狀若シクハ乳嘴狀ノ結節トナリテ現ハレ出血シ易ク膿又ハ結痂ヲ以テ被ハル潰瘍性結核ハ多クハ中隔軟骨部下甲介前端、鼻底等ニ生ジ其表面ハ弛緩性肉芽ヲ有シ周圍ニ浸潤アリ粘液膿性ノ分泌物附着ス又潰瘍進行シテ軟骨部ハ穿孔スルコトアリ

自覺症候ハ結核腫ノ初期ハ單純ノ鼻感冒ト略ボ同一ニシテ著シク苦痛ヲ感ゼズ若シ結核腫増大スレバ鼻閉塞ヲ來ス又潰瘍ヲ生ジタルトキハ鼻内分泌亢盛シ膿様又ハ混血性ニシテ臭氣アレドモ劇シカラズ疼痛ハ少ナシ

診斷 容易ナラズ殊ニ梅毒ト誤リ易シ前項梅毒ノ條ニ於ケル診斷ヲ參照シ且ツ驅梅毒療法ヲ試ミ組織及ビ分泌物等ヲ精密ニ検査シテ鑑別スベシ

豫後 原發性ハ稍佳良、續發性ハ不良ナリ

療法 早期切除又ハ搔爬ヲ行ヒ濃厚ノ乳酸塗布又ハ電氣燒灼ヲ行フ

鼻硬化腫

鼻硬化腫 Rhinoscleroma.

稀有ノ疾病ニシテ歐洲ニ於ケル地方病ナリ殊ニ埃太利ハ最モ多ク伊太利、魯西亞之ニ次ギ其他ノ諸邦ニモ亦見ルコトアリ、本邦ニテハ未ダ報告ヲ聞カズ

原因及病理 フリッシユ氏ノ發見シタル鼻硬化腫菌ニヨリテ起ル此

菌ハ短大ニシテ殆ンド球菌ニ近ク且ツ被膜ヲ有シフリードレンデル氏肺炎球菌ニ類似ノ形態ヲ有ス組織検査上肉芽組織ハ小圓形細胞ノ浸潤ト菌ヲ有スルミク、リツ氏細胞ヨリ成ルヲ見ル

症候 結節性或ハ廣汎性ノモノアリテ鼻咽腔殊ニ後鼻孔緣、軟口蓋背面ニ起始スルコト多ク漸次増進シテ咽喉ニ達スルモノナリ粘膜ハ初メ鮮紅色柔軟ニシテ恰モ肉芽腫ノ如ク表面ハ粘稠膿様ノ分泌物ヲ以テ被ハレ後チ蒼白或ハ暗黒硬固トナリ末期ニ至レバ萎縮シテ癩痕ヲ生ズ固有鼻腔ニ於ケルハ前者ヨリ少ナク鼻腔前端殊ニ下甲介前端或ハ鼻底ニ發ス其萎縮期ニ達シタルトキハ鼻底ニ固有ノ變化ヲ起スモノニシテ即

他覺症候

鼻硬化腫

自覺症候

チ鼻底著シク扛起シ甲介ト鼻中隔ノ間ニ膨起ス鼻硬化腫ノ自覺症ハ著シカラズ疼痛ハ自發スルコトナク只壓痛アリ硬結増大スルトキ殊ニ咽喉部ニ蔓延スレバ呼吸及聲音障害ヲ起ス

診斷 梅毒、結核、癩、狼瘡ト類似スルヲ以テ判別ヲ要ス本症ハ軟骨様硬度ヲ有シ破壊セズシテ癩痕ヲ結ビ經過緩慢ナリ

療法 對症療法ニ過ギズ例ヘバ結節摘出、電氣燒灼法等ヲ用ヒ呼吸障害ヲ除クベシ近來レントゲン光線及ビラヂウム應用ニヨリテ効驗アリト云フモノアリ

鼻狼瘡

鼻狼瘡 *Lupus vulgaris nasi.*

發生地

鼻粘膜ノ原發狼瘡ハ稀ニシテ多クハ前庭或ハ顔面ノ狼瘡ニ併發スルモノナリ發生地ハ鼻中隔ノ前下部粘膜ニ粟粒大ノ結節ヲ生ジ或ハ稀レニ豌豆大ノ結節狀腫瘍ヲ形成ス柔軟ニシテ觸ル、トキハ容易ニ出血シ潰瘍トナリ惡臭性膿樣分泌物ヲ以テ被ハル又鼻翼ヲ犯スモノニシテ爲メニ鼻翼ハ肥厚シテ硬固トナリ赤色或ハ赤褐色ヲ呈シ結節ヲ形成シ後チ

鼻癩

鼻癩 *Lepra cavi nasi.*

破壊シテ實質缺損ヲ來ス

療法 フキンゼン氏光線療法ヲ最良トス其他局處療法ハ結核ニ同ジ

鼻粘膜ハ癩ノ好發部ニシテ殊ニ鼻中隔ノ侵襲セラル、コト多シ粘膜ハ初メ先ヅ瀰蔓性捏粉樣膨隆ヲ生ジテ蒼白色ヲ呈シ次第結節ヲ造リ後チ破壊シテ潰瘍ヲ形成ス潰瘍ハ漸次深部ヲ侵蝕シ屢々鼻中隔穿孔、外鼻ノ變形ヲ來スモノナリ

馬鼻疽

馬鼻疽 *Potz.*

馬鼻疽菌ニ因リテ起ル馬ノ觸接傳染病ニシテ人ニ來ルハ稀ナリ鼻粘膜ニ結節或ハ膿疱ヲ形成シ速ニ潰瘍ヲ生ズ鼻汁分泌強盛トナリ漸次濃厚膿樣ニ變ジ臭氣ヲ帶ブ又鼻閉塞著シク頭痛、熱等ノ全身症狀アリ慢性症ハ經過極メテ緩ニシテ認ムベキ症候ヲ呈セズ僅ニ鼻粘膜腫脹發赤シ粘稠ノ液ヲ洩スニ過ギザルコトアリ

第三章 鼻腔腫瘍 Geschwülste in der Nasenhöhle.

A 良性腫瘍 Gutartige Geschwülste.

粘液茸 Schleimpolypen.

(浮腫性纖維腫 Eibroma oedematosum.)

良性腫瘍
粘液茸

世俗之ヲ鼻茸ト稱シ鼻腔内良性新生物中最モ多キヲ占ムルモノトス從來之ヲ特殊ノ腫瘍トナセシガ近來ニ至リテハ之ヲ炎性刺戟産物ナリト説キ腫瘍説ヲ駁スルモノ多シ

原因 慢性鼻炎、副鼻腔慢性症、骨瘍、異物等ハ本病ノ原因トナル就中副鼻腔滯膿症ハ多クハ鼻茸ト密接ノ關係アルモノニシテ近時鼻茸ハ滯膿症ノ續發ナリトシ又滯膿症ノ原因ナリトスルノ二説アリテ何レカ因ニシテ何レカ果ナルヤ疑ハシトサヘ説クモノアリト雖ドモ予ハ其ノ甲説ニ左担スルモノナリ而シテ本症ハ中年ノ男性ニ多ク十五歳以下ノ幼年者ニハ少ナシ

好發部位

病理解剖

好發部位ハ中鼻道、就中副鼻腔、開口部、ノ近隣篩骨胞、半月溝、竝ニ中甲介縁等ニシテ稀ニ上鼻道、鼻中隔、下甲介等ヨリモ發ス時トシ

組織的構造

テ副鼻腔ニ發生セルモノ、鼻腔内ニ現ハル、コアリ多クハ簇生シ單生スルハ稀ナリ其ノ肉眼的處見ハ通常球狀又ハ有莖楕圓又ハ卵圓形ニシテ表面滑澤、柔軟、浮腫狀、沒食子様ニシテ透明灰白又ハ蒼白色ヲ呈シ新鮮ナルモノハ煙草ノ煙色ニ類ス但シ外氣ニ觸ル、部位ハ乾燥シテ往々紅色ヲ呈ス、大小種々ニシテ粟粒大ヨリ李實大ニ至ルモノアリ組織的検査ニ據レバ浮腫性纖維腫ト稱スベキ形態ニシテ表面ハ通常重層毳毛圓柱上皮ヲ以テ被ハレ多數ノ盃狀細胞籍在ス但シ外氣ニ曝露セル部ハ重層扁平上皮細胞ニ變ズ固有粘膜層ハ粗鬆ノ結締組織纖維網狀ニ走行シ其間腔ハアルブミン含有ノ漿液又ハ粘液ヲ充タシ且ツ腺、血管等ハ増殖ス神經ハ往時之ヲ欠クト信ゼラレシガ近時其存在ヲ證明セリ

症候 鼻閉塞、分泌過多、膿性ノモノハ多クハ副鼻腔ノ滯膿アリト察スベシ、嗅覺障害、口呼吸及ビ閉塞性鼻聲ハ最モ顯著ノ症候ニシテ其他往々衄血、流淚等ヲ來シ或ハ中耳加答兒、咽喉加答兒、眼結膜炎等ヲ併發スルコ

粘液茸

トアリ又頭痛頭重不眠精神沈鬱記憶減退作業怠慢等ノ所謂鼻性精神機能障害アリ或ハ喘息ヲ誘發スルコトアリ
鼻茸著大トナリシモノハ前鼻孔ノ邊ニ現ハレ或ハ後鼻腔ニ下垂スルモノアリ加之永年存在スルトキハ外鼻ノ變形ヲ來ス即チ鼻梁扁平トナリ鼻骨ハ左右相離隔シ鼻翼ハ軟骨萎縮ノ爲メ柔軟トナル

圖七百第
粘液茸ノ鼻外ニモ來テ形變ノ來



タルモノハ慢性肥厚性鼻炎ト誤診セラルコトアリト雖モ古加乙涅塗布ヲ行フニ鼻茸ハ收縮シ難シ又消息子ヲ以テ莖ノ有無移動硬度等ヲ知ルニヨリテ甲介及ビ骨朧ト判別スルヲ得ヘシ

診斷 通常容易ナリ

只表面發赤肥厚シ

豫後

佳良ナリ然レトモ細少ノモノハ往々看過サレ易ク又ハ鼻茸本來ノ發生根原地ヲ除キ得ザルトキハ頻回再發ヲ免レザルモノナリ

療法

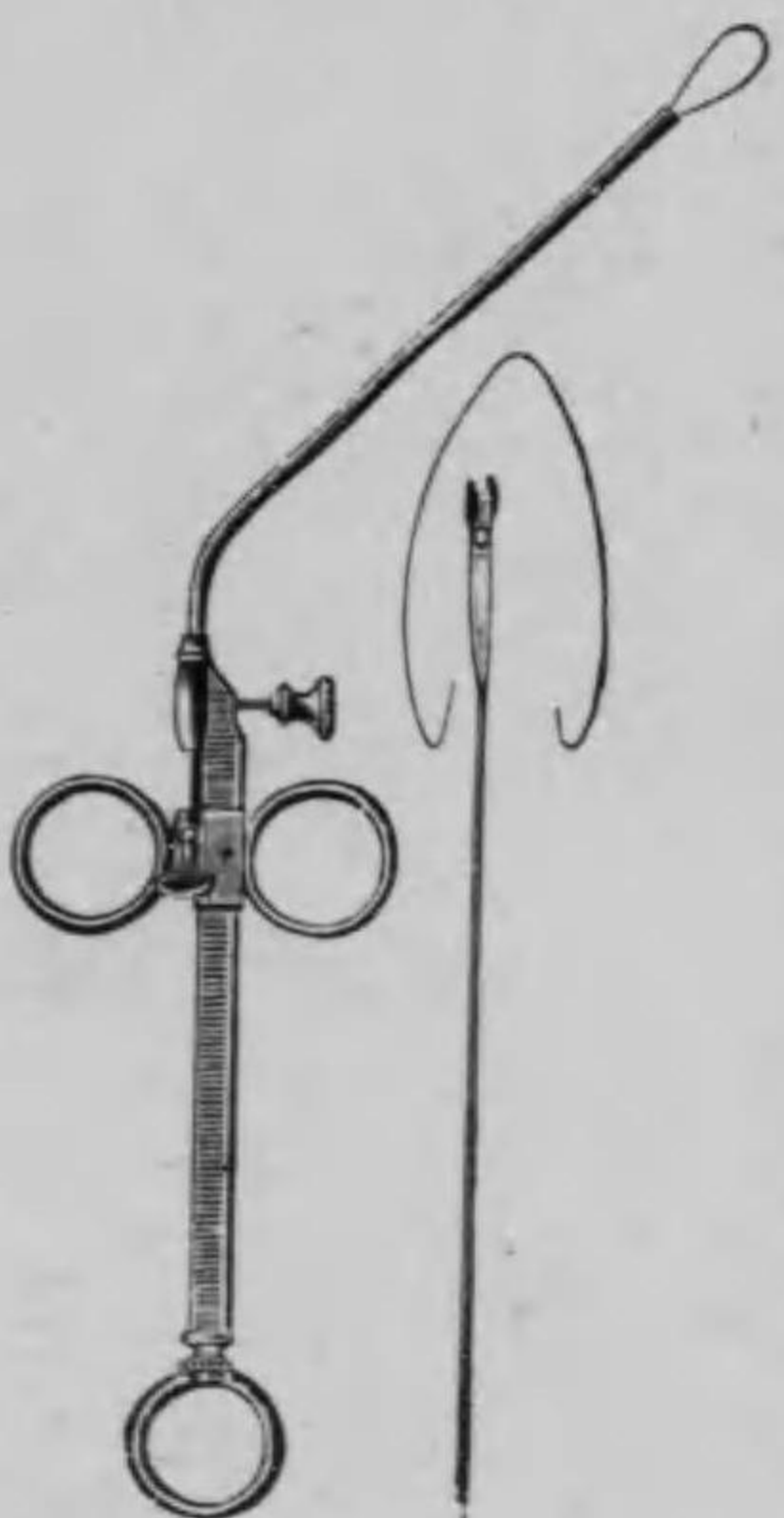
只手術的療法アルノミ種々ノ藥物療法ノ如キハ絕對ニ無効ナリ手術ニ三種アリ

1 錯出法

往時鼻科學ノ進歩セザリシ時代ニハ主トシテ應用セラレタル方法ニシテ麥粒錯子ヲ以テ鼻茸ヲ捻ヂ切リ

タリ今日ニ於テハ次ニ述ブル絞斷器ヲ用キザルモノナク錯子ノ應用ハ少ナシト雖モ亦決シテ無用ニ

圖八百第
ケウラセ氏用絞斷器



アラザルノミナラズ場合ニヨリテハ甚ダ必要ナリ即チ鼻茸ノ小ニシテ係蹄ニテ捕捉シ難キモノ或ハ莖ヲ除去スルニ能ク可ラズ通常ハイマン又ハルトマン氏錯子ヲ用ユ

2 寒係蹄法

最モ簡單ニシテ且ツ適切ナル方法ニシテ現時專ラ稱

第九百九十九圖
鼻茸摘出術(保蹄運用法)



用セラ
ル、ク
ラウゼ
係蹄ハ
極メテ
便利ナ
リ其法
鼻中隔
及外壁
ニ一〇
%古加
乙涅槃
ヲ塗布
シタル
後係蹄

ヲ鉛直ニ保持シテ其ノ間隙ニ挿入シ適當ノ部ニ至レバ下方ヨリ
外上方ニ廻轉シテ鼻茸ヲ其係蹄中ニ入レ漸次上方ニ押シ上ケテ
莖部ニ達シタルトキ絞縮シテ牽引スベシ此ノ方法ヲ以テ大ナル
鼻茸ヲ摘出シタル後チ尙ホ小ナルモノ或ハ莖ノ残留スルアラバ
前項ノ錯子ヲ併用スベシ

3 熱係蹄法 寒係蹄ニ於ケル如ク白金線係蹄ヲ以テ絞挫シ電氣ヲ
通ジテ之ヲ灼斷スルナリ熱係蹄ヲ用ユレバ出血ヲ來スコト少キ
利アレドモ白金線係蹄ハ柔軟ニシテ充分捕獲シ難シ又通常粘液
茸ヲ摘出スルモ出血少ナキガ故ニ強チ熱係蹄ヲ用ユルニ及バザ
ルモノトス

後療法ハ肥厚性鼻炎ノ部ヲ参照スベシ

乳嘴腫 Papillom.

硬固ノ乳嘴腫ヲ發スルコトアリ鼻腔内ニハ稀レニシテ鼻前庭ノ近圍ニ
生ズ之レニ反シテ後鼻竅ニハ屢々乳嘴狀表面ヲ有スル纖維腫即チ硬性

乳嘴腫又纖維乳嘴腫ヲ生ズ其構造及外觀ハ慢性肥厚性鼻炎ニ於ケル莓實狀肥厚ニ類似スルモノナリ

血管纖維腫 Fibroangioma (Angiofibroma).

真正ノ纖維腫ハ甚ダ稀有ニシテ多クハ血管纖維腫トシテ發ス殊ニ中甲介ニ生ズルコト多シ組織ハ多數ノ毛細管或ハ脈管ヲ含有スル纖維腫ニシテ時トシテ浮腫狀ヲ呈ス

出血性鼻中隔茸 Blutender Septumpolyp.

稀レニ見ル處ノ茸腫ニシテ男性ヨリ女性ニ多キガ如シ鼻中隔軟骨部ニ發生シ表面平滑或ハ乳嘴狀ヲ呈シ大豆大ヨリ李實大ニ至リ多クハ莖ヲ有ス臨床鼻閉塞アリ時々著シキ出血ヲ來スヲ特徴トス
茸腫ハ鏡檢上肉芽腫、血管纖維腫、或ハ血管擴張性茸 Telangiectatische Polyp. ナルコト多シ

血管纖維腫

出血性鼻中隔茸

骨腫 Osteom, 軟骨腫 Chondrom.

稀レニ發生スルコトアリ

B 惡性腫瘍 Bösarartige Geschwülste.

鼻腔内惡性腫瘍ハ概シテ稀レニシテ肉腫ハ癌腫ニ比スレバ較々多シ

肉腫 Sarcom.

幼年者及少壯者ニ發スルコト多シ發生部位ハ鼻中隔軟骨上部ヲ最多トシ篩骨之ニ次グ鼻側壁、鼻底及其他ノ部ニハ極メテ稀ナリ多クハ圓形細胞或ハ紡錘形細胞ヨリ成リ急速ニ發育ス

症候 鼻閉塞甚ダシク又時々劇シキ出血ヲ來ス鼻背上部ハ扁潤廣展

シ外皮ハ腫起シ鬱血ヲ呈ス屢々副鼻腔、眼窠、口腔或ハ頭蓋腔ニ向ツテ蔓延シ遂ニ崩潰シテ組織及ビ分泌物ノ分解ニ由ル惡臭ヲ放ツニ至ル

豫後及經過 癌腫ニ比スレバ稍々佳良ナリ若シ有莖性ノ纖維肉腫

惡性腫瘍

肉腫

出血性鼻中隔茸 骨腫 軟骨腫 肉腫

ナルトキハ其發育緩慢ニシテ早期手術ニヨリテ蔓延ヲ防止スルヲ得ベシト雖モ勿論全治スルコト困難ナリ殊ニ小圓形細胞肉腫ハ經過迅速ナリ尤モ發生部位、患者ノ體力、年齢等ニヨリテ異ナリ

療法

近來「ラヂウム」放射線ノ著効アルヲ報告スルモノアリ

癌腫 Carcinom.

肉腫ヨリモ更ニ稀ニシテ發生部位ハ鼻腔上部又屢々副鼻腔ナリ常ニ高齢ノ者ニ發シ多クハ圓柱細胞或ハ扁平上皮癌ナリトス

症候

ハ肉腫ト略ボ同一ニシテ發育ハ一層迅速ナリ破壊シテ膿性分泌物ヲ出シ惡臭ヲ放チ、漸次近圍組織ヲ荒蕪頽敗セシム、疼痛ハ殆ンド必發ニシテ頭部ニ放散シ神經痛性ナルコト多シ

豫後及經過

病勢ノ増悪迅速ニシテ一年乃至二年ニシテ斃ル

第四章 異物及鼻石

Freundkörper u. Rhinolithen.

異物

鼻腔異物ノ侵入道ニ三アリ前鼻孔、後鼻竇及ビ鼻腔ノ罅隙(外傷

癌腫

異物及鼻石

侵入道

性之レナリ

異物ノ種類

前鼻孔ヨリ入ルモノハ異物ノ最多數ヲ占ムルモノニシテ主トシテ小兒ニ於テ實驗スル所ナリ小兒ハ時トシテ自己ノ手ヲ以テ挿入シ時トシテハ遊戲ノ間ニ他兒ノ手ニヨリテ挿入セラル、コトアリ而シテ異物ノ種類ハ豆類、紙片、硝子球、果實類、鉛「ゴム」管、小石等ナリ
後鼻竇ヨリ侵入スル異物ハ食片、果實核等ニシテ嘔吐、錯嚥下及軟口蓋麻痺ニ際シテ來ル

鼻石ノ成立

外傷性異物ハ稀有ニシテ銃丸、木片等ナリ稀レニ狂人ニアリテハ小刀片其他驚クベキ大ナルモノヲ挿入スルコトアリ又鼻腔内逆生齒牙及ビ結石モ内部ニ發生シタル異物ニ外ナラズ

鼻石

鼻石ハ小異物等之レガ核トナリ其ノ周圍ニ鹽類ノ沈着堆積スルニヨリテ生ズルト説クモノアリ又核ヲ有セザルモ發生シ能フト説クモノアリ有核説ハ之ヲ非難スルモノ少ク無核説ハ左担スルモノ多カラズ有核論者ハ假令核ヲ發見セザルコトアルモ最初核トナリテ存在シタル凝血或ハ其他ノ軟性異物ハ永ク中心ニ在ル間ニ溶崩シテ形態ヲ失シ

鼻石ノ成分

タリシヤモ知ルベカラズト云フ

鼻石ノ成分ハ無機質殊ニ磷酸及ビ碳酸石灰、炭酸麻偏、涅、矢亞、酸化鐵等ニシテ有機質ハ脂肪、蛋白及ビ纖維等ナリ

症候

大小、形狀種類ニヨリテ一様ナラズ、小ニシテ平滑ナル無刺戟性異物ハ往々異常ヲ覺エズ、數年月間之ヲ知ラザルコトアリ、然レドモ尖端及稜角ヲ有シ或ハ豆類ノ如キモノニシテ膨脹スルトキハ出血、鼻閉塞及ビ疼痛ヲ起ス、又異物及ビ結石ノ久シク滯留セルトキハ必ず鼻汁ノ分泌亢盛ヲ來シ且ツ膿様ニシテ臭氣ヲ帶ビ頭痛、半面知覺異常、神經痛、癩癩様發作、精神機能障害ヲ發ス、其他時トシテハ眼ノ障害ヲ惹起スルコトアリ

療法

小ニシテ平滑ナル圓形ノ異物ハ豫メ「コカイン」液ヲ鼻内ニ注入シ又噴霧シ置キ強勢ナル噴擲ヲナスカ或ハ噴嚏ヲ誘發シ易キ藥粉ヲ鼻内ニ吹入スルトキハ前鼻孔ヨリ驅出スルヲ得ルコトアリ、通常反射鏡ニヨリテ鼻内ヲ充分照シツ、鑷子又ハ鉗子等ヲ以テ抽出スルヲ得ベシ不穩ノ小兒ニハ時トシテ麻醉ヲ應用セザル可カラズ

衄血

第五章

衄血

Epistaxis (Nasenhuten).

全身諸臟器中出血シ易キコト鼻腔ノ右ニ出ヅルモノナシ、恐ラクハ一回モ衄血ヲ患ヒザル者ハ稀有ナルベシ之レ鼻ノ解剖的關係ノ損傷シ易キ位置ニアルヲ及血管頗ル富饒ニシテ且ツ破綻シ易キガ爲メナリ

原因

ヲ分チテ左ノ數種トス

- 1 **局處病變** 鼻腔内創傷(例令バ異物、癢痒ヲ醫センガ爲メノ摩擦、消息子、歐氏管、カテーテル等ノ爲メ)或ハ外鼻衝突又ハ打撲、出血性鼻中隔茸、肉腫等ナリ
- 2 **全身病** 血行器病、貧血、萎黃病、惡液質、白血病、梅毒、結核、腎臟病等
- 3 **急性傳染病** 猩紅熱、麻疹、實扶埤里、インフルエンザ等
- 4 **出血性素因** 壞血病、血友病、ウエルホーフ氏紫斑病人等
- 5 **中毒** 磷中毒等
- 6 **其他多血質ノモノ** 潜水夫、高山登攀者等ニ來リ或ハ婦人ノ月經時ニ代償性鼻出血トシテ現ハル、コトアリ

衄血

三〇七

出血部位

出血部位 鼻中隔前端軟骨部所謂キールバハ氏部位(強度ノ擴張毛細管ト一種ノ海綿様組織ヲ有ス)ヲ最多トス鼻底之ニ次ギ甲介其他ハ稀ナリ

症候

原因ニ應ジテ異ナリ或ハ毫モ異常ヲ覺エズシテ突然出血シ或ハ前驅症例之ハ輕度ノ頭痛、顔面潮紅、鼻内癢痒感アリ、一側ニ來ルコト多ク兩側出血ハ熱性病或ハ血液變常症ニ見ルモノナリ出血ノ僅微ナルモノハ點滴狀ニシテ劇烈ナルモノハ搏動性ニ或ハ持續性ニ迸出ス色ハ多クハ鮮紅色罕ニ出血少量ノ時ニ在リテハ暗黒或ハ茶褐色ヲ呈ス一時ニ多量ニ出血スレバ眩暈卒倒ヲ來シ反復數回ノ出血ヲ來ストキハ全身貧血ヲ惹起スルニ至ル

診斷

通常容易ナレドモ夥シク湧出スルトキハ出血地點ヲ確定スルニ苦シムコトアリ必ズ先ヅキールバハ氏部ニ注目シ次デ他部ヲ検査スベシ出血部後方ニ位シ且少量ニシテ後鼻孔ヨリ咽喉ニ流注シ略出スルトキハ咽喉、胃、肺等ノ出血ト誤認セラル、コトアリ

豫後

原因ニ關ス出血素質、重症、熱性病等ニヨリテ來ルモノ殊ニ貧血

栓塞法

虛弱ノモノニアリテハ經過長ク且ツ反復スルモノ等ハ危險ナリ又老人ノ衄血ハ腦溢血ノ前徵タルコトアリ

療法

出血部位ヲ確認シ其局部ニ向テ止血法ヲ試ムヘシ

1 栓塞法 殺菌綿紗片或ハ棉花塊ヲ緊密ニ挿入充塞スベシ奏効確實ナラザレバ上中下ノ各鼻道ニ別々ニ挿入シ全鼻腔ノ栓塞ヲ行ヒ炎症的合併症ノ起ラザル限リ兩三日間放置ス

衄血アルトキハ其ノ出血點ヲ確認セズシテ直チニ收斂性藥液(一半クロール鐵液等)ヲ注入スルモノアルハ往々見ル處ナリ之レ不用ナルノミナラズ時トシテ却テ有害ナルコトアリ

腐蝕法

2 腐蝕法 習慣性衄血ハ再發ヲ防グ爲メニ局部ヲ三クロール醋酸、格魯謨酸(ラーベス)等ヲ以テ腐蝕ス(治療總論參照)

燒灼法

3 燒灼法 其作用前者ニ同ジク電氣ヲ以テ局部ヲ燒灼ス以上ノ局處療法ノ外原病ニ向ツテ治療ヲ加フベキハ勿論其外可及的安靜ナラシメ鼻部ニ氷嚢ヲ用キ時トシテハ脚湯ヲ施シ下劑或ハ止血劑ノ内服ヲ用ユル等臨機全身療法ヲ講ズベシ

鼻腔畸形

第六章 鼻腔畸形

Formanationen der Nasenhöhle.

先天性畸形即チ前鼻孔閉塞、後鼻竇閉鎖、鼻中隔ノ局部又ハ全部缺如、重複中隔等ハ稀ニシテ鼻腔ノ異常狹隘、過狹長鼻、或ハ廣潤、過扁潤鼻ハ之ヲ見ルコト稍ヤ多シ然レドモ最モ多クシテ臨床上緊要ナルモノハ左ノ如シ

鼻中隔畸形

A 鼻中隔畸形

Formanationen der Nasenseidewand.

鼻中隔畸形ハ彎曲及ビ棘、櫛ノ二種アリテ成立機轉ハ發育不齊對ニ因リテ現ハル、モノナルベシト云フ、即チ鼻中隔ハ他ノ骨質ヨリモ發育速ニシテ鼻中隔ノ高徑著シク増大スルニ當リ周圍ノ骨ニ支持セラル、時ハ同強質部ハ彎曲ヲ生ジ骨部及軟骨部ノ如キ不同質部ハ屈折ヲ觀ルコト多シ又發育ノ力他方面ニ働カズシテ鼻中隔ニ局所隆起ヲ起スモノアリ或ハ兩種ノ形態合併スルモノアリ通常第二生齒期前ニ於テハ稀ナリ

鼻中隔彎曲症

鼻中隔彎曲症

Deviation septi nasi.

人誰レカ絶對的眞直ナル鼻中隔ヲ有スルモノアラシ統計ニ據レバ著シキ彎曲ハ七十乃至八十%ニシテ稍常形ニ近キ僅少ノモノト雖モ比較的眞直ニ過ギザルモノナリ

彎曲狀態ハ多種多樣ニシテC形、S形、鉤形、屈折性等アリ屢々棘或ハ櫛ヲ併發シ時トシテハ鼻梁ノ傾斜ヲ見ルコトアリ

症候

種々ノ反射性神經症狀及ビ鼻閉塞、分泌過多(鼻咽腔ニ流ル)ニシテ鼻腔内ハ凸側ハ狹ク往々中甲介、下甲介ト觸接シ凹側ハ時トシテ廣潤ナレドモ多クハ下甲介ノ代償性肥大ニヨリテ鼻腔ハ適宜ノ廣袤ヲ保チ若クハ同時ニ狹窄症ヲ有ス

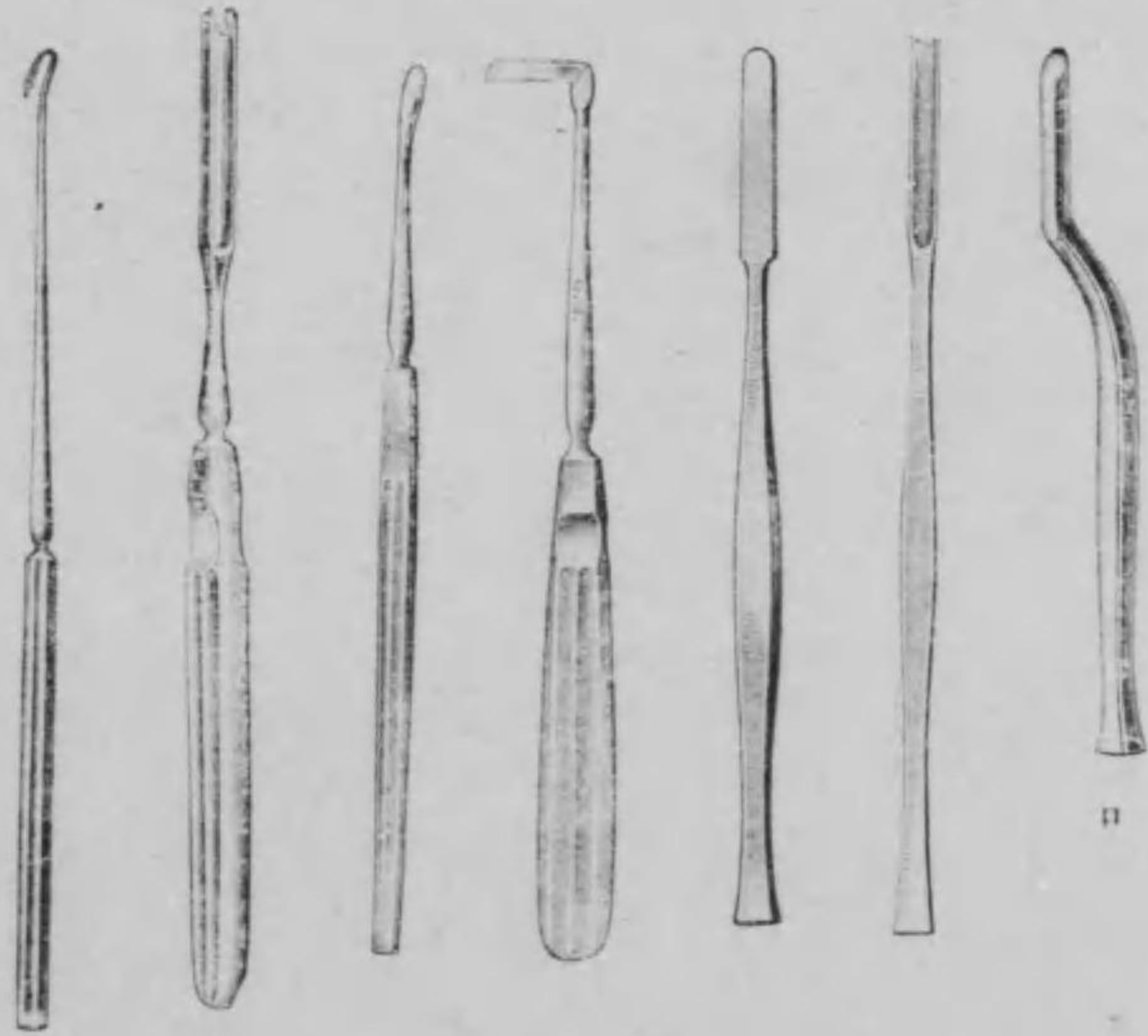
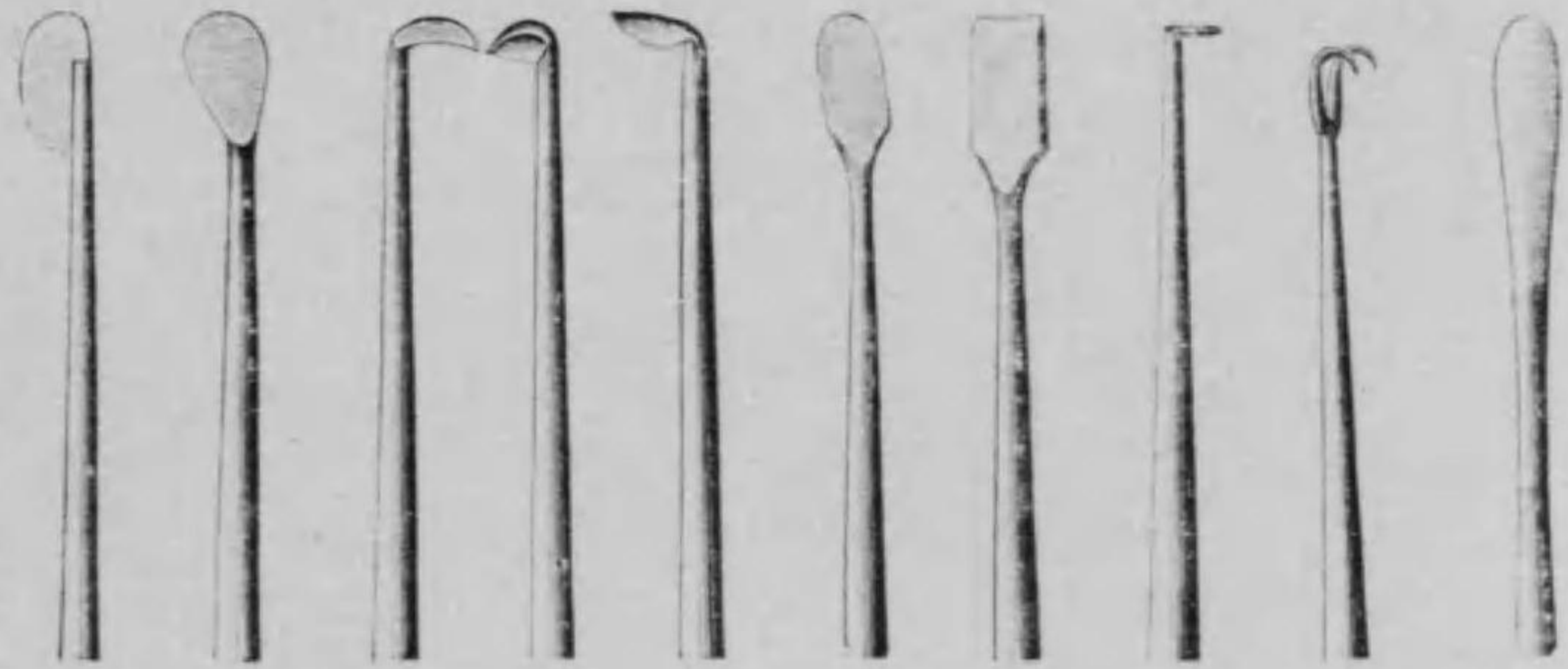
診斷

局部肥厚症、棘又ハ櫛トハ他側凹彎ノ存否ニヨリテ鑑別ス

療法

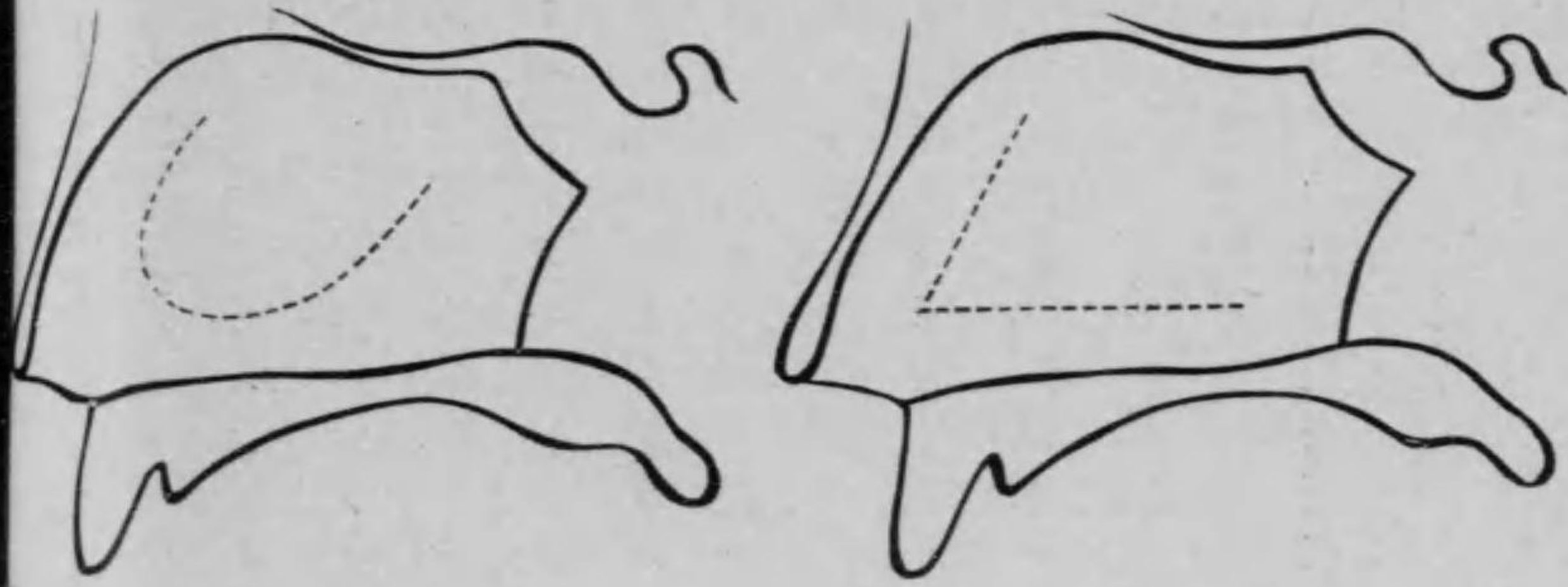
中隔彎曲ハ之ヲ無血的ニ矯正スルヲ得バ眞ニ合理的療法ナレドモ高度ノ彎曲ニ對シテ矯正術ヲ施スモ多クハ常ニ効果ナキモノナリ輕度ノモノニハ綿花栓塞又ハ護膜管、象牙、水牛桿ノ插入ヲ行ヒ矯正スルヲ得ルコトアリ高度ノモノニ在リテハユース氏壓迫器使用法等アレドモ管ニ矯正ノ目的ヲ充分ニ達スルヲ得ザルノミナラズ往々軟骨ノ壞

第百一十圖 鼻中隔窓狀切除術器械ルーレ氏定



イ

第百一十圖 鼻中隔窓狀切除術線



痘ヲ免レザルノ缺點アリ現今専ラ應用セラル、ハ

粘膜炎下窓狀切除術 Submucosae Fensterresektion

ナリ其ノ手術式左ノ如シ

1

消毒 患者ノ顔面殊ニ鼻部ヲ石鹼

ヲ以テ洗ヒ鼻前庭部及外鼻ハ硼酸

水ヲ醃シタル綿紗ヲ以テ清拭ス鼻

腔内ハ食鹽水又ハ硼酸水ヲ以テ洗

滌スルヲ以テ足レリトス何トナレ

バ普通鼻腔内ニハ有害菌存在セザ

レバナリ

2

麻酔 〇、五—一%古加乙涅溶液ニ

「アドレナリン」ヲ混ジタルモノ(一〇、

〇)ノ古加乙涅溶液中ニ二、〇)ヲブラ

ツツ注射器ヲ以テ中隔前部ノ粘膜炎

粘膜炎開

3

下ニ注射ス然ルトキハ粘膜炎蒼白色トナル尙ホ他側ニモ注射シ或ハ更ニ二〇%古加乙混溶液ヲ塗布スルトキハ奏効充分ナリ
粘膜炎開 鼻中隔凸隆側ニ於テ第一百十圖ニ示スガ如ク弓狀若クハ隅角狀ニ切開シ軟骨膜ト共ニ軟骨ヨリ剝離シ其ノ基底ニ於テ後上方ニ翻轉シ小綿球ヲ以テ之ヲ固定ス

軟骨穿孔

4

軟骨穿孔 凸側粘膜炎剝離シ終レバ軟骨ヲ穿破ス此際凹側ノ粘膜炎ヲ損傷スルコトアルヲ以テ凹側鼻腔内ニ小指ヲ挿入シテ雙合法ヲ行ヒツ、軟骨刀ヲ以テ徐々ニ一部ニ切開ヲ加ヘ其孔ヨリエレバトリウムヲ挿入シ

凹側粘膜炎剝離

5

凹側粘膜炎剝離 ヲ行フベシ此際モ亦鼻腔内ニ小指ヲ挿入シテ雙合法ヲ用フルコト前ノ如シ

固有切除

6

固有切除 軟骨若シクハ骨或ハ二者共ニ之ヲ切除スルコト恰モ壁ニ窓ヲ穿ツガ如シ窓狀切除術ノ名此ニ因ス
軟骨切除ニハキリアン氏軟骨刀ヲ用フルヲ佳トス即チ剝離シタル粘膜炎ノ兩葉間ニ開張器(キリアン氏中鼻道鏡)ハ便利ナリヲ挿入

粘膜炎整復

7

粘膜炎整復 最後ニ翻轉セル粘膜炎ヲ整復シ出來得ベクンバー二ノ縫合ヲ行ヒ或ハ單ニ對側粘膜炎ニ向テ附着セシメ殺菌綿花又ハ綿紗ヲ以テ輕ク壓抵栓塞ス

後療法

8

後療法 術後二―三日ニシテタンボンヲ交換ス爾來局處ノ状態ヲ精査シ或ハ粘膜炎ニ肉芽ヲ生ズレバ硝酸銀ヲ以テ腐蝕ヲ行フベシ

圖二百第
形畸隔中鼻



鼻中隔棘皮櫛

鼻中隔隆起(棘及櫛)

Vorsprünge der Nasen

scheidewand (Spina

septi u. Crista Septi).



イ ハイエック氏矢狀鑿
 ロ クラウゼ氏重覆鑿
 ハ コレツ氏鑿
 ニ ベツクマン氏鋸

軟骨性ナルコト多ク稀レニ骨性
 基底ヲ有ス通常一側ニ來リ兩側
 ニ來ルハ少ナシ時トシテ鼻中隔
 彎曲ノ凸側頂點ヨリ發シ或ハ獨
 立的ニ平坦面ヨリ突隆スルコト
 アリ其圓錐形若シクハ方錐形類
 ノモノハ棘 Spina septi 名ケ堤狀
 或ハ櫛狀ノモノヲ櫛 Crista septi
 ト稱ス

症候 鼻狹窄及ビ種々ノ反射神
 經症狀ヲ起ス殊ニ喘息神經性咳

第三百三十四圖

嗽心悸亢進等ノ原因トナルコト多シ

療法

彎曲症ヲ合併スルモノハ前章ニ於ケル窓狀切除術ヲ行フベシ

單ニ櫛或ハ棘ノ獨立シテ發生セルモノニハ次ノ方法ヲ應用ス

1 鑿去術 棘或ハ櫛ノ小ナルモノハ鑿ヲ以テ粘膜ト共ニ削除スル
 ニテ足レリ大ナルモノハ粘膜ヲ剝離スルヲ佳トス鑿ハハイエック
 氏矢狀鑿ヲ用フル時ハ最モ便利ナリ又クラウゼ氏ノ複鑿モ用ヒ
 ラル(第百十三圖)

2 鋸斷術 ベツクマン氏手鋸ヲ以テ下方ヨリ上方ニ向テ鋸斷ス

3 鑽除術 電氣「モートル」ニ連結シタル適當ノ直徑ヲ有スル鑽子ヲ

以テ粘膜ト共ニ或ハ粘膜ヲ剝離シタル後チ鑽除ス

4 電氣燒灼術 軟骨部ノ棘ニ應用セラル、コトアリ但シ燒灼後ノ
 潰瘍ハ容易ニ治癒ニ赴カズ

以上種々ノ方法アリト雖モ各々一得一失アリテ何レガ優秀ナルヤ速ニ
 斷案ヲ下シ難シ鑿、鋸或ハ鑽ハ出血シ易ク電氣ハ疼痛、反應症狀著シキコ
 トアルモ亦各得點ヲ有ス要スルニ簡單ノ器械ヲ以テ目的ヲ達スルヲ佳

鑿去術

鋸斷術

鑽除術

電氣燒灼術

トスベシ予ハ鑿去術ヲ棘ノ大小、基底ノ廣表ニ應ジテ粘膜ト共ニ或ハ粘膜下ニ於テ施行スルトキハ十分効ヲ奏スルモノナルヲ實驗ス

B 鼻側壁ノ畸形

Anomalien der lateralen Wand

1. Nasenhöhle.

鼻側壁ノ畸形

中甲介膨隆

中甲介ノ前端骨胞狀ニ腫脹シ粘膜ハ恰モ、ポリープ狀ヲ呈ス然レドモ其粘膜赤色ナルト探診スレバ骨質ヲ包含スルヲ以テ鼻茸ト判別ス可シ

中甲介膨隆

篩骨胞膨隆

中下甲介ノ間ニ於テ外壁ヨリ膨出シ屢々中甲介ヲ壓排シテ其位置ヲ奪ヒ中甲介ト誤認セラル、コトアリ

篩骨胞膨隆

下甲介膨隆

屢々實驗スル所ニシテ殊ニ鼻中隔彎曲症ニ於テ中甲介膨隆ニ併發ス

症候

小ナルハ著シキ症狀ヲ呈セズ膨大スルトキハ鼻閉塞、嗅覺脫失等諸種ノ神經症狀ヲ發ス

療法

鼻缺、係蹄、鉗子等ヲ以テ之ヲ切除ス

鼻腔内癒着及閉鎖

第百四十四圖

後天性(瘡痘)前鼻孔閉塞

(後術手)

(前術手)



C 鼻腔内癒着及閉鎖

Synechion n.

Atresien

原因

先天性アリ前部ノ癒着ハ狼瘡、梅毒、痘瘡及腐蝕ヨリ來ルコトアレドモ多クハ先天性ナリ中部癒着ハ鼻甲介領域ニ現ハル、モノニシテ絲狀、索狀又ハ帶狀ノ癒着ヲ下

甲介ト鼻中隔間ニ來スヲ常トス通例甲介粘膜燒灼、甲介切除術後ニ見ルモノニシテ膜様閉鎖及癒着ナルコト多シ後部閉鎖ハ稀ニシテ結締織性、骨性或ハ混合性ナリ

症候 小ナル癒着ハ毫モ異常ヲ呈セザルモ廣大ナルトキハ鼻閉塞症狀及反射神經症狀ヲ呈ス

診斷 視診及探子検査ニヨリテ明カナリ

療法 骨性癒着ハ之ヲ鑿去スベシ膜性ノモノハ銳刀又ハ鋏ヲ以テ截開シ再ビ癒着セザル様後療法ニ注意スベシ即チ綿紗、厚紙板、硬護謨、錫箔、銀製栓管等ヲ挿入シ置クヲ要ス

第七章 鼻前庭ノ疾病 Krankheiten der Vestibuli nasi.

鼻前庭ノ疾病
濕疹

濕疹 Eczema vestibuli.

原因 腺病質、貧血ノモノニ發シ易ク多クハ鼻腔及ビ副鼻腔ノ疾病又

ハ腺増殖症等ニ來ルモノニシテ鼻汁ノ刺戟ニヨリテ發シ若シクハ手巾指頭等ノ頻回ノ刺戟ニ因ル

症候 急性ニ現ハル、モノハ前庭或ハ鼻入口部ノ皮膚發赤、腫脹シ屢々水泡、皰裂或ハ痂皮ヲ生ズルヲ見ルコトアリ然レドモ多クハ慢性狀態ヲ呈シテ發スルモノニシテ皮膚ハ發赤、濕潤ヲ來シ又小膿胞、皮膚肥厚、皰裂、痂皮等ヲ生ズ此皰裂ハ顔面丹毒ノ侵入門戸トナルコトアルヲ以テ注意スベシ患者ハ鼻孔ノ不快ナル緊張感、癢痒ニ苦シミ手巾若クハ指尖ヲ以テ鼻孔ヲ搔爬スルガ爲メニ疼痛ヲ發シ又痂皮ヲ除ケバ出血スルコト少ナカラズ時トシテハ鼻閉塞甚シキコトアリ又屢々、フルンケル、鬚瘡ヲ併發ス

療法 局處療法ノ必要ナルハ言フヲ俟タズ其他全身療法并ニ鼻腔内ノ疾病ニ向ツテ適當ノ療法ヲ併セ行フベシ局部ニ痂皮アルトキハ先ヅ之ヲ除去シタル後チ一―二%硝酸銀液ヲ塗布シ且ツ次ノ如キ藥物ヲ用フ

處方

- | | | | |
|--------------------------------------|------------------|-------------------------------|---------------------------|
| 1 硝着、亞鉛花
華搦林
右一日數回塗布 | 各二、〇
三〇、〇 | 4 安息香酸
亞鉛花
豚脂 | 右一日數回塗布
一、〇
五、〇 |
| 2 水楊酸 二、〇 亞鉛花、澱粉
華搦林
右一日二—三回塗布 | 各二四、〇
五〇、〇 | 5 無臭イヒチオール
ウキルソン氏軟膏
右同上 | (ウキルソン氏軟膏)
三、〇
三〇、〇 |
| 3 白降汞
華搦林、刺納林 | 二、〇—五、〇
各五〇、〇 | | |

鬚瘡

Sycosis vestibuli.

男子ニ多ク發スル疾病ニシテ葡萄狀菌ノ侵入ニヨリテ毛囊炎ヲ起シ其頂點ヲ鼻毛ノ穿通セル膿胞ヲ形成シ周圍ハ僅ニ發赤シ疼痛アリ本症ハ屢々反復痂皮ヲ結ビ頑強ニシテ容易ニ治癒セザルモノナリ又濕疹、ブルンケルニ併發スルコトアリ

療法

破潰以前ハ緩和性ノ軟膏ヲ塗布シ又疼痛アルモノニハ温罨法

ヲ行フベシ痂皮ヲ生ジタルトキハ略ボ濕疹ノ療法ニ同ジ

癩

Furunculosis vestibuli.

濕疹又ハ鬚瘡ニ續發シ或ハ單獨ニ發ス鼻尖又ハ鼻翼ノ發赤、緊張及ビ疼痛アリ時トシテハ輕度ノ發熱、惡寒ヲ來スコトアリ通常内壁ニ於テ膿點ヲ見ルモノナリ時トシテハ大ナル膿瘍ヲ形成シ又稀レニハ周圍ノ蜂窩織炎ヲ續發スルコトアリ

療法

一—二%醋酸礬土溶液ノ温罨法ヲ稱用ス

酒皰鼻

Acne rosacea.

鼻及其ノ近圍ノ限局疾患ニシテ時トシテハ愕クベキ醜形ヲ呈スルニ至ルモノアリ酒客ニ多ク婦人生殖器病、胃腸疾患、寒冷、血行障害等ニ因ルモノナリ

症候

汎發性濃紅色斑ヲ呈シ毛細管擴張ヲ明カニ見ルヲ得ベシ指壓ニヨリ消退ス外皮ニ於ケル結節相融合シ胡桃大ニ達スルアリ皮脂腺ノ

酒皰鼻

癩、酒皰鼻

炎性浸潤或ハ化膿ヲ來シ或ハ組織肥厚ス
自覺症ハ顯著ナラズ僅ニ溫感ヲ有スルニ過ギザルコトアリ、化膿シタルト
キハ疼痛ヲ訴フ

經過 緩慢

療法 原因ヲ探リ之ヲ治療スベシ又局處ニ向ツテハ輕症ノモノニハ
十%硫黃軟膏、イヒチオール軟膏等ヲ塗布シ重症ノモノニハ電氣燒灼或
ハ亂刺時トシテハ一部ノ切除ヲ行フ

處方

- | | | | | |
|---|--------|------|-------|------|
| 1 | 精製樟腦 | 五、〇 | ラノリン | 五、〇 |
| | 沈降硫黃 | 一〇、〇 | ワセリン | 一〇、〇 |
| | 蒸溜水 | 適宜 | 亞鉛華軟膏 | 五、〇 |
| | 右爲泥狀塗布 | | 石灰水 | 九、〇 |
| 2 | チオノール | 一、〇 | 右塗布料 | |

第二編 副鼻腔ノ疾病

Krankheiten der

Nasennebenhöhlen.

第一章 副鼻腔ノ炎症 Entzündungen der

Nebenhöhlen.

副鼻腔ノ炎症

原因

副鼻腔炎ノ最モ主要ナル原因ハ急性傳染病就中、インフルエン

ザ^レ及ビ急性鼻

炎ナリ其他實

扶埵里、丹毒猩

紅熱、肺炎等ニ

因スルコト多

シ、又上顎骨外

第百五十五圖 副鼻腔排列模型

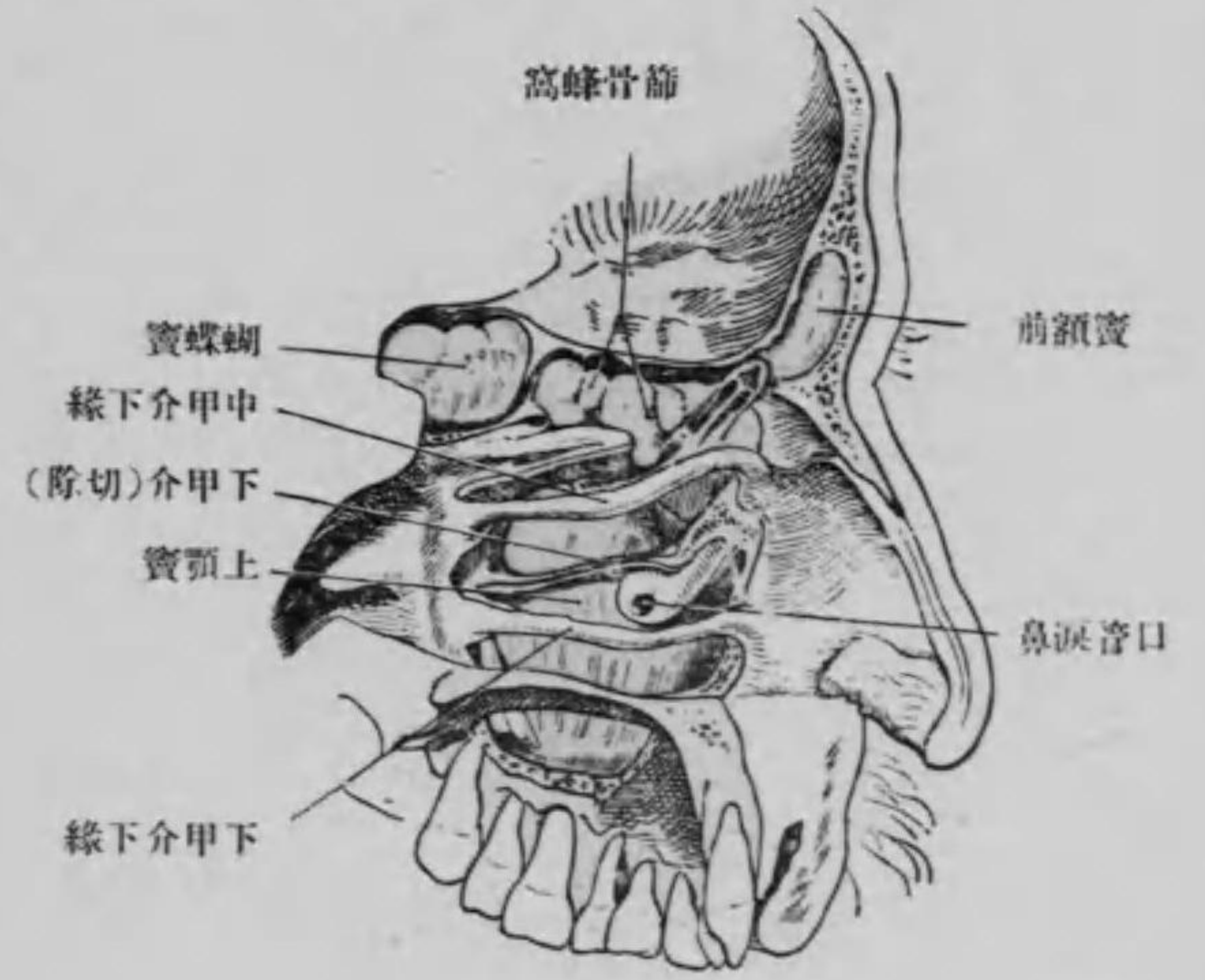


黃	篩骨蜂窩
青	前額竇
綠	蝶竇
黑	上顎竇

傷、鼻内手術、異物、梅毒、齒牙(上顎竇ニ限ル)ノ疾病等ニヨリテ發ス
病理解剖 急性症ハ粘膜炎ノ發赤腫脹ヲ來シ、高度ノモノハ浮腫狀ヲ

副鼻腔ノ炎症

圖六十百第
ス示ヲ係屬ノ腔鼻副シ去除ノ部一ノ骨筋及壁側腔鼻



ニシテ稍ヤ硬シ、粘液腺ハ屢々囊腫様ニ變化シ、骨モ亦肥厚スルヲ常トス、甚シキハ骨贅生ヲ來シ一部ノ膨隆或ハ棘狀突隆ヲ現ハスヲアリ或ハ隨所骨瘍ヲ生ジ又ハ菲薄トナリテ所謂ベルガメント、紙様音ヲ發スルアリ

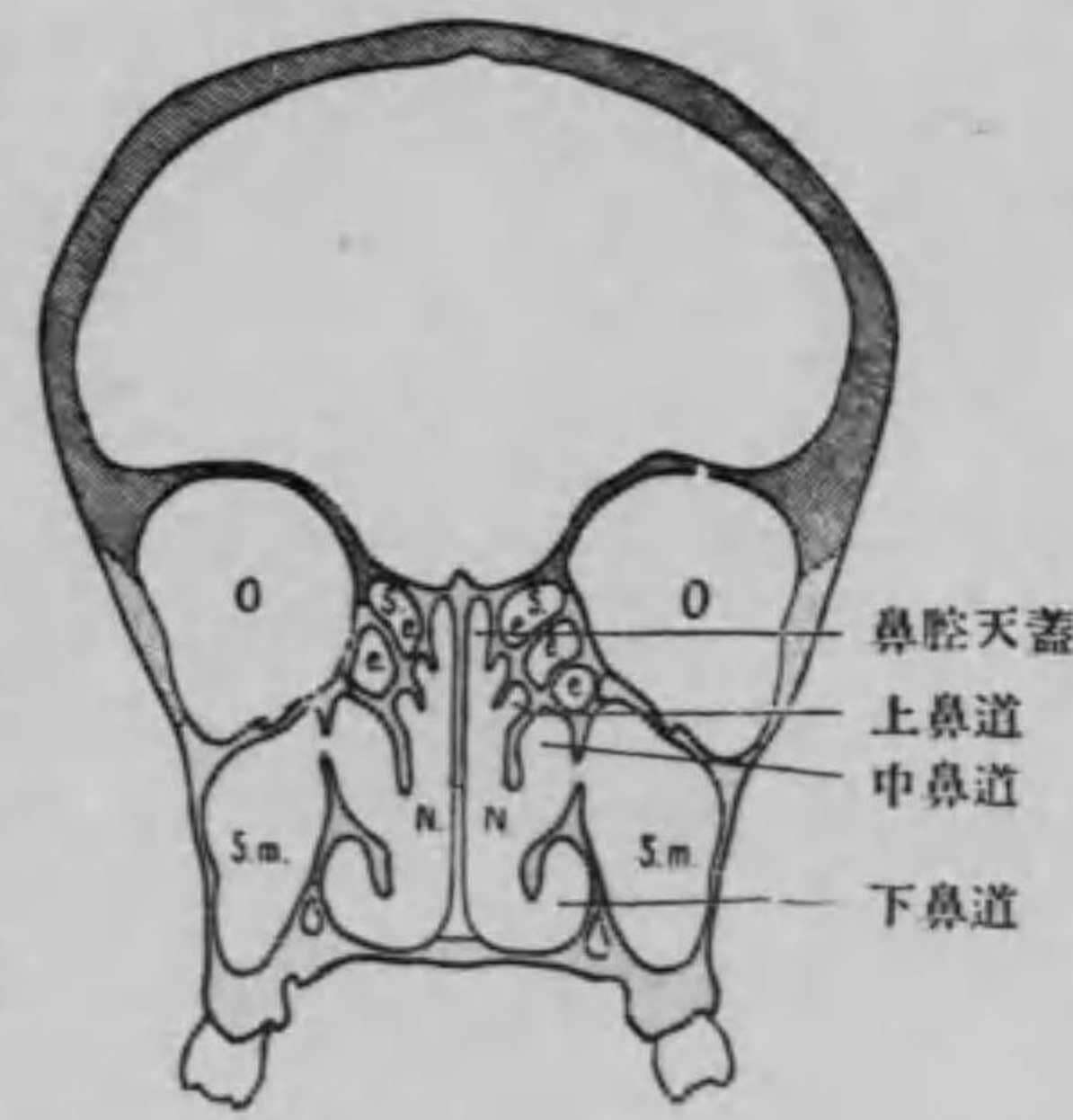
呈ス、分泌物ハ漿液性、粘液性、粘液膿性若シクハ膿性ニシテ稀レニハ纖維性ナルアリ、時トシテ全ク分泌物ヲ缺如スルコトアリ粘膜炎ハ一般ニ漿液及ビ圓形細胞滲潤ヲ蒙ル
慢性症ハ之ヲ二期ニ區別ス
初期ニハ粘膜炎ハ浮腫狀ニシテ後期ニハ漸次纖維性癢痕性トナリ而シテ絨毛様又ハ乳嘴様肥厚ヲナシ表面蒼白

自覺症候
疼痛

症候

1. 疼痛 急性炎ニシテ輕度ナルトキハ缺如スルヲアリ慢性症ニア

圖七十百第
斷額前蓋頂



白 青 綠 黃 S.e. S.m. N O
前額骨 顳骨 篩骨 篩骨 上顎骨 下甲介骨 篩骨蜂窩 上顎竇 上顎竇 鼻 眼
リテハ無痛ニ經過スルコト多シ、又疼痛アル場合アレハ不定ニシテ限局セザルコト多シ頭痛ハ輕重アレドモ殆ンド必發ニシテ通常間歇性ナリ屢々神經痛ノ性質ヲ有

神經症狀

2.

シ片側又ハ前額部、鼻根部等ニ限局スルコトアリ
神經症狀 煩悶、沈鬱、怠慢トナリ或ハ氣六ヶ敷キ性質トナリテ激怒シ易ク所謂神經衰弱症狀ヲ呈ス、吾人ハ若シ以上ノ如キ症狀ヲ有スル患者ニ遭遇シタル際ニ一側ノ三叉神經痛ト膿性ノ鼻汁ヲ認ムルトキハ必ズ先ヅ副鼻腔ノ滲膿ヲ考フベキモノトス

嗅覺

3. 嗅覺

減弱シ或ハ全ク消失ス時トシテ發作性ニ惡臭ヲ感ズ是レ

分解セル膿汁

ノ嗅裂ニ流出

シテ嗅神經ニ

作用スルガ爲

メナリ

鼻閉塞 分泌

物ノ量及ビ其

性狀ニ左右セ

ラレ或ハ粘膜

ノ變化例之バ

鼻茸肥厚等ノ

存否ニヨリテ

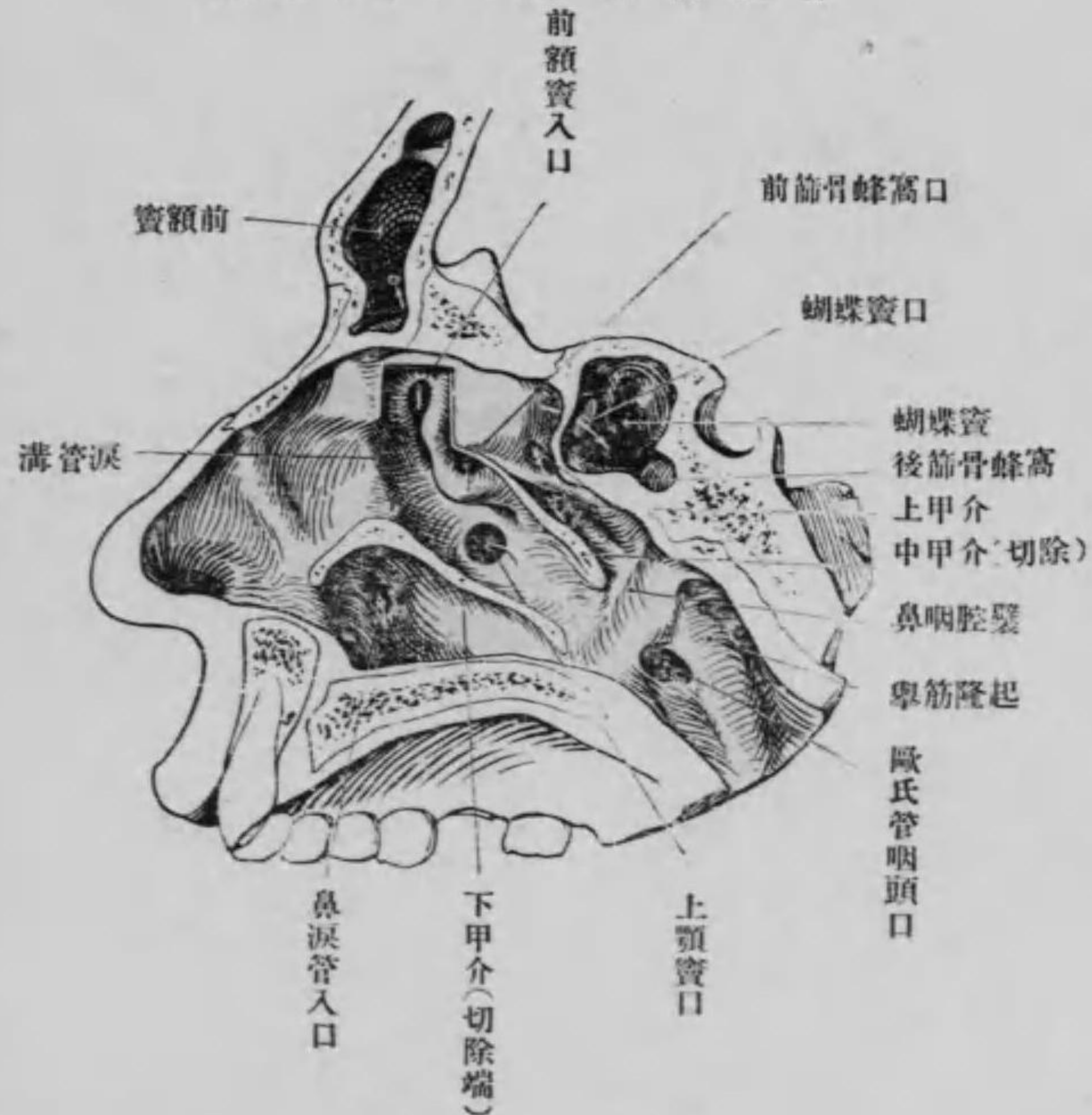
一定セズ

5. 膿汁分泌 副

鼻閉塞

膿汁分泌

圖 八 十 百 第
(除切介甲下中) 壁前額竇入口



4.

鼻閉塞 分泌

物ノ量及ビ其

性狀ニ左右セ

ラレ或ハ粘膜

ノ變化例之バ

鼻茸肥厚等ノ

存否ニヨリテ

一定セズ

5. 膿汁分泌 副

鼻腔ノ炎症ニハ缺クベカラザル症候ニシテ殊ニ上額竇膿腫症ニ
 アリテハ最も多量ナリ而シテ中鼻道ニ開口スル副腔ノ排泄ハ多
 クハ前鼻孔ヨリシ上鼻道ニ開口スルモノハ後鼻腔ヨリ咽頭ニ流
 ルヲ常トス然レドモ患者ノ長ク仰臥位ニアルトキハ中鼻道ニ
 排泄スルモノト雖モ同ジク咽頭ニ流下シ粘液及膿汁ノ略出セラ
 ルコト多シ

他覺症候次ノ如シ

1. 膿汁 鼻内検査ヲ施ストキハ各副竇ノ開口部ニ膿汁ヲ見ルモノ

ナリ即チ上額竇前額竇及前篩骨蜂窩等ヨリ來ルモノハ中鼻道ニ、
 蝴蝶竇及後篩骨蜂窩等ヨリスルモノハ嗅裂ニ現ハル然レドモ全
 鼻腔内ニ一點ノ膿汁ヲ發見セザル場合ニモ試験的穿刺ヲ施シテ
 濃厚ノ惡臭アル膿汁ヲ證明スルコト稀レナラズ

2. 粘膜變化 中鼻道及ビ嗅裂粘膜ノ變化ヲ來スモノニシテ通常鼻

茸様ニ肥厚シ若クハ鼻茸ヲ發生スルコト最も多シ左ニ滲膿部位
 ニ從ツテ粘膜ノ肥厚及ビ鼻茸ヲ發スル部位ヲ示ス

他覺症候
膿汁

粘膜變化

急性上額竇炎

前額竇	中甲介ノ前外部
上額竇	上顎骨鉤狀突起
前額竇	中鼻道前上部ノ篩骨壁
篩骨竇	中甲介前部
蝶形竇	中甲介内面
後篩骨竇	鼻中隔上部

以上ノ如キ局處病變ノ外全鼻腔粘膜ハ一般ニ腫脹潮紅シ下甲介及ビ鼻底ノ粘膜モ亦著シキ肥厚ヲ來スコトアリ

急性上顎竇炎

急性上顎竇炎

sinusitis maxillaris acuta.

急性化膿性上顎竇炎

A 急性漿液性上顎竇炎 *max. acuta serosa.* ハ固有鼻腔粘膜ノ急性炎ニ併發スルモノナリト雖モ通常顯著ノ特有症候ヲ發セズ

B 急性化膿性上顎竇炎 *S. max. acuta purulenta.*

原因 前章ニ述ベタルガ如ク急性傳染病就中インフルエンザアニ因リテ發スルモノ多ク其他實扶的里丹毒等ヨリ來リ或ハ齒牙ノ疾病ニ基因スルモノ亦少ナカラズ又上顎骨外傷鼻内手術燒灼栓塞等及ビ急性鼻

加答兒ニ續發ス

症候

發熱時トシテ惡寒ヲ伴ヒ頭痛アリ上顎骨部ノ緊張感若クハ疼痛ヲ有ス疼痛ハ咳嗽嘔吐及ビ頭首ノ前屈輕キ叩打等ニヨリテ増劇ス一朝鼻腔内ニ多量ノ膿汁漏泄ヲ來ストキハ諸症狀緩解スルヲ常トス他覺的ニハ頰部ノ腫脹壓痛アリ鼻粘膜ハ急性炎症ヲ發シテ發赤腫脹シ中鼻道ニ粘液膿性ノ分泌物ヲ見ル其他眼瞼浮腫結膜炎流淚ヲ來スコトアリ

診斷

前記ノ諸症狀ヲ有シ鼻腔内ヲ検査シテ半月狀裂隙ニ膿性分泌物現出シ下甲介ニ沿フテ流下スルヲ見レバ明カナリ若シ中鼻道ヲ精査スル能ハザレバ吸引法透照法等ヲ行ヒ尙ホ確診スルヲ得ザレバ試驗的穿刺法ヲ施スベシ(次項慢性上顎竇炎參照)

經過及豫後

原因ニ從ツテ一定セザレドモ概シテ豫後佳良ニシテ經過短カク平均一週間ナリ而シテ排膿ニヨリ自然治癒ヲ來スコト稀レナラズ然レドモ慢性ニ移行スルコト多シ

療法

鼻粘膜腫脹ヲ減退セシメ排膿ヲ佳良ナラシムルヲ要ス即チ古加乙涅アドレナリン溶液ヲ塗布シ或ハ噴霧シ頰部ニ氷囊時トシテハ温

卷法ヲ施シ兼テ腸管誘導法、發汗劑ノ内服等ヲ併用スベシ

ハイモル氏
齋膿症

慢性化膿性上顎竇炎 (ハイモル氏齋膿症)

Sinuitis maxillaris purulenta chronica.

(*Empyema atri Highmori*).

上顎竇ノ慢性炎症ハ稀レニ漿液性ノモノナキニ非ズト雖モ通常化膿性
ナリトス而シテ種々ノ副鼻腔疾患中最モ多ク見ル處ナリ

原因 急性鼻炎、急性上顎竇炎ヨリ移行スルモノニシテ殊ニ、インフル
エンザ性ニ多シ或ハ急性症状ナクシテ上顎歯牙及ビ齒槽ノ慢性疾患ニ
基因スルモノ亦頗ル多シ殊ニ第一大臼齒、第二小臼齒若シクハ第二大臼
齒ノ齲齒ヨリ來ル往時本症ノ最多數ハ齒牙ニ因スルモノト唱ヘラレシ
ガ近來ニ至リテハ其他ノ原因ヨリスルモノ却テ多キヲ知ルニ至レリ其
他外傷、慢性鼻炎、オツエナ、梅毒、結核等ヨリ續發スルモノアリ

症候 自覺的及他覺的ニ區別ス

自覺症候 前額、鼻根及ビ眼窩部ノ鈍痛時トシテ發作性鑽痛アリ又

自覺症候

往々上下眼窩神經痛ヲ發ス但シ頰部ニ疼痛ヲ有スルハ稀レナリ又爾餘
ノ鼻病ニ於ルガ如ク鼻性神經症狀ハ殆ンド必發ニシテ且ツ嗅覺減退、膿
汁嚙下ニ因スル消化器系ノ慢性疾病ヲ併發ス若シ又嗅覺全ク脫失セザ
ルトキハ鼻汁ノ惡臭ヲ自覺シ不快ニ堪エズ

他覺症候

慢性鼻加答兒症狀ヲ呈シ中鼻道附近ノ粘膜腫脹膨出シ

又粘液茸ノ發生スルアリ多クハ中鼻道ニ膿汁ノ排出スルヲ見ルモノナ
レドモ又少シモ無キコトアリ或ハ鼻咽腔ニ流下スルコトアリ膿汁ハ黃
色若シクハ帶綠色ニシテ不快ノ臭氣ヲ放ツ排膿ハ頭位ノ變換ニ伴ヒ又
ハ鼻腔内腫脹ノ度ニ應ジテ異ニシテ通常朝ハ多キモノナリ若シ鼻内ニ
交通孔ナクシテ膿汁少シモ排泄セザルトキハ犬齒窩部又ハ鼻腔内ニ向
テ骨ヲ壓迫膨出シ遂ニ穿孔スルニ至ル稀レニハ眼窩部ニ壓ヲ蒙リテ眼
球突出症ヲ來スコトアリ

經過

極メテ慢性ニシテ十數年ニ亘ルモノ少ナカラズ時トシテハ治

療姑息ニ流レ病勢一進一退定マリナク且ツ患者ハ苦惱ノ爲メニ高度ノ
神經障害ヲ來シ甚シキハ厭世觀ヲ起スニ至ルモノアリ

他覺症候

急性化膿性上顎竇炎

豫後 概シテ佳良ナリ陳舊ノ慢性症ハ根治手術ヲ施スモ再發ヲ免レザルコトアリ

診断 鼻閉塞アリテ膿ノ排出部ヲ認メザルモノハ慢性肥厚性鼻炎ト誤リ易シ假令膿ノ排出アルモノト雖モ他ノ副鼻腔滯膿症トノ鑑別容易ナラズ先ヅ鼻内ヲ清拭シテ後チ五%乃至十%ノ古加乙涅溶液ヲ中鼻道ニ塗布シテ粘膜ヲ收縮セシメ膿ノ流出部ヲ精査スベシ此際吸引法ヲ施ストキハ一層佳良ナリ(部位診断ハ三百三十頁ニ詳カナリ)

ベールレンケル氏ハ頭首ヲ前屈セシメ且ツ同時ニ健側ヲ少シク低位ニアラシムル時ハ竇内ノ膿汁ハ中鼻道ニ現出スト稱スレドモ確實ナラズ」フオゼン又ハヘーリング氏電氣燈ヲ以テ口腔内ヨリ透照スベシ偏側ノ上顎竇滯膿症アレバ健側ニ比シテ暗黒ニ透見スベシ但シ此方法ハ骨壁ニ厚薄ノ差アリテ確實ナラザルコトアリ又囊腫等トノ鑑別ニハ不充分ナルモノトス

以上ノ諸方法ヲ以テ略ボ膿ノ存否ヲ推測スルコトヲ得ベシト雖モ尙ホ一步進ンデ竇内ヨリ膿ヲ現出セシムルノ一層確實ナルニ如カズ此目的

ヲ達センニハ試験的洗滌法或ハ穿刺法ヲ施スヲ佳トス次ニ少シク詳述スベシ

洗滌法

穿刺法

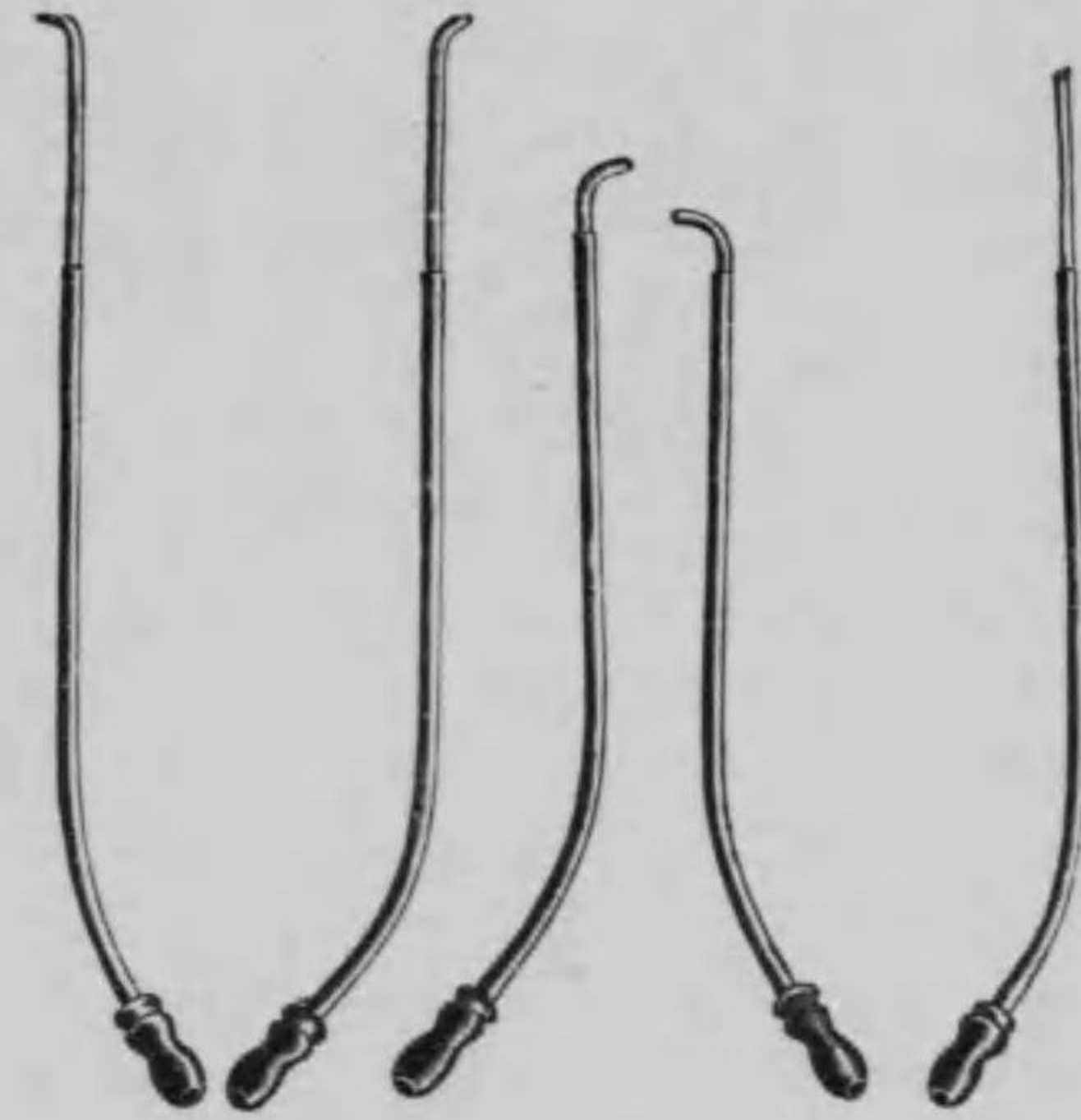
一 **洗滌法**

豫メ、コカイン液ヲ塗布シ中鼻道ノ自然孔若クハ副孔ヨリキリアン氏管又ハハルトマン氏管ヲ挿入シ管ノ外端ニハ「ゴム製」ボンブヲ接続シ是レニヨリテ洗滌液ヲ注入スルナリ洗滌ニ際シテハ頭部ヲ前屈セシメ先ヅ試ミニ徐々ニ輕壓ヲ以テ空氣ノミヲ吹入スベシ竇内ニ膿ノ存在スルトキハ空氣ハ膿ヲ振盪セシメテ水泡音ヲ發生シ再ビ鼻道ニ逸出シ或ハ嫌忌ス可キ惡臭ヲ放ツ、次テ洗滌液ヲ送ルトキハ膿ヲ混ジテ鼻孔ヨリ流出ス然ルニ若シ空氣ノ逸出セザルニ拘ハラズ強力ヲ以テ「ゴム」球ヲ壓縮シ空氣又ハ洗滌液ヲ送ルトキハ患者ハ頭痛、眩暈、呼吸促進ヲ來シ甚シキハ一時失神スルニ至ルコトアリ注意スベシ

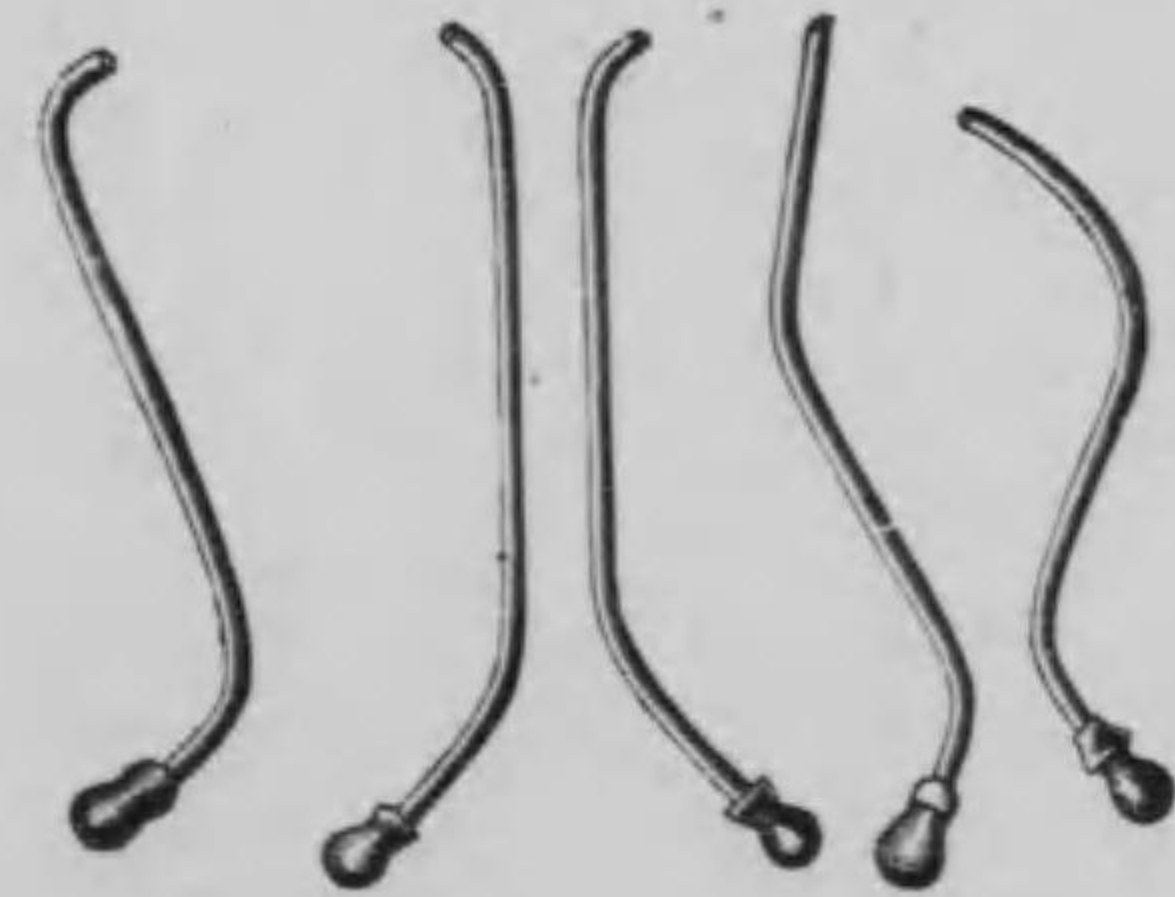
二 **穿刺法**

中鼻道ノ粘膜肥厚及ビ鼻中隔彎曲、半月狀裂隙ノ狹窄等ノ爲メニ鼻腔狹窄甚シク到底自然孔ニ管ヲ挿入スルコト能ハザルトキハ下鼻道ニ於テ試験的穿刺法ヲ行フ
先ヅ鼻腔内ヲ清潔ニシ、五乃至十%古加乙涅液ヲ數回下鼻道側壁ニ塗布

第九十百第
管氏ンアリキ



圖十二百第
管氏ワレコ及ンマトルハ



圖一十二百第
針刺穿氏トッミニシ



シ或ハ同液ヲ浸漬セシ綿栓ヲ挿入シテ側壁ニ密着セシメ十分乃至十五分間ヲ過ギテシユミット氏穿刺針ノ尖端ヲ下甲介ノ下際ニ於テ其前端ヲ去ル約二―二五仙迷ノ深部ニ挿入シ少シク壓ヲ加ヘテ骨壁ヲ穿通シ吸子ヲ牽引スルトキハ若シ竇内ニ膿汁存在スレバ注射筒内ニ現出

スベシ然レドモ膿汁極メテ濃厚ナルカ或ハ膿量僅微ニシテ針尖膿汁ノ表面ヨリ距ルトキ或ハ自然孔開通スルトキハ膿ヲ得ザルコトアリ此ノ場合ニハ注射筒ニテ微温食鹽水ヲ注入シタル後チ再ビ之ヲ吸引シ再三反復スレバ目的ヲ達スルヲ得ベシ

予ハ常ニ特ニ製造セシメタル管徑二密迷長サ約十仙迷ノ直套管針ヲ使

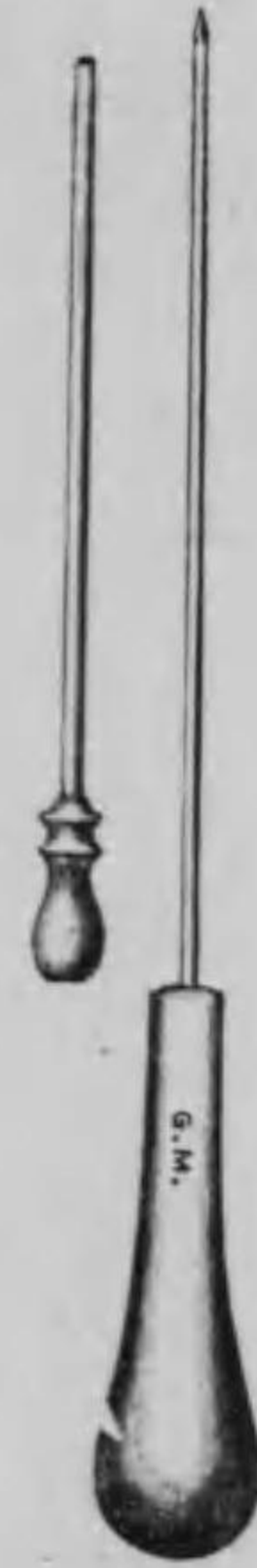
用シテ洗滌及ビ吸

引ノ兩法ヲ兼ネ行

フヲ得ルノ便利ヲ

感ゼリ其應用ハシ

圖二十二百第
針刺穿氏藤佐



ユミット氏穿刺針ト同ジク下鼻道ヨリ穿入スルモノニシテ下鼻道壁ヲ穿刺スベキ好位置ヲ定ムルニハ次ノ方法ニ從テ殆ンド常ニ誤リナシ即チ消毒シタル套管針ヲ取リ一度針尖ヲ後退セシメテ管内ニ潜メ下鼻道ニ沿フテ約四―五仙迷深ク挿入シ下甲介ノ下際ニ達セシム此ニ於テ管ノ外端ヲ鼻中隔側ニ偏倚シテ約四十五度又下方ニ向ツテ約十度ノ角度ヲ保タシメテ針尖ヲ僅カニ地平位ヨリ上方ニ向ハシム而シテ管ヲ其

前鼻孔ノ距離ハ五仙迷ニ至ルハ平
梨子ノ距離ハ五仙迷ニ至ルハ平
均ニ五仙迷ニ至ルハ平
均ニ五仙迷ニ至ルハ平
均ニ五仙迷ニ至ルハ平
均ニ五仙迷ニ至ルハ平
均ニ五仙迷ニ至ルハ平
均ニ五仙迷ニ至ルハ平
均ニ五仙迷ニ至ルハ平
均ニ五仙迷ニ至ルハ平

位置ニ保持シテ針尖ヲ前進セシメ少シク壓ヲ加ヘテ押ストキハ通常僅微ノ抵抗アルノミニテ穿通スルモノナリ

若シ穿刺部位ノ餘リニ前方及下方ニ過グルトキハ骨壁厚クシテ穿入困難ナリ、又竇腔ノ狹小ナルトキハ針尖ヲ以テ對側ヲ貫キ或ハ上方ニ失スルトキハ眼窩内ニ刺入スルノ過誤ヲ招クコトナキニ非ズ殊ニ初學者ハ屢々針尖ノ未ダ梨子狀截痕ニ達セザルニ早ク刺入シ爲メニ頰部ノ皮下結締織内ニ空氣又ハ液ヲ竄入セシムルコトアリ注意スベシ

療法 外科的療法ヲ行フ之ヲ大別シテ副鼻腔内手術法、齒槽突起ヨリスル手術法、犬齒窩ヨリスル手術法トス

A 副鼻腔内手術法

1 上顎竇口ヨリ洗滌スル法 診断ニ應用シタル方法ト同一ニシテ先ヅ古加乙涅、アドレナリン溶液ヲ中鼻道及ビ其附近ニ塗布シ或ハ中甲介前端膨大シテ妨害トナルトキハ豫メ之ヲ剪除シハルトマン氏又ハキリアン氏管ヲ挿入シ硼酸水、食鹽水等ヲ以テ洗滌ス

下鼻道穿開術

第百二十三圖 下鼻道穿開術ヲ示ス



タルトレヒキヤンヲ以テ穿通シ更ニ鑽子若クハ骨鉗子ヲ以テ其孔ヲ擴大シ適宜ノ彎曲ヲ有スル銳匙ヲ以テ竇内ヲ搔爬シ且ツ洗滌スル方法ナリ此法モ亦竇内ニ「ボリープ」骨瘍等アルトキハ一時排膿ノ減少若クハ歇止スルコトアルモ再發ヲ免レズ(第百二十三圖)

2 下鼻道ニ人工的穿孔ヲ造リ洗滌スル法 ミクリッツ氏或ハオノヂー氏クラウゼ氏等ノ穿開器ヲ以テ下鼻道側壁ニ大ナル孔ヲ作り或ハ電氣動力ヲ應用シ

慢性化膿性上顎竇炎

齒槽突起ヨリ
スル手術

副鼻腔ノ炎症

只前者ニ比スレバ搔爬シ能フヲ便利ナリトス

B 齒槽突起ヨリスル手術法 (コーペル氏法 (Covper))

舊時盛ニ施行セラレタルモ現今ニテハ主トシテ齶齒ニ基因スル症ニ應

圖四十二百第
器刺穿氏ヒウラク



圖五十二百第



ハルトマン氏穿刺器

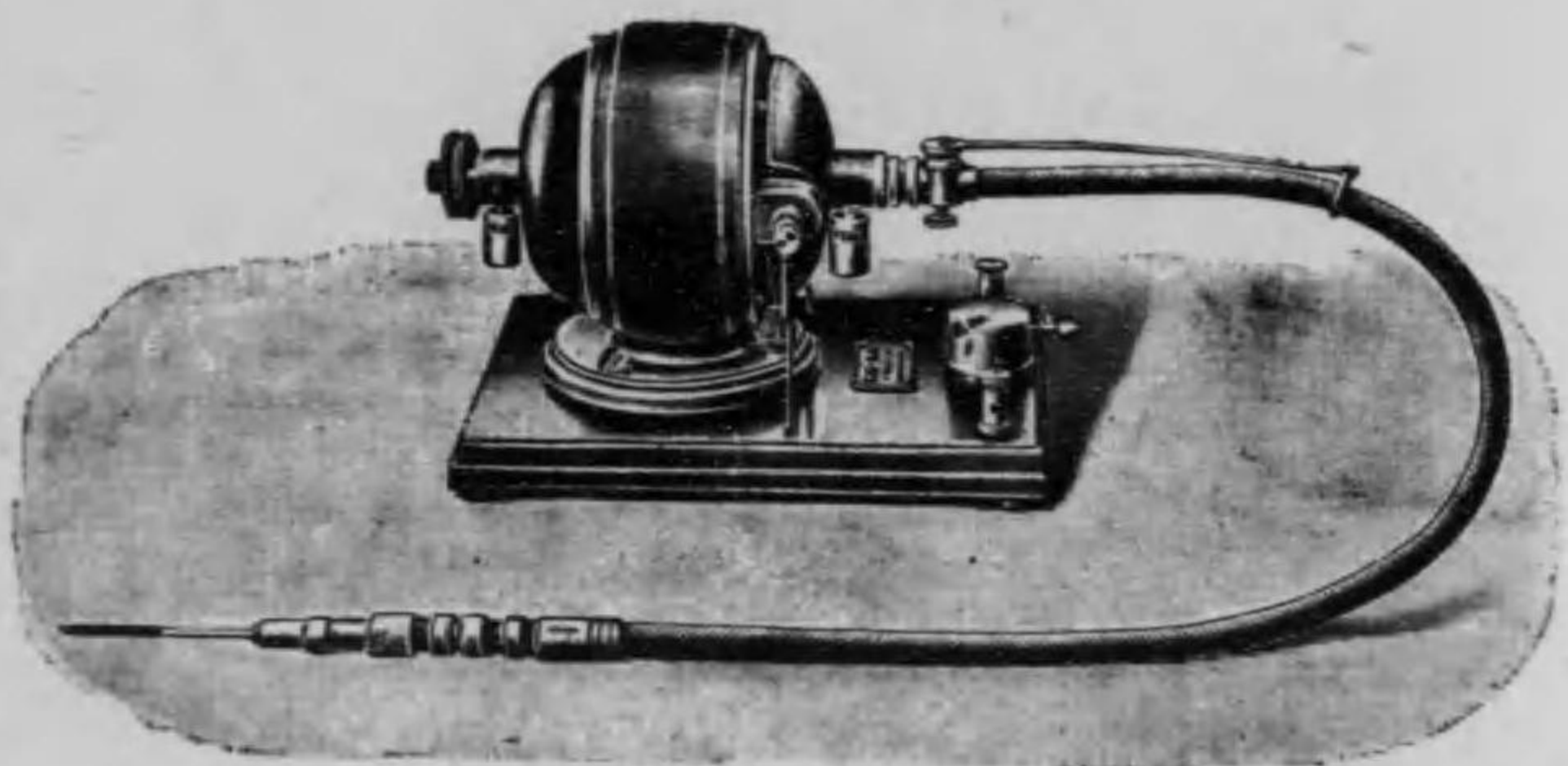
用スルニ過ギズ先ヅ臼齒ヲ拔去シ其創口ヨリ鑿錐又ハ電氣力應用ノ鑽子ヲ以テ顎竇ヲ穿通シ次デ洗滌スルナリ此法モ亦穿開孔大ナラズ故ニ充分内部ノ病變部ヲ搔爬スルコト困難ナルヲ以テ慢性症ハ根治セザルコト多シ

C 犬齒窩ヨリスル手術法 (根治手術)

犬齒窩ヨリスル
根治手術

デゾー、キユ
ステル氏法

圖六十二百第
機動原氣電



窺フルニ足ルベキ穴ヲ穿チ内腔ノ病變部ヲ除去シ綿紗ヲ挿入シ

1 デゾー、キユステル Desautel-Kuster

氏法 口腔内殊ニ齒齦、口唇粘膜及ビ鼻腔内ヲ清潔ニシ可及的無毒性トナシ全身麻醉(半麻醉ヲ可トス)又ハ局部處麻醉(中隔窓狀切除術ノ際ニ於ケル注射液三一四筒)ヲ行ヒ患側頰粘膜ト大小臼齒間ニ大ナル殺菌、ガーゼ片ヲ箱入シ血液ノ咽頭ニ流入スルヲ防ギ鈍鉤又ハステルンベルヒ氏舉唇器ヲ以テ口唇ヲ舉上シ、犬齒窩ニ於テ頰粘膜離轉部ヨリ約〇、五仙迷口唇ニ近ク長サ約三仙迷ノ横切開ヲナシ骨ヲ鑿開シ竇ノ内腔ヲ

慢性化膿性上顎竇炎

後療法

創口ハ開放シテ術ヲ終ル
後療法ハ三四日ノ後第一回綿紗交換ヲナシ爾來毎日交換洗滌シ
テ數月ニ至ル

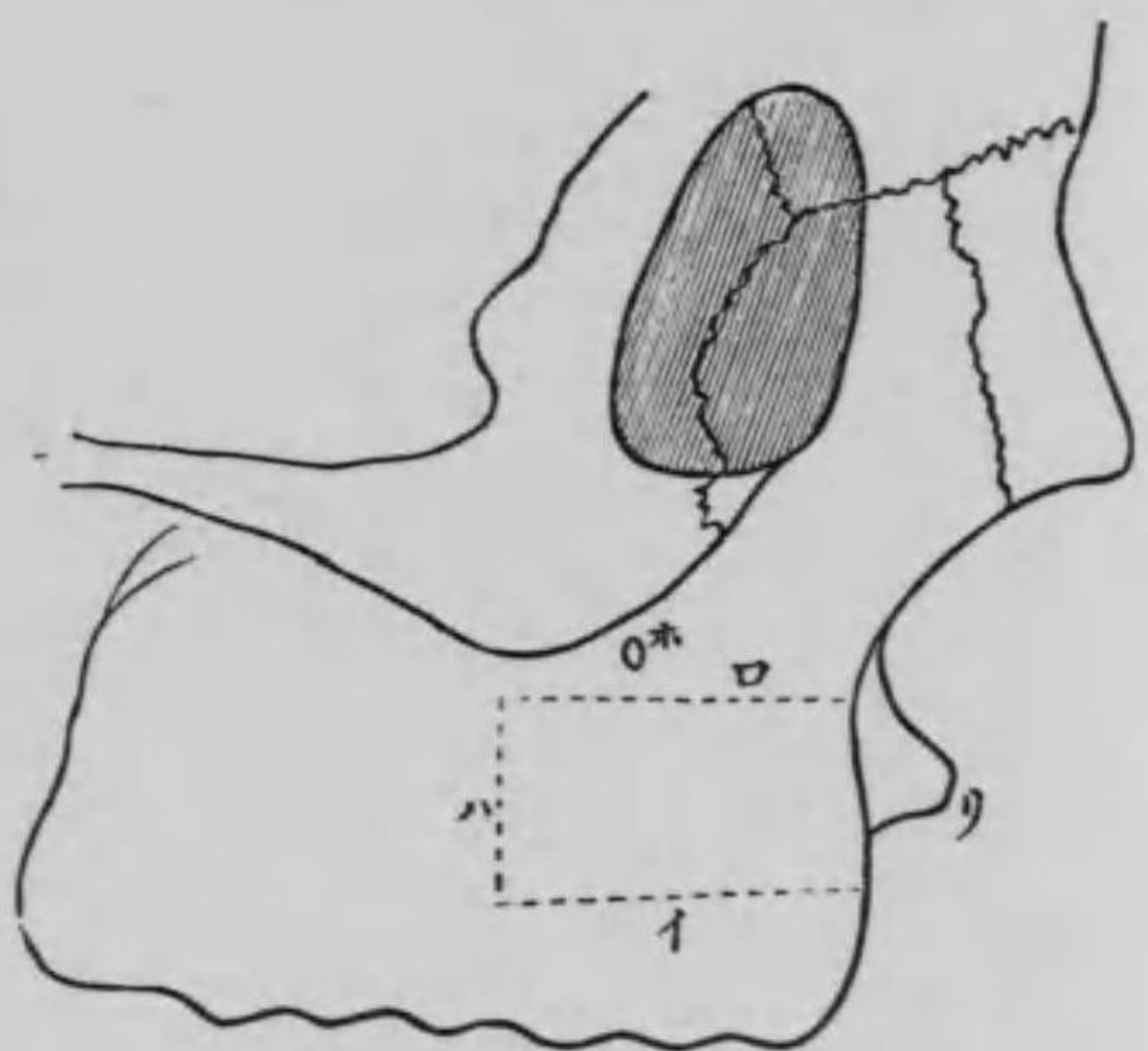
デンケル氏法

2

デンケル Denker 氏法

ベンニングハウス氏創意ノ法ニ基キ案出
シタル改良法ニシテ(同氏ノ報告ト同時ニ我國ニ於テ和辻博士モ
亦酷似ノ手術式ヲ發表セラレタリ)其ノ法先ヅ鼻腔ヲ洗滌シ十%
古加乙涅槃液(アドレナリン)少量ヲ加フヲ綿花ニ浸漬シテ下鼻道ニ
挿入シ次デ硼酸水ヲ以テ充分ニ含漱セシメ尙ホ沃度丁幾ヲ齒齦
及ビ齒牙ノ表面ニ塗布シテ清潔ナラシメ口腔前庭ニ「ガーゼ」ヲ挿
入シテ血液ノ流下ヲ防ギ都テデゾーキユステル氏法ニ於ケルガ
如ク準備ヲナシ口唇ヲ舉上シテ頰粘膜反轉部ニ於テ約半仙迷上
方ニ一%コカイン「オイカイン」若クハ「ボカイン」溶液(アドレナリ
ン)ヲ加フヲ注射シ上唇繫帶附近ニ起リ長サ約三仙迷ノ横切開ヲ
施シ直チニ骨膜ヲ共ニ切割シ之ヲ上方ニ剝離シテ上顎竇顔面壁
ヲ露出シ内方ハ梨子狀孔ノ側縁及ビ下縁ヲ明視スルヲ得セシメ

圖七十二百第



「イロハ」鑿開ス
ベキ顔面壁
「ホ」下眼窩孔
「リ」下前鼻棘

此處ヨリ少シク彎曲セ
ル狭小ノ骨膜剝子ヲ挿
入シテ下鼻道粘膜ヲ骨
膜ト共ニ側壁ヨリ剝離
シテ上顎骨鼻腔壁ヲ露
出セシム次デ鑿ヲ以テ
犬齒窩附近ヲ梨子狀孔
ト共ニ鑿去シ内腔ヲ明
ニ視察スルヲ得ルニ至
ラシメ而シテ後チ梨子
狀孔縁ヨリ漸次竇ノ内壁即チ下鼻道外壁ヲ鑿除又ハ鉗除シ深サ
三四仙迷ニ至ラシム(梨子狀孔ノ縁ヲ橋狀ニ殘スヲ可トスト唱フ
ルモノアリ)其上縁ハ下甲介基底ノ直下ニ至ルベク下方ハ上顎竇
底ト鼻腔底面トノ間ニ存スル骨隆起ヲ可及的低カラシムベシ而
テ其部ノ粘膜ハ鼻底ニ於テ基底ヲ有スル長方形瓣トナシテ竇内

